
絶対防衛の主人公

十六夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対防御の主人公

【NZコード】

N7176R

【作者名】

十六夜

【あらすじ】

前回書いている途中でこのサイトを退会してしまい、お気に入り登録して下さった皆様方に大変ご迷惑をおかけしました。

友達からの希望、そして応援で再びこの作品を復活させる事になりました。今回は前作での失敗も踏まえ、最初から書き直す事にいたしました。

更新速度は遅いですが、それでも読んでいただければ幸いです。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介はあつた方がいいという意見があつたので、投稿する事にしました。

読み飛ばしても大丈夫です。

ネタバレを含んでおり、さらに登場人物が増えることに更新していく事になると思います。

2011年8月4日

Fクラス第一チームメンバー追加

登場人物紹介

力オル・L・A・シンフォニー（力オル・ラスト・アパスル・シン
フォニー）

種族 不明

歳 一六歳

身長 一八一センチ

体重 六一キロ

髪色 月白

容姿 上の下

属性 拒絶

魔法タイプ 防御魔法

タイプ別型 絶対拒絶型

武器 野太刀・刃物全般・暗器・銃

趣味 本を読む事、音楽鑑賞、修業

好きなモノ 甘い物、安眠枕、武具、家事全般

嫌いなモノ 辛い物、五月蠅い奴、睡眠を邪魔するモノ

キャラ紹介

普段は穏やか。しかし、睡眠を邪魔されると容赦なく攻撃する。オッドアイで右目だけが赤色。女子に耐性が無く、クラスでは平気ぶつっているが内心気絶しそうなくらいきつい。

先生からもらった本の武術を習得するために最近は修業を行っている。貰ったその日でかなり使いこなせるようになる位武のセンスはある。本人曰くこの武術がしつくりきたとの事。修業をやらない日は基本的に寮で寝ている。

種族が不明なのは物心がつく前に親が死んだからである。魔力量がケタ外れて高いので人間、獣人、魔人のどれかだとは思うが本人すらそれを知らない。

戦い方の紹介

拒絶壁を飛んで来たモノを弾き返したり、自ら上に刃物を投げそれを弾く事で攻撃をする。拒絶魔法は攻撃にも使えるが、本人はまだそれを使えない。

絶対領域を張つており、大概の魔法は防ぐ事が出来るが、障壁に使つている魔力量より多い魔力量の魔法が来たら破られる。しかし、魔力量だけは異常と言えるレベルを持つているのでまず破られる事はないだろう。

シン・ステファニー

種族 獣人

歳 十六歳

身長 一七四センチ

体重 六三キロ

髪色 茶

容姿 上の中

属性 風・雷

魔法タイプ 攻撃魔法

タイプ 別型 障壁破壊前衛型

武器 大剣

趣味 戦う事、食べる事、ゲーム

好きなモノ カナ（彼女）、仲間、食べ物

嫌いなモノ カナや仲間を傷つける者、怖いモノ（幽霊等）

キャラ紹介

どちらかと言えばクールな方。しかし、幽霊等が苦手と言つ情けない一面も持つ。カナ・クロイツンと付き合つていて、カナが傷つけられたり、カナに対し色目を使う奴には容赦ない。食べる事が好きだが体重は平均的である。どれくらい食べるかと言つと、一食平均で炊飯器一杯分位。しかし、本気を出せばこれの三倍は食べれるとか。学校から近くの商店街の飲食店では“バイキングキラー”や“食べ放題の魔王”等の異名が付けられている。何やら隠し事があ

るらしい。

狼の獣人で身体能力は高い。しかし、獣人だからといって耳が付いていたりなどはない。獣化をすれば狼にも、漫画で出てくるように一部を獣化する事も出来る。

戦い方の紹介

自らの身体強化魔法を使い、身体を強化し相手に突っ込んで相手の障壁を無視して大剣を振り下ろす力任せのスタイル。魔法の詠唱速度も速く、無詠唱で中級魔法も使える。

さらに、部分獣化により圧倒的な力で相手を叩き潰す事も出来る。しかし本人は獣化をするのは腹が減るから嫌だとか。

力ナ・クロイツン

種族 獣人

歳 十六歳

身長 一六九センチ

体重 五四キロ

スリーサイズ 八三 五八 八五

髪色 黒

容姿 上の上

属性 土

魔法タイプ 攻撃魔法

タイプ別型 拡散重視中衛型・大魔法用後衛型（主に大魔法用後衛型）

武器 杖

趣味 情報収集、料理、物作り

好きなモノ シン（彼氏）、情報源、廃墟

嫌いなモノ シンや友達を傷つける者、いじめ

キャラ紹介

特徴的なしゃべり方で周りの雰囲気を盛り上げる少女。シン・ステファニーと付き合っており、シンにゾッコンである。料理が得意で何時もシンの弁当などを作っている。廃墟が好きと変わつており、怖いモノが苦手なシンにとっては結構きついらしい。自分の部屋も一部廃墟の様な感じにしているとか。

鳥の獣人で、部分獣化する事も可能だとか。

戦い方の紹介

後衛で大魔法を撃ち、相手が近付いてきたら、拡散型の中衛魔法に切り替えるといった独特的の戦い方をする。大魔法を使うとき詠唱ありだが最上級魔法も使えるらしい。しかし、無詠唱ならば中級の大魔法が限界だ。

部分獣化で翼を生やし、空からの魔法攻撃をする事もある。

レナ・ゾ・アストレイ(レナ・ユグドラシル・アストレイ)

種族 魔人

歳 十六歳

身長 一五五センチ

体重 四四キロ

スリーサイズ 七一 四七 七〇

髪色 灰銀

容姿 上の上

属性 主に闇(しかし、完全の三つ以外なら全て使える)

魔法タイプ 召喚魔法

武器 銃

趣味 お昼寝、日向ぼっこ

好きなモノ 友達、カオル、可愛いモノ

嫌いなモノ 辛いモノ、いじめ

キャラ紹介

一言でいえば無口な少女。身長が低い事と胸が小さい事を気にし

ている。数多くの召喚獣と契約を交わしているため、創造、拒絶、時空の完全以外の属性は全て使える。しかし、元々闇しか使えなかつたので、自分で魔法を使うとしたら闇属性だ。カオルに好意を抱いている少女の一人。

堕天使の魔人でその力の一部が使える。魔人だからといって魔神化しなければ、見た目は普通の人間と何ら変わりはない。

戦い方の紹介

召喚魔法を主とした戦い方。召喚獣を一遍に二~三体平均してだし、相手を囲んで一斉に攻撃をする。魔力が多く、一般人が百の魔力を持っていたとしたら、レナは十万の魔力を持っている（カオルは一億程だが）。故に、一遍に多くの召喚獣を出しておける。

魔神化により、**自ら**の身体能力や魔法能力を上げる事も出来る。サリエルの力の邪視イビル・アイが使えるようになるが、サリエルの様に見たモノを殺すのではなく、見たモノから魔力を奪うと言つ感じに変換されていて、それ以外にも邪視の能力はあるらしい。

アリア・ファイリー

種族 人間

歳 十六歳

身長 一六八センチ

体重 五四キロ

スリーサイズ 九一 六三 九二

髪色 オレンジ

容姿 上の中

属性 炎

魔法タイプ 攻撃魔法

タイプ別型 障壁破壊前衛型

武器 槍

趣味 買い物、勉強

好きなモノ 仲間、カオル?、ゲーム

嫌いなモノ 人の死、ナンパ

キャラ紹介

正直になりきれない少女。自分の気持ちを伝える事が下手である。レナほどでは無いが、カオルに好意を持つているようだ。しかし素直になりきれないため、思いを伝える事は難しいだろう。プライドはどうらかと言えば高く、他人に負けないようによく努力をしている。勉強も出来るので結構頼りになる。

戦い方の紹介

シンと同じで相手の障壁を破壊するために前衛に突っ込む。しかし、槍なので力押しではなく頭を使い、障壁を破壊することに専念する。使用できる魔法も多く、その気になれば中衛での攻撃も可能。しかし本人は前衛が好きなので、中衛に回る事は無い。

ミリア・スレリア

種族 神人と人間のハーフ

歳 十六歳

身長 一六五センチ

体重 四九キロ

スリーサイズ 九五 六二 九〇

髪色 ピンク

容姿 上の上

属性 水・雷・光

魔法タイプ 回復魔法

タイプ別型 魔力回復型・回復特化型

武器 弓

趣味 料理、魔法薬の勉強、裁縫

好きなモノ 日記、植物、カオル？

嫌いなモノ　怖いモノ、ナンパ、いじめ

キャラ紹介

ふだんは優しいが、恋に関しては少し病んでいる部分を持つ少女。胸が大きく、男性からイヤラシイ目で見られるのを気にしている。しかし、アリアとよく一緒にいるのでそう言つ男は大概アリアに追い返されてしまう。カオルに助けてもらつた時から、少しカオルの事が気になつてゐるようだ。

神人よりのハーフなのだが、育つた環境が魔法使いばかりだったので魔法を使う事になった。

戦い方の紹介

主に後衛で味方に回復魔法をかける役。しかし、それ以外の時は持ち前の弓に自分の魔力で作った矢を放ち攻撃している。弓には仕掛けがあり、真中から別れ双剣にする事も出来て、近づいてきた敵はこれで斬り倒す。普通に魔法も使え大概は、戦いの補助をしてくる。

神人としての能力もあり、科学的な魔法攻撃も可能である（弓矢を利用し、雷属性の魔力を使つたレールガンなど）。

シンヤ・クドウ・ラヴァインファン

種族 魔人

歳 二十五歳

身長 一八七センチ

体重 七五キロ

髪色 黒

容姿 上の下

属性 炎・風・雷・血

魔法タイプ なし（一応、攻撃魔法）

タイプ別型 なし（一応、障壁破壊前衛型）

武器 ナックルダスター

趣味 睡眠、寝る事、昼寝

好きなモノ 安眠枕、ベッド、抱き枕

嫌いなモノ 睡眠を邪魔するモノ、面倒くさい事、生徒を傷つける者

キャラ紹介

一言でいえば面倒くさがり。自分から面倒事に首を突っ込む事は余りない。しかし、自分の生徒が関与した場合は全力を出す。教師としては生徒に恐怖を与えることで黙らせたりする事もある。しかし、教師としての人気は高い。少しバトルジャンキーな一面も・・・
・ そのせいで一部の 生徒からは“ 眠れる魔王 ”と恐れられている。

鬼（酒呑童子）の魔人で身体能力は飛びぬけて高い。魔力は普通だが妖力と言う別の力も持つ。

戦い方の紹介

魔法タイプもタイプ別型も決まっては無く、攻撃魔法だろうが防御魔法だろうが回復魔法だろうが全てが使える。学生だったころは一応、攻撃魔法の障壁破壊前衛型だつたらしい。一瞬で間合いを詰め、魔法で強化した拳を相手に叩きこむ。パワーもスピードもあり、殆ど隙がない。

魔神化をしなくても圧倒的なパワーがあるが、それをする事によりさらに強くなる。魔神化、もしくは部分魔神化する事により彼の攻撃は全てが一撃必殺レベルまで跳ね上がる。また、妖力を使った身体強化も可能になる。

狂咲
くわいざき

歎
なげき

種族 人間

歳 十六歳

身長 一七一センチ

体重 四九キロ

髪色 黒

容姿 中の上

能力 出才チ

能力タイプ 因果律干渉

武器 鈍器全般

趣味 ゲーム、音楽鑑賞

好きなモノ 魔法が使えない人、能力者

嫌いなモノ 魔法が使えないと言つだけで蔑む者

キャラ紹介

何だ、何だよ、何ですかの様に三段活用？を口癖としてキャラを作っている少年。カオルとリリナの幼なじみ。魔法が使えない落ちこぼれとして扱われていたが、異能力を持っており、学生レベルなら簡単に殺す事もできる。

能力の紹介

能力名は出オチとふざけているように見えるが、その力は因果律を反転させると言うバグキャラの様な能力。

因果律の反転とは、例えばビルが老朽化により倒壊したと言う事が起ったとする。これはビルが老朽化すると言う原因が、ビルの倒壊と言う結果の関係となる。しかしこの能力を使い因果律を反転させれば、ビルの倒壊ため、老朽化したと言つようになる。

リリナ・ヴァンワインクル・クルセイディア・オーディアン

種族 人間

歳 十六歳

身長 一五九センチ

体重 四六キロ

スリーサイズ 八五 五五 八三

髪色 緑

容姿 上の中

能力 人形遣い

能力タイプ 物理干渉

武器 糸系統全般

趣味 人形作り、読書

好きなモノ 人形、本、料理

嫌いなモノ 魔法が使えないと言つだけで蔑む者

キャラ紹介

人形作りが趣味と言うとても器用な少女。カオルと歎の幼なじみ。歎と同じく魔法は使えないが異能力を持つている。魔法が使えないが容姿はかなり良く、学生の中でも少し実力を持つた奴に犯されそうになる事もあるが、返り討ちにしている。

能力の紹介

能力名の人形遣いがそのままの能力とどうえても良い。能力により指先から出される糸を使い人形を操ったり、敵を捕えたりする事が出来る。糸の強度や細さ、長さは自在に変える事が出来るため、

糸で物を切断する事も可能。

能力が能力の為前衛で戦う事は絶対にないが、人形を操り前衛で戦う事も可能である。

わんへいろん
王黒竜

種族 魔人

歳 十六歳

身長 一八三センチ

体重 六九キロ

髪色 赤

容姿 中の中

能力 魔穿鉄拳

能力タイプ 物理干渉

武器 手甲

趣味 武術の修業、中華料理の食べ歩き

好きなモノ 中華料理

嫌いなモノ 魔法が使えないと言うだけで襲む者

キャラ紹介

セルシー＝ア 国内にある十一の公国の一つ、中華公国から来た少年。喋り方に少し特徴があるが、かなりのイケメンで体つきもいいことから一部女子に人気がある。魔法は使えないが中華公国建国時から伝わる武術で、免許皆伝の実力を持っている。

天使の魔人で身体能力がかなり高い。魔力は皆無だが、それに見合う身体能力が備わっている。

能力の紹介

能力名は魔穿鉄拳。魔を穿つ鉄拳と書くだけあり、魔法を中心として攻撃する者にとっては天敵ともいえる能力である。魔力により創り出されたモノを破壊する事が出来るため、障壁なども軽々と破壊してしまう。

前衛で相手の障壁を破壊し、自らの武術により攻撃をするという典型的な障壁破壊前衛型である。

エミリー・リップル

種族 人間

歳 十六歳

身長 一六九センチ

体重 五六キロ

スリーサイズ 九五 六一 九一

髪色 青

容姿 上の下

能力 串刺好くじきじょう

能力タイプ 魔法干渉

武器 槍

趣味 スイーツの食べ歩き、ウインドウショッピング

好きなモノ スイーツ全般、串刺のモノ

嫌いなモノ 魔法が使えないと言つだけで蔑む者

キャラ紹介

趣味だけを見ると普通の少女。リリナと同じく、魔法が使えないことから犯されそうになる事が何回もあったが、その度に返り討ちにし、犯そうとしてきた相手を串刺にして放置している。今のところ串刺にされ死んだ者はいない。

能力の紹介

能力名は串刺好。自らの槍が刺さった相手に、銀の巨大な針を突き刺すと言う、えげつない能力である。針を刺す場所の指定は心臓や頭等、命に直接かかわってくる所以外であればどこでも指定する事が出来る。

種族 人間

歳 十六歳

身長 一四九センチ

体重 四十キロ

スリーサイズ 七二 五三 六九

髪色 藍

容姿 上の中

能力 亡飲亡喰

能力タイプ 魔法干渉

武器 弓

趣味 食事、料理、人の世話

好きなモノ 食べ物全般

嫌いなモノ 魔法が使えないと言うだけで蔑む者

キャラ紹介

食べる事が大好きな大食いの少女。しかし体系は痩せていく方と言え、食べている姿を見た女性たちに羨ましがられている。模擬戦

闘で攻撃する時に、謝つてから攻撃する等少し変わった一面もある。

能力の紹介

能力名は「飲亡喰」。自らが振れた者、自らの攻撃が当たった者に激痛を与えながら魔力を奪っていく。弓を得意とし、リリナと後衛から援護を中心として戦っているが、能力を駆使して前衛で戦う事も普通にできる。

獄神 焰

種族 神人

歳 十六歳

身長 一七六センチ

体重 六八キロ

髪色 黒に一部赤のメッシュ

容姿 上の上

能力 見敵必殺（サーチ&テストロイ）

能力タイプ 物理干渉

武器 銃

趣味 銃の手入れ、新たな銃の調達

好きなモノ 銃火器全般、銃弾

嫌いなモノ いじめ

キャラ紹介

自他共に認めるかなりのガンヲタ。一人称は俺様で、かなり傲慢。しかしイケメンである。そのため、ドが付くMでガンヲタでも気にしないと言う女性からはかなり人気がある。

神人の為、魔法が使えないと言う所での差別は受けなかつたが、かなり酷いいじめを受けていた。

能力の紹介

能力名は見敵必殺。自らが撃つた銃弾が確実に当たると言う能力。避ける事は出来なくとも防ぐ事が出来るので、絶対に一撃必殺と言う訳ではないが、自らが指定しない場合は確実に頭に当たるように設定されている。

Prologue (前書き)

どうも皆様十六夜です。この度は友達からの希望、応援により再びこのサイトに登録し、この小説を復活させる事にいたしました。以前読んで、お気に入り登録をして下さった多くの皆様方には大変ご迷惑をおかけいたしました。

データを消してしまったので、最初から書き直す事になり更新が遅くなりますが、もしよろしければ暇なときなどに読んでいただければ幸いです。

「はあ……、今日から学校か……嫌だなあ……」

どうも皆さんこんにちは。僕の名前はカオル・L・A・シンフォニー。今日から、セルシニア魔法学園高等部に通う十六歳の少年さ。僕が学校に行くのを嫌がるのには理由がある。

一つ目が魔法学園だと言つ事。僕は昔から極端に魔力量は高かつた。と言うより無限に近かつた。しかし僕は攻撃魔法が全くと言つていいほど使えない。だから周りからは落ちこぼれと言われていた。だからこそ、魔法学園に通う事を嫌がつてゐるのだ。

そして二つ目、高等部は全寮制になると言つ事。これは落ちこぼれと言われている僕にとっては物凄く辛い。一日中落ちこぼれと言われ続けるからだ。しかも高等部は義務教育となつており四年間通わなければならぬ。僕としてはストレスで胃に穴があきそうだ。

そして最後三つ目、これが一番つらい。僕が今から通うセルシニア魔法学園高等部は女子の人数が圧倒的に多い。全校生徒が約千三百人ほど、そのうち約千一百人が女子なのだ。苦手と言う訳ではないが僕が生まれて十六年、女子と話した回数なんて指で数えれる位しかない。つまり女子に耐性が無いと言う事だ。まあある程度は丈夫だけど。しかしこれから女子にも馬鹿にされるとなるとかなり辛い。まあそのほかにももっと大きな理由は有るが。

「ハア・・・・帰るうかな」

ホントに行きたくない。でもウジウジ悩んでも仕方が無い。僕はそう思い足を動かした。そして目の前にあつた校門に入つて行つた。

2

この物語の世界、リベルは科学と魔法の両方が発達した世界です。主人公はその世界の中心部となるセルシニアと言う都市、正確には学園都市に住んでいます。ちなみに魔法学園の高等部は世界に全部で五つしかなく、このセルシニア魔法学園は小等部から大学部まであります。全てがエスカレート制で勉強しなくても大学部まで卒業ができます。そして高等部からは普通科と工学科と理学科と農業科、そして魔法学科との五つに分かれます。

そしてこの世界の特徴として、男より女の方が魔力が極端に多いと言う事。つまり魔法学科に進むのは女子中心と言う訳です。何故そんな中主人公が魔法学科に行かされたかと言うと、元々普通科に通いたかった彼ですが、その魔力量等から魔法学科に無理やり入れられたようなものです。ちなみに小等部では通常の授業しかありませんが中等部からは攻撃魔法の授業も入ってきます。これは男子も受けなければなりません。だから主人公は落ちこぼれと言われているのです。

次に魔法についてです。

魔法は主に、攻撃魔法、防御魔法、回復魔法、召喚魔法、捕縛魔法、補助魔法の六つに分けられます。

攻撃魔法は、障壁破壊前衛型、拡散重視中衛型、大魔法用後衛型の三つと全てに適応した完全型の四つに分けられます。

障壁破壊前衛型は名の通り相手の防御障壁を破壊する型です。一

撃の攻撃力が高く魔法詠唱も短い隙が出やすいタイプです。

二つ目の拡散重視型は、一発一発が弱い分一回にかなりの数の魔法を放つタイプです。魔法詠唱も短く、強くなれば魔法の数が増え攻撃力が上がる分中衛型を選ぶ人が多いです。

三つ目の大魔法用後衛型は、一撃で戦いを終わらせるような大きな魔法を撃つタイプです。詠唱が長く、魔力も多量に使う分、最強の一撃を生み出せるタイプです。

そして完全型、これは上記の全てのタイプが使え更に、創造の力を持つた者のみが使用できるタイプです。

防御魔法は、魔法防御型、物理防御型、結界指定型、絶対拒絶型の四つに分けられます。

魔法防御型は名の通り魔法を防ぐ防御魔法に特化したタイプです。そして物理攻撃に対する防御魔法を張れるのが物理防御型です。大体の防御魔法を覚える人はこの二つを両方覚えます。

そして結界指定型、これは使える人は少ない難しいタイプです。

これは自分が範囲や対象物を指定して魔法と物理の両方を防ぐ結界を張るタイプです。しかしうまく使えば相手の使う魔法に制限を掛ける結界を張ったりする事も出来ます。

そして最後、絶対拒絶型。これは現在の世界では使える人はいないと言われる位難しいタイプです。相手の攻撃全てを拒絶する絶対領域を常時張り出し全ての攻撃に耐える事が出来ます。

回復魔法は、魔力回復型、回復特化型、蘇生型の三つに分けられます。

魔力回復型は自分の魔力を対象者の魔力に変換して回復させるタイプです。少し変わつており余り使おうとする人が少ないタイプで

す。

次に回復特化型、これは魔力以外を回復する普通のタイプです。

味方の状態異常や怪我の治療、病気の治療などのタイプです。

最後に蘇生型。これは絶対拒絶型と同じで現在使える人はいないタイプです。このタイプは上記二つともできさらに、寿命を全うしていない死者を蘇らせることのできるタイプです。これを持つ者は時空の力を持っています。

召喚魔法はモンスター や精霊を召喚して戦う変わったタイプです。術者は召喚獣に魔力を供給し召喚獣は魔力に応じて強さを変えて行きます。術者は召喚獣を召喚したら魔力を供給する以外は特にすることはありません。しかし、モンスター や精霊とあらかじめ契約しておく必要があり、攻撃や防御、回復魔法に比べたら使う人は少ないタイプです。

捕縛魔法は相手を捕まえるためだけの魔法です。そのため使う人は極端に少なく、大概使える人は警備や警察などになります。

最後に補助魔法。これはモノを浮かせたり、それを動かしたりなどをする簡単な物です。小学校の最後らへんで口頭だけで習う簡単な物です。

次に魔法の属性についてです。

魔法の属性は一般的に炎、水、風、雷、土の五つです。これは基本となる属性で、扱える人も多いです。次に光、闇、血の三つが来ます。光と闇は魔力を消費して使う魔法ですが血は血液を使い魔法を放つ独特な属性です。これら三つの属性は特殊属性と呼ばれ、基本属性と違い使える人も少なくなります。そして次に創造、拒絶、時空の三つが来ます。これは本当にまれで使える人は殆んどいません。しかし拒絶以外は攻撃に特化しておらずあくまで最強の補助の

様なものです。これら三つは完全と呼ばれます。

次は存在する生物についてです。まずは人間。魔法を使える種族の一つです。

次に獣人。これは獣と人間のハーフです。基本的には人間と同じなのですが、獣化と言われる魔法が使え、自らを獣の姿に変え身体能力を上げると言う魔法です。その他にも、基本的身体能力が高かつたり等もします。しかし、魔法は若干人間に劣ります。

次に神人。これは魔法ではなく、科学と言う力を武器にした人類です。場合によっては魔法よりも厄介な力を持つています。これは人間と結託をして世界を作っています。

次に魔人。これは魔獸、天使、悪魔と呼ばれるモノを体内に封印している人類です。魔法の力は人間と同等かそれ以上、身体能力は獣人と同等かそれ以上と言われています。魔神化と呼ばれる魔法を使い、自らを魔獸、天使、悪魔の姿に変える事も可能です。これも人間と結託して世界を作っています。

そして最後に魔族です。魔族と言つても種類は多く存在し、先程紹介した魔獸もその一つです。代表的なのはドラゴンや吸血鬼等が居ます。この魔族の世界は、上記で紹介した種族の世界と別れ、リベルの四割が魔族の世界です。普通は人間界と魔族界と言う感じで別れています。ちなみに人間界の面積がリベルの約五割、魔族界が約四割で、残りの一割が禁足界と呼ばれる未開の地となっています。

Prologue (後書き)

前回の作品より、少し設定が多くなっています。

覚醒せし力（前書き）

今日の更新はここまでです。

覚醒せし力

「えー諸君、入学おめでとう。面倒くさいからこれで入学式を終わりにします！」

この場にいた全員がこける。おいおい、そんなあいさつで大丈夫か校長？ 何でそんなに挨拶を簡単にしたんだよ！ いや、これ挨拶って言つのか？

僕はそう思うが、本当に入学式が終わつた様でクラス分けのある闘技場の場所を説明している。僕はこんな入学式で本当に良いのかと思いながら闘技場に向かつた。

男子が少ないから視線がすごい。体制のない僕にとつては地獄？ でしかない。僕はソソクサと闘技場に向かつ。ちなみに、友達がないから僕は一人で闘技場に向かつている。おい誰だ？ 悲しい奴つて思つた奴は。

そんな事を思いながら一人歩く僕。

「はあ…、どうせFクラスの最下位だろうな」

僕は少し皮肉つた感じでそう言つた。クラスは上から順にS>A>B>C>D>E>Fとなつていて。僕は魔法が使えないから絶対にFだろうな。

「ハア、嫌だな」

僕はそんな事を呴き闘技場に入つた。

するとそこには僕よりも早く二人の女の子がいた。僕は二人に話しかけることなく教師の元へ向かつた。

「おや、早かつたね。普通なら友達と一緒に来るんだけど……。
・その様子じや友達はいないのかい」

笑いながら冗談で言つてこむつもりの先生。しかし、これが冗談じゃないからグサリと来る。

僕は若干申し訳なさそうに声を上げる。

「あ、あの～先生」

僕は顔をそらしながら先生を呼ぶ。

「ん？ どうしたんだ？ 友達がいない少年」

僕のハートにグングール（槍）！ 冗談になつてないですよ先生。
僕は俯きながら一言言つた。

「あのですね……僕、本当に友達いないんですよ……」

僕の一言で空気が凍りつく。先生は動きすら止めた。ウワア……、
やっぱ言わぬ方が良かつたかも……。

先生は銜えていた煙草を落とした。そして、焦つたように口を開く。

「あ……その何だ……すまなかつたな……ハハハ（焦）」

焦つているのばればれですって先生。（焦）つて口で言つちゃつてたし。

「まあそんな事より、始めませんか先生？ 他にも新入生はいっぱいいますし」

「え、ああそうだなー。そつだそつじよつー。早く済ませる事は悪い事じゃないからなー。」

相当焦つてるなこの人。自分が此処で新入生のクラス分けを行うつて目的を忘れていたみたいだし。

「でも、よろしくお願ひします」

僕はそう言つて頭を下げる。そして、構えを取る。

「じゃあ、始めようか」

そう言つと先生は攻撃をしてきた。僕はそれを必死に避ける、避ける、避ける。とにかく避け続けた。途中危うい部分もあつたがとにかく避け続けた。

ちなみに、何故こんなにも避けた事が出来るのかと詰つと、魔力が使えた事からいじめを受けたからだ。皮肉な事にその時、攻撃を避けたり防いだりしている内に上手くなつたのだ。

「どうした？ 避けてばかりじゃ意味がないぞ？」

先生はそう言つて挑発してくる。ええ、攻撃はしたいよしたいですよ！しかし、接近戦だと実力差がわかり切つているし、かと言つて遠距離だと魔法は使えないからどうしようもない。

とりあえず僕は、先生の挑発を挑発で返す。

「そう言つ先生も、さつきから一発も僕に攻撃出来てない様ですが」

ニヤリと笑いながら先生にそう言ひへ。まあ、年上だし」の程度で

怒るなんて事は

「 んだとグルア！」

あつたみたいだ…。と言うよりヤバいよ！ 先生怒つて魔法使つ
氣だよ。しかも最上級レベルの奴！ 僕死ぬつて。
僕は先生が出し始めた魔力を感じて冷や汗をかいた。

「全では燃える、その火焔に

私は炎の霸王と契約せし者、さあ霸王よ、今こそ我にその力を！
大地は燃え去り、天は焦がれ、万物は全て死に絶えるだろう！
炎属性上級魔法「燃え盛る世界」

先生の詠唱が終わり魔法が発動すると、辺りは炎に包まる。

「……ちょ、冗談になりませんでこれ！」

「ハツハツハツハツハ、終わりだ！」

先生は僕の声が聞こえていないのか、笑いながら魔法を放つてき
た。

あ、コレ死んだ…。そう思つた瞬間、火山が爆発した様な音が響
いた。

「熱い、熱い、熱い、熱い！ つて熱くない！？」

どう言う事だ？ 僕を中心に一メートル位に火がないぞ。何が起
こつたんだ？

そんな事を思いながら、僕は炎の中から出た。

「ハツハツハツハツハツハ、終わりだ！」

俺はそう言って新入生相手に上級魔法を使つた。使つてしまつた。ヤベエ！ これ絶対にあいつ重症だつて！ どうしちゃう……ばれたら絶対にクビだよな。しかも教員免許剥奪で……マジでヤベエ……。

俺はノリでこんなことをやってしまった事を非常に後悔した。魔法を使ってから思い出したのだ、相手が新入生だつて事を。

「おこおこおいおい、死んじまつてないだろうなこれ？」

正直さつきの友達の話よりも焦つている。さつきもやらかしたと思つたが、またやらかしたよ。さつきは笑つて誤魔化せたが、今回は誤魔化せんぞ。

俺がそんな事を思つていると、火の中から薄らと影が見えた。

「まだ生きているー よかつた…」

少し安堵の息を漏らす。ああ、死んでなくて良かった。
そう思つていると奴が火の中から出てくる。

「！？ 無傷だと…」

と詰つより、服に汚れすらないだと… どう言ひ事だ…。
俺はそんな事を思いながら再び構えた。

「くはッ！ まだ構えているし」

火から出た僕の目に、一番最初に移った人が魔法を撃つた張本人で、しかもまだ戦闘態勢だなんて……整整だ。

「……成程、無傷だからまさかとは思ったが、君は結界指定型の防御魔法の使い手だったのか」

え、 そうなのか？ 僕自身、初めてできた魔法だから何が何だか分からぬ。

「しかし、今魔法を防いでいる状態じゃ物理まで頭が回らないだろう！」

そう言つと先生は再び攻撃を開始してきた。

「結界を破る事は難しいが、出来ない事も無い！」

すると先生は先生は、手に魔力を集中させた。

「障壁破壊用攻撃術だよ。覚えておくんだ！」

そう言いながら攻撃してきた。しかし

パキン

高い音が響く。先生の腕は弾かれ、反動で腕が折れている。

「なー？ 結界じゃない！ ならそれはー！」

先生は一人目を見開く。僕の事ですよね？ 何なんですか一体？

「絶対拒絶型か…………本当に存在していたんだな…」

「マジですかー？」

「嘘だろッ！ 僕にそんな力があつたなんて…………でも、攻撃魔法が使いたかった…。だって男の子だから…。」

「マジですかって、お前知らなかつたのか…」

先生は呆れた顔で此方を見る。僕はそれに頷く。

「いやだつて…、今まで魔法が使えませんでしたから…」

「そいつが、まあ中学までは攻撃魔法をかじる程度だからな…………魔法はやらないから使えないと思つていただけだろ」

成程、よく考えれば確かに防御魔法はやつた事がなかつた。つまり、僕は防御魔法しか使えないと言う事だな。

「できれば、攻撃魔法も使いたかった…」

僕の呟きを聞き、先生が苦笑する。

「まあそつ言つたな。そうだ、お前にこれをやうひ

やうひして先生は一冊の本を渡してきた。

「……なんですかこの汚い本

嫌がらせか？ 嫌がらせなのか？ これを僕にどうひじらって言つんだ？

「汚い本つて……まあ否定はせんが。でもしかし、その本には遙か昔に使われていた武術が記してあるんだ。俺は習得できなかつたが、お前なら出来そうだし」

「何か根拠でも？」

「まあな。その本を書いた奴が絶対拒絶型つて言われているんだ。だからさ」

先生はそう言つて煙草に火を付ける。

「まあ、上級魔法を使つたお詫びと言つ事でな

その言葉に僕はそうですかと返し、本を頂く事にした。

「で、此処からが本題だ。君のクラスについてだ」

「あ、はい」

先生は煙草を吸いながら、僕の方を見た。

「君は、Sクラスに決定だ」

「…………ハア？」

「いや、だからSクラスに決定したって言つたんだよ

ああ、成程……つて

「 ハアアアアアアア！？！？」

いやいや、この僕がSクラス？ 何で何でだ何ですとの二段活用！？

「五月蠅いぞ。それにSクラスで当たり前だろ。お前以外に絶対拒絶は見たことないし、しかも上級魔法を無傷で防ぐ事が出来るレベルだぞ。当然の結果だ」

「いや、ですが」

「あ～、異論は認めん！ タツミと教室に向かうんだ！ 後がつつかえているだろ！」

先生はそう言つと僕を闘技場の外に投げ飛ばした。

「ウワアアアアアア……つと！」

空中三回転ひねり！ そしてまじとに着地！ 結果は腰を痛める！ 最悪だ…。

腰を痛めたので擦りながら僕は教室に向かった。

教室に付きドアを開ける。するとそこには誰もいない。まあどうだろうな、僕が一番最初に模擬戦したみたいだし。

「ハア……寝ますか」

幸い、何処に座るかは決まってないみたいだ。僕は窓際の一番後ろの席に座り机に伏せた。

バコツ

「つ……誰ですか？」

僕は突然誰かに叩かれ起きた。すると横には僕がさつき戦った先生が居た。

「よつ、さつきぶりだな。随分気持ちよさそうに寝ていたから起こした。ほら、周りを見る。女の子の方が多いぞ、よかつたな（笑）」

……何ニヤニヤしてやがる。

「おお、怖い怖い（笑）そう睨むな。ほら、自己紹介君が最後だ。とつととやれ」

「……なんか字が違つ気がしますけど……まあ良いでしょう」

僕はそう呟き前に出た。改めて教室の中を見まわす。と言つてもこの教室に居る生徒は僕を含わせて五人、少ないな。男が一人に女が四人。まあ自己紹介をするか。

「えっと、僕の名前はカオル・L・A・シンフォニーだ。よろし

「　自分の魔法のタイプとその中のタイプも言えよ。後使う武器も」

あのクソ教師め。わざわざ遮つて言つ事かよ。まあ良いか。

「えつと魔法自体のタイプは防御魔法。その中のタイプはええつと……絶対拒絶型だつけ？ 確かそうだつたと思うよ。使う武器は……大体刃物全般かな？ 大体の物は使えるんだけれど。でも、一番得意なのは野太刀だね。まあよろしく」

僕が自己紹介を終えると少しづわめいた。絶対拒絶型ってそんなに珍しいのかな？

パンパン

「はい静かにしろ。静かにしなかつたら、もれなく罰を下されるぞ」

笑顔でそう言つ先生。本気で怖い。先生がそう言つとクラスは静かになつた。

「よし、良い子だ。ええつと俺はこのクラスを担当するシンヤ・クドウ・ラヴァインファンだ。まあこのクラスの担当となつた。よろしく」

先生がそう言つと周りから拍手があつたので僕も拍手をする。

「さあて、君達にはこれから四年間、勉強を頑張つてほしいのだが・・・・君達も知つていると思うが年に一回行われる最高のトーナメント、クラインド杯。これは毎年全学年が出場する。君達にはこれに向けて日々頑張つてほしい。それに出るためにには年に一回行われ

る校内トーナメントをこの学年の中で優勝する事だ。そして校内トーナメントは約三ヶ月後にある。それまで頑張れよ。以上だ、帰つていいぞ」

先生はそう言つと教室から出て行つた。さてと、僕も帰るか。かばんを持って教室から出た。正直、女子に耐性の無い僕にとっては辛い。入れば逃げるよう教室を後にした。

誰かに話しかけられた氣がしたが、僕はそのまま帰つた。

出余い（前書き）

今日の朝から一五時くらいまで、復元ソフトを使って前回のデータを復元することに成功しました。

「良い天気……」

今日の天気は雲ひとつない晴れ。

「……最悪……」

日光が嫌いな僕はいつ言つた晴れの日は好きじゃない。しかし学校に行くためには日光に当たらなければいけない。

「……はあ……、行くとしますか」

溜め息をつきながら登校を始める。日の光で道路の所々がキラキラと光り眩しく感じる今日この頃。と言う事でどうも皆さんおはようございます、カオルです。

突然ですが、学校に行くのは嫌だと言う日はありませんか？ 恐らく、誰もが一回は思つた事があるでしょう。今日の僕がそれです。と言つより、僕は毎日これです。

学校が面倒だ。行くのが嫌だ。だって、魔法が使えないんだもん！ これが昨日までの僕。しかし今日の場合には、学校に行くまで日光に当たるのが嫌だ。だって、眩しいもん！ これが今日の僕。魔法の一件に関しては、昨日僕が防御魔法を使えると言う事がわかつたから良いとして、日光の問題はどうする事も出来ない。

太陽を破壊すればいいのか？ しかしそんな事は不可能だし、出来たとしてもやることはないだろう。

「熱い、眩しい、面倒くさい…」

ブツブツ文句を言いながら登校する僕。目標は皆勤賞。でも、さっそく妥協しそうだ。

そんな事を思いながら学校まである道をゆっくりと歩いていく。

「なあなあ、俺達と一緒にこねえかグハハハハ

「そうだぜえ、良い事してやるぜえグヘヘヘ」

……朝からナンパか。何処かの誰かがナンパはこの文化だと叫んでいたが、是非否定していただきたい。今まで文化を伝承してきた人たちに土下座をして。

「嫌だつていつてるでしょ！」

「私達学校があるんです…」

「良いじゃねえか

そう言つて男が一人の女子の腕を掴む。うわ、最悪ですね。ナンパもそうですが、無理やり連れて行こうとするなんて……この国も落ちましたね…。

「良いから来いよーー！」

「触らないでーー！」

パチンッ

一人の女子が男を叩く。うわあ、絶対にあいつらキレたよ。

「このクソアマ！ 黙つてついてくりや良いんだよー！」

グイツ

「グヘヘ、お前もだよ！」

「キヤア！」

そう言つて男は一人の手を思いつきり引いた。男は魔法学科には少ない、しかし入つてくる奴等は大概強い力を持つてゐるから彼女たちでは太刀打ちできないのだろう。

「はあ…、助けるか」

全く、最近の若いもんは…。

年寄りの様な事を思いながら、四人に近づく。

「止めなよ。朝から見つとも無い」

僕はそう言つて男の腕を掴む。ん？ この女子一人、よく見ればクラスにいた一人か。

「誰だテメエ！」

ウワツ、睨んできたし。やっぱ慣れない事をしない方が良かつたかな？

「僕かい？ 僕はその一人のクラスメートさ」

「クラスメートだ？ お前この人が誰だか分かつてんのか！」

……該当する人物は記憶にない。なら誰なんだ？ 知らない奴の

事を使つて脅されても、全く怖くない。

「ああ、お前田中かー。おお田中ー。」

とつあんまり知つているふりをする。

「田中じゅねえよー。」

失敗……なら誰なんだ?

「このお方は中村さんだぞ」「アーッー。」

……選択ミスつたみたいだな。いやあ、田中と中村で迷つたんだが、結局田中にしたんだよな。

「ああ、やつですか。で、その中島さんがどうしたんで?」

「中村だよー。」

まあ、こんな馬鹿な事をしている暇はないな。

「彼女たちを話したらどうだい佐藤さん」

「だから中村つづつてんだるー。それに、この女が俺を叩いたんだ。正当防衛だね」

拉致は正当防衛に入らぬと思つが……。まあ良いや。

「やつだぜグヘヘヘ」

「なつそれは貴方達が無理やり

「やつです。アリは悪くないです！」

二人がそう言つて反論する。まあ、一部始終見ていたから分かっているのだが。

「そりが、なら仕方がないですね」

「ヒツヒツヒ、そりだぜ仕方のない事なんだぜ」

男は笑いながら、女子一人は軽蔑する様な目を向ける。

「まあ、そり言つ事だから部外者はどうかに行け！」

男はそり言つて僕を追い出そりとする。しかし、此処からが僕のターン！

「え？ 何でどつか行かなきやいけないんですか？ いつ僕が見逃すつて言いましたか？ エ、馬鹿なの？ 死ぬの？ 見逃す訳無いでしょ、この口リコン」

そこまで言つたと言つ位言い続ける。年下をナンパし無理やり連れて行こうとするやつは、ボクの基準では問答無用で口リコンなのだ。

僕がそのセリフを言つと、男はキレ殴りかかってくる。しかし

「 グアアアアアアアアアアア！」

僕の絶対拒絶型の魔法障壁がそれを許さない。

「残念でした。フヒヒ、ワロスワロス」

殴りかかって来た男を見下しながら笑う。するともう一人の男が魔法を発動させる。

「テツテメエ！　＼土の槍／！」

土で出来た槍が飛ばされる。しかし、僕の障壁の前では泥団子も同然。槍は障壁により全て防がれる。

「なー？　何をしゃがつた！」

「さあ？　何でしじょうね？」

そう言つて男に近づき、僕は男であればどんな人でも致命的ダメージを受けるある部分を蹴りあげた。

「～～～ッ！？！？！？」

男は口で言い表せない痛みに悶える。それを見ていた回りの男子生徒達も、顔を青くし同じ部分を抑える。

「さてと、行くとするかね

僕は学校に向かつて再び歩き出す。

「待つて！」

「待つてください！」

「ん?」

僕はナンパされていた一人の女子生徒に呼びとめられる。

「あ、ありがとう」

「ありがとうございました。助かりました」

そう言つてお礼を言つてくる一人。うん、素直で良い子だな。

「いや、なに。朝から気分を害された腹いせみたいなものだから、気にしなくて良いよ。じゃあ僕は先に行くから」

僕はそう言つて走つてその場から去つた。

2

「何でこうなった…」

「さあ? お前の運命だろ」

僕は自分の置かれている状況を冷静に分析して、そう呟いた。一人の男子がそれを聞き、返事を返す。

「…………厨二病?」「誰がだ!」

男子はそれを聞き、失礼だろこの野郎! みたいな感じで言い返す。

「いや、君以外にいないだろ」

「五月蠅いわ！」

まあ、こんな漫才みたいな事は置いといて、何故僕の席が移動しているんだ？

「僕の席は窓際の一一番後ろのハズなのに……」

ボソッと呟く。まあ、元に戻せば良いか。そんな事を思っていると、一人の女子が話しかけてくる。

「つちがゆるをへんねん。後ろに一人である事を」

独特な口調の女子がそう言つ。ああ、彼女が机を移動したのか。まあ、どうでもいいや。

「なら、此処で良いや」

「うん、それが一番やで」

満足そうに頷ぐ。さて、此処からが重要だ。僕は今までこの事実に目をそむけてきた。恐らく、前回さに向かひれば僕は氣絶する可能性があるからだ。

「ななな、何できき君は僕の膝の上に座つているのかななな？」

女子に耐性のない僕が、膝の上に女子が座つている事実を見て平気な訳がない。声が震えているのが自分でもわかる。

「……此処が……氣に入つた……から?」

疑問形……いやいや、それで返されてもねえ……。

「僕に聞かれても……ねえ?」

目を若干そらしながらさう言つた僕。そう言えば、さつきの一人もこのクラス何だよな。と言う事はこのクラスの女子レベル高すぎるだろ!

顔を真っ赤にしながら、そう思つた僕。まあとりあえず

「退いてもらえる」「

「ヤ

即答ですか……。これはいろんな意味で不味いかも。僕の精神的な意味でも、肉体的な意味でも。

「力オル、顔が赤いで」

「一ヤ二ヤしながらそう言われる。分かっていますよ!」自分でも自分の顔が赤くなっている事くらい。

「仕方ないじゃないか……。今まで異性と喋った事なんて、殆どないんだから……」

僕は俯きながらそう言った。恐らく、顔はこれ以上にない位真つ赤だろう。

そんな僕をよそに、笑いだす二人。

「アツハツハツハツハ、お前面白いな

「ホンマや、此処まで笑つたの久々やで」

「……クスツ」

「笑わないでくれないか？　と言つより、貴方が僕の上に座つているのが原因だよ。何笑つているんだい！」

此処まで馬鹿にされたのは久しぶり…………でもないな。ついこないだまで、魔法が使えないって事で馬鹿にされたりしたし…。
そんな僕の心の叫びは聞こえるはずもなく、笑い続ける二人。
暫くすると教室のドアが開く。

「おはよっ…………って、何やつてんのよあんた達！」

「おはよっ♪ざこます…………って、何やつてているんですか二人とも！」

朝会つた二人が驚いたように叫び合つた。まあ、無理もない様な

…。

「いや、何つて言われても……」

「言われても……じゃないわよー。」

「そうですよー！　と書つよリレナちゃんもシンフォニー君から離れてくださいー！」

「……ヤー！」

さつきより強く言つて、更に抱きついて来る。ヤバいやばいやばいやばい！　もう限界が近い！　このままだと意識が飛ぶ！

此処からは、カオルの脳内会議の現場です。

「ダメです！　」のままでは本体が持ちません！」

「諦めるな！　まだ何か、まだ何か手はある筈だ！」

「羞恥心が七〇パーセントを上回りました！　ダメです、レットゾーンに突入です！」

「不味い、」のままでは暴走するぞ…。」

「仕方ない、最終手段を使うしか……よし、気絶信号を送れ！」

「信号拒絶！　ダメです、我々からの搜査は不能です！」

「何だと…。」

ハツ！？　僕は一体何を……いかんいかん、軽く意識が飛んでいた。と言つより

「　レナつて名前だつたんだ…。」

僕の一言でクラスの空気が凍りつく。

「…………自分、知らんかったのか？」

またかと言つ感じで聞いて来る。僕はそれに頷く。

「まあ、自己紹介の時寝ていたし…。」

僕の一言で皆がポカーンとした。そして呆れたような表情になる。

「そう言えばそうだったな……なら改めて、俺の名前はシン・ステファニーだ。障壁破壊前衛型だ。使う武器は大剣。よろしく。シンと呼んでくれ」

「はあ……自己紹介寝てるって……どう言つ神経してるんや。まあええわ。うちの名前はカナ・クロイツン。拡散重視中衛型と大型魔法用後衛型の両方やで。使う武器は杖、よろしく頼むでえ。呼ぶ時はカナでええで」

二人の自己紹介が終わる。すると下からつかれる。

「レナ……レナ・Y・アストレイ。……召喚魔法。……武器…銃。よろしく。呼ぶ時は……レナ……」

「は、はい。よろしくお願ひします」

若干緊張しながらそつと言ひ。と言ひより、いい加減退いてくれないかな？ それはさておき、僕達の視線は残った二人に向かられる。

「わつ私の番？ なら、私の名前はアリア・ファイリーよ。障壁破壊前衛型で、使う武器は槍よ。よろしくしてあげるわ！ 特別にアリアって呼ばせてあげるわ

「最後は私ですね。私はミリア・スレリアです。魔力回復型と回復特化型で、使う武器は剣です。よろしくです。ミリアで構いません

二人の自己紹介が終わる。僕はこの時思った。このクラスの女子つて本当にレベルが高いなと。

「……何だ？」

皆の視線が一いつ瞬間に向いている。

「いや、お前だけ自己紹介していないだろ」

シンがそう言つ。しかし、昨日聞いているのではと僕の中で疑問に思ひた。

「まあ、昨日聞いたけど一人だけしないってのはないだろ」

ああ、そう言つ事か。なら、僕も自己紹介をするべきだな。

「えっと、僕の名前はカオル・L・A・シンフォニー。絶対拒絶型らしい。得意な武器は野太刀。使う武器は刃物全般。まあ、よろしく。後、呼ぶ時は何でも良いよ」

僕はそう言つて自己紹介を終える。何か変な所はなかつたよな？
僕の自己紹介が終わつてから、少し皆がざわついているし…。
そんな事を思つていると、カナが話しかけてくる。

「なあ、自分でホンマに絶対拒絶型なん？」

ああ、その事か。

「まあ、やうやうじよ」

「やうやうじよ……自分の事じゃないんですか？」

ミリアが僕の回答に疑問を持つ。まあ、自分でも本当かどうかは分からぬんだけどね。

「まあ自分の事なんだけど、絶対拒絶型って気付いたの……昨日のクラス分けの時なんだ…」

僕の一言で再び空気が凍りつく。そして

ハアアアアー！？！？」「…………！？」

四人が声を上げて驚き、一人が目を見開く。

「うまいと、どうぞお嘗てあれ。」

アリアが僕の方を掴み揺らす。

「……で、なにをひらひらと語るか？」

「僕の声が届いたのか、揺らすのを止める。もう少しで、最上級魔法〈オートリバース〉（簡単に言えば吐く事）が発動する所だつた。

全員がやう言えはと語った感じの顔になつた。

一成程、それがカオルだつたと

シンが頷きながらそう言つ。僕はそれに頷き、その通りだと言つ。

「じゃあ……何で……絶対……拒絶型つて………気付いたの？」

レナがそう聞いて来る。僕は昨日の事を話しだす。

「それはね、昨日のクラス分けの時にさ。ほら、先生と戦つやつだ
よ」

全員はそれに頷く。少し苦い顔をする者もいるが。

「その時にさ、先生を怒らせちゃって上級魔法を撃たれたんだよ。
その時にね」

僕の一言で全員がポカーンとなる。そして

「…………ハアアアアアー！？！？」「…………！」

再びわざと同じような感じになつた。

「ちょっと待て、なら何だ。昨日先生を倒した新入生つて、お前の
ことだつたのか？」

「ん？ 倒したかどうかは不明だけ、負けてはいなかつたね」

まあ、引き分けって感じかな？ どうなんだろう？ 先生の腕が
折れたから僕の勝ち？ それともどちらも倒れていないから引き訳
なのかな？ でもそんなことどうでもいいや。

「どうひりしても、今日の模擬戦で分かるんじゃないですか？」

ミリアの一言で四人が納得する。ちょっと待て、模擬戦だと？

聞いていないぞ。

「え、今日模擬戦あるんですか？」

「そうよ。今日一日模擬戦よ。まあ、昨日あんた寝てたから分から
ないでしょうけど」

アリアがそう言つて笑つ。と言つよつ、一日模擬戦か……嫌
だな。

「ちょっと僕お腹の調子」

「なら闘技場に行こうか」

シンが僕の言葉を遮り、既にやつてしまつ。僕はとりあえず、田を背
けてきた膝の上に座つているレナを降ろす。

「もう……抱つこ……」

レナがそう言つて僕に向けて手を広げる。何だこの生き物？ 滅
茶苦茶可愛い。可愛すぎる！ でも、耐性がないから僕には無理だ。

「じゃあ、行こう！」

シンが元気よく闘技場に向かつ。僕はシンに引きずられながら、
闘技場に強制連行された。

VS教師（前書き）

前回は登場人物紹介を入れたんですが、やっぱり入れない方がいいですかね？

シンに引きずられながら闘技場に着いた僕は、朝からの疲労感もあり模擬戦といつも気分じゃない。このままリターンして寮に帰りたいのだが…。

「お、お前達早いな」

僕達が闘技場に着いた後、少し遅れてからシンヤが入って来た。

「君は遅すぎるんじゃないかい？」

「…………教師に向かって君はないだろ…………まあ良いが

良いのかい。ならこれからは適当に呼ぶ事にしよう。

「とりあえずだ、授業を始めるぞ」

シンヤの声で監督が静かになる。いつの所を見ると、本当に先生なんだと思ってしまう。

「今日の授業は模擬戦だ。そして今から、俺とカオルの戦いを『モンストレーション』と叫ぶ感じでやりたいのだがどうだ？」

シンヤはさつさつと監督尋ねる。僕とシンヤの戦いねえ……って、僕！？

「じゃあ、そいつの事で力オル、舞台に上がれ

『賛成！』

皆が僕の声を遮り、一言叫んだ。って、おい！

そう言いながら僕を引きずるシンヤ。拒否権は無しなんですか！
誰か僕に自由を！

『Please me freedom!』

「何を言っているんだお前は？」

僕は舞台の上に立たされそう叫んだが、軽くスルーされた。僕、
泣いていいかな？

「ほら、始めるぞ」

シンヤはそういうと攻撃を開始した。って、きたねえ！

僕がそう思った瞬間、シンヤの拳が目の前に合つた。僕はそれを
間一髪のところで避ける。

「危な！？ いきなりなんてセコイイぞこの野郎！」

「ハツハツハ、お前なら問題ないだろうがッ！」

僕は再び飛んできたシンヤの拳を、障壁で防ぐ。

「クッ、やはり接近戦では不利か。その障壁が厄介すぎやる」

シンヤは冷静に分析する。しかし、突然笑い出し攻撃を開始する。

「ハツハツハツハツハ！ 破れないのであれば、破れるまでたたき壊すのみ！」

そう言つて障壁を殴り続けるシンヤ。

「マジですか！？ お前軽く本気だよな！」

「どう言ひ事だよ。障壁越しに衝撃波を感じるつて！」

「ビウしたビウしたビウしたビウしたビウした！」 ここの程度なのかお前は…」
「この程度つて、あんた教師だらうが！ 普通に考えて勝てる訳無いだろ！」

「チツ、魔法障壁範囲拡大！」

僕は障壁に魔力を込め、その大きさ、そして範囲を拡大させシンヤを吹き飛ばす。

「さあ、僕のターンだ！」

僕はシンヤの碎いてくれた舞台の一部を上に投げる。そしてそれを障壁でシンヤに弾き飛ばす。

「うお！？ そんな使い方も出来るのか！ ますます楽しくなってきたなオイー！」

ウワア、何て良い笑顔……じゃないよ！ 僕の命の危機を感じるよー

「お前なら使っても良いかもしねんな」

シンヤはそう言つと、上着を脱ぎ捨てる。そして魔力を解放する。

「……部分魔神化、対象右腕！」

シンヤの右腕に魔力が集中する。魔神化だと！？ マジで殺す気なのか僕を！

「……ふう、これが俺の力だよ力オル。俺の種族は魔人。知つているよな勿論？」

「え、ええ、でも生徒に対しても使う技じゃないだろ魔神化は……」

「いやいや、お前だから使えるんだろうが。ちなみに、俺の飼つている魔は酒呑童子だ」

酒呑童子だつて！？ ふざけんな！ 鬼のトップじゃないか！

無理無理無理！ 絶対死ぬつて僕！

「喰らいな！」

人の形ではなくなつた腕で、シンヤは僕の障壁を殴りつけた。硝子が割れたような音が何回も響く。

「！？ 全方位多重防御障壁か！」

「ええ、まさか此処まで破壊されるとは思わなかつたけどね！」

十枚の障壁を展開して破壊された枚数は六枚。どんだけ規格外何だこの人は…。

「だけど、目的は達せられた！」

僕はそつとシunyaの顔を両掛け拳を振るつ。

「その程度の拳ではツ！？」

シunyaは僕に殴り飛ばされ、舞台の端まで追いやられる。

「ガア……、な、何だ今之力は！」

シunyaは殴られた部分を押さえながら、驚愕の目をしている。さあ、ネタばらしだ。

「簡単な事だよ。僕が殴り飛ばすと同時に、障壁を一気に展開するんだ。シunyaが障壁を破壊した時に、僕の障壁は対人障壁としても有効なレベルの実態を持つ事がわかつた」

「何故つて……成程な、殴った時お前の障壁を足場にして上から殴りつけたせいか」

その通りと僕は返す。他にもシunyaから貰つた汚い本に書いてあつたことの一部であつたりもする。

「シunya、君がくれた本に書いてあつたのさ。そして、あの本に書

いてあつた武術“八華獄”はこれが出来る事を前提として作られたみたいだしね。それに、これは刀を使った武術を基本としている。拳だけだと応用編だからもつと習得が難しい

「……成程な、だから俺が使えなかつたという訳か」

僕はそれに頷き、構えを取る。

「昨日一日で覚えた技ですよ。八華獄の初級の初級、しかもまだ未完成ですが……使えない事はないので、出し惜しみはしませんよ」

僕の一言に先生が構えを取る。

「……八獄等活・屎泥処！」

僕はシンヤに殴りかかる。シンヤはそれを避けようとすると、僕が寸での所で拳を止めた。

「？ 何がしたいんだ？」

寸止めされた事により、僕が何をしたいのか分からぬシンヤ。しかしその瞬間

ズガニッ

シンヤは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「ツカハツ！」

シンヤは力なく倒れる。

「屎泥処。この技は障壁のみで攻撃をする技ですよ。流石に不完全

だから寸止めをしないと使えませんが、今回はそれが正解だったみたいですね」

僕は倒れているシンヤに近づきながらそう言った。

2

「…………カオルの防御…………最強すぎるでしょ…………」

アリアは若干放心状態でそう呟く。

「それに、まだカオルは本氣を出していないしな」

「え！ そりなんですか！？ あれで本氣じゃないって……」

シンの咳きこみコアが反応する。シンの糸がわかつたのか、カナが説明を始める。

「カオルの得意武器は野太刀やる。しかし今はそれをつっこつてない。つまりこいつ言つたりや。野太刀を使えば攻撃も出来る言つちや」

カナの説明に一層目を見開くミリア。まあ無理もないだろう。先生とほぼ互角に戦っている生徒を田の辺たりにして、更にそれが本気でないと知つたら。

「しつかし、こない恐ろしいもんやとはな。絶対拒絶型、そしてそれを持つ者に開花するつちゅう拒絶属性。ほんま、無茶苦茶や……」

四人は啞然とする。しかしレナ一人だけが目を輝かせて舞台を見ている。

「カオル……すごい…カツコいい！」

五人はそんな感じで闘技場を見た。見続けた。すると倒れていたシンヤが立ち上がり、一言何かを言った。

3

「俺がこの程度で倒れるとでも？」

シンヤはそう言って立ち上がる。そして魔力を解放した。

「！？ 学生相手に何をするつもりなんだい君は」

シンヤは僕の言葉を聞き、フツと笑つて詠唱を始める。

「全ては消える 全ては散る
破壊の鎌が天より落ちる

さあさあ神よ 我に裁きの力を与えよ！

「雷属性最上級魔法〈裁きの強雷〉」

君は僕を殺すきなかいと詠つ僕の呴きは、雷の音によつてかき消される。

空を見上げる。するとそこには紫色に光る雷が走る。これは不味い、下手をすれば死んでしまう。僕は死なないために、両手を空に

かざす。そして

「 対魔法多重障壁展開！」

拒絶の力を全開にした障壁を展開する。そして展開し終えると同時に闘技場に爆発音が轟く。たつた一撃、僕の居た場所に巨大な紫電が落ちた。煙で僕の姿は確認できないみたいだが、舞台は紫電が落ちた衝撃で粉々に砕けている。

「はあ……はあ……、本気を出したんだ。少しは聞いてくれよ……」

シンヤがそう呟く。徐々に煙が晴れていく。残念だつたねシンヤ。君の攻撃は完全に防がせてもらつたよ。僕はそう思いながらドヤ顔でシンヤが居る方を見る。そして煙が晴れる。

「！？ 無傷だと！ ……チートを使ったのかお前は……」

シンヤは半分諦めたような感じでそう呟く。

「もう良い、降参する。ダメだ、今のが喰らわないんじやな。このバグキヤラめ」

少しふざけんなど言ひ感じでシンヤはそう呟く。

「ふふふ、生徒に負けて情けないですねえ」

笑いながら僕はシンヤに向ひ声を。シンヤはウザギと叫んだ感じで睨みつけてくる。

「五月蠅い！ ほり、とつととをこを退け！ 今から模擬戦を始め

るからな」

その後、シンヤは舞台から奥の方を見た。

「今から模擬戦を開始する！ 対戦相手は俺の独断と偏見で決めさせてもらつた！ 文句がある奴は良いに來い！ 赤点にしてやるからな！」

職権乱用じゃないかそれ？僕はそう思いながらシンヤの方を見る。するとシンヤはこっちを見てニヤリと笑う。

何がどういふか、娘がどう感がする。僕の質問がどう答へていいやらかすつもりだなこいつめ……。

「対戦相手はステファニー、クロイツン、アストレイ、ファイリー、ステリアＶＳシンフォニーだ！！」

……ああ成程、僕一人対皆ね。成程、そんな事か。つて

僕の叫びが闘技場に響いた。

模擬戦（前書き）

今回は発見した前回の「トータを殆どそのまま」で投稿しました。

1

「ふざけんなあああああ！」

「ハアー！？ 何この人、頭がおかしいのかい？ 今の僕には理解できない。と言つより理解したくない！ 五対一、絶対に無理だね。」

「五月蠅いで、カオル。早く構えろ！」

「いやいや、ちょっと待て。何で僕が一人なんだい？」

「普通に考えておかしい。何を考えているのか……。」

「いや、ただ単にお前が強いから」

「……何で君は教師をやつているんだい？」 と言つより、よく教員免許を取れたね。世も末つてやつかな」

僕はため息をつきながらシンヤに向つて。『

「おこつ、じついつ意味だ！」

「そのままの意味だよ。全く、君の様な人間が教師になるなんて……」

僕は哀しい者を見る目で彼を見る。

「おじロク、なんちゅう目で俺を見てるんだ。仮にも教師だぞ」

「はいはい、わかりましたよ。教師（仮）さん」

「（仮）はいらん！」

彼が何か言つてゐようつだが、あえて無視させてもらつた。そして五人と向きあう。

「カオル、例えお前が一人だろつが全力で行くからな」

「せやで、手はぬかへんで」

シンとカナはやる氣が十分なようだ。

「カオル……氣絶させて……クスッ」

……レナが怖い。何だろつ、本能的に氣絶したら不味いと言つている。

「全力で叩き潰すわ。容赦しないんだから…」

アリア、容赦はしてくれた方がうれしいな……。

「カオル君に勝つ……カオル君が氣絶……監禁……調教……私の物……
フフフ」

ミコアはレナよりもヤバい氣がする。負けられないなこれは……、

と言つより負けたら絶対にヤバいね、うん、絶対に勝とう。

僕はそう思い、闘技場の隅に置いてある野太刀を持った。刃は潰されている。恐らく模擬戦用の野太刀だろう。シン達も、自分の得意な武器を持つ。全部、刃が潰されている。レナの銃はゴム弾になつていて、相手も本気だろ？、だから僕も本気で行こう。

「よし全員武器を取つたな。なら始めるぞ…………始め！」

先生の合図で五人が一斉に動きだす。

「喰らえ！」

シンの大剣が僕の障壁にぶつかる。辺りにキーンと音が響く。しかしシンは止まらず物凄い連撃をしてくる。

「つりやああああああ…………！」

音が何回も響く。シンの連撃で身動きが取れない。その隙をついて、レナが詠唱を始める。

「地獄に住し……炎の魔王……今こそ……力を貸して！
契約召靈「イフリート」」

ズガソッ

レナの前に炎の塊が落ち、爆発した。そしてその中から、真っ赤なドラゴンが現れた。

「イフリート……彼に……攻撃」

レナの一言で「ゴーリー！」。イフリートは頷き、僕に突っ込んできただ。

鼓膜が破れるかと思う位大きな音を出し爆発を起こした。僕はそれを障壁で防ぐ。

「イフリート……ボルカニックブレイズ…発動」

レナの言葉でイフリートは口の中に炎を溜める。そしてドガアン

イフリートの一撃は僕の障壁に直撃し、大爆発を起こした。

「まだや、追撃やで！」

「土属性上級魔法〈ロックブレイク〉」

力ナは詠唱を終えた魔法を唱え、僕に攻撃した。地面が砕け、僕の足元から巨大な岩が出てきた。僕は間一髪のところで避ける。すると岩は砕け散った。

「今やアリア！」

「わかつてる！」

「炎属性中級魔法〈マニ・エクスプロージョン〉」

アリアが魔法を唱える。

「・・・・まさか…？」

「気付いたか、しかし遅すぎやで…！」

力ナがそう言った。二人は粉塵爆発を狙つたのだ。咄嗟に僕は障壁を張り出しだが少し遅かつた。

再び大きな爆発音が闘技場にこだまする。

「クッ…きついね」

僕は結構大きなダメージを受けたようだ。障壁は展開出来たモノの、爆風により吹き飛ばされてきた物を一部弾けなかつた。

「…今まで終わらないなんて……凄いわね」

「褒め言葉として受け取つておくよ。じゃあ、僕も攻撃と行こつか

僕は構えを取る。するとミリアが

「皆さん、気を付けてくださいです！ あれが来ます！！！」

野太刀を持ったからといって構えは一緒、ミリアは僕の構えを見て技を察知する。ミリアの一言で全員が自分の構えを取る。しかし、普段から基本的に魔法でしか戦つてきていなかつたら、構えには少し隙があり簡単に崩せる。だから僕は

「 さあ、いくよ！ 八獄等活・屎泥処！」

今度は野太刀で皆の中心を薙ぐ。そこに拒絶の障壁が展開され、皆が吹き飛ばされる。

「あまかったね！ 僕は魔法が使えないと思っていた分、武術だけは鍛えていたんでね！」

僕は吹き飛ばされた皆に追撃を掛ける。どんなに弱い力でも、拒絶の力が付けばその倍以上の効果が期待できる。さらに、対物理障壁を展開しようが障壁自身は魔法に部類されるので意味がない。

「さてと……終わりだよー！」

僕は最後の攻撃だと言わんばかりに、五人に技を放った。五人はもう攻撃を防ぎきる力は無かった。レナはかろうじてイフリートを出しているが、限界が近いのは目に見えていた。

「カオル…強すぎ」

「ハハ…、まあこれが僕の力だよ」

僕はそう言つと、再び野太刀を薙いだ。五人は吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。もうこれ以上やる必要はないだろう。

「はあ、終わりましたよ先生」

僕はそつ言い、先生の方を見る。すると彼はニヤニヤしていた。

「なんだいその顔は」

「いや、まだ終わってないからな」

「どう言つ事だ……まさか！？」

僕はそう思い後ろを振り返る、するとそこにはギリギリと言ひつ感じで立っているシンの姿があった。

「はあ…はあ…はあ…、滅茶苦茶じゃないかお前の攻撃は

「貴方以外は全員気絶、正直そのまま倒れている方がよかつたのでは？」

僕はシンにそつ言つ。既に満身創痍のシン。立つてゐるのがやつ

とだらう。

「フツ、彼女を前にして倒れてその場をやり過ごすなんてできないな」

「成程、その考えは好きだよ。でも」

僕は野太刀を構えた。

「じゃあその敬意を表して…一瞬で終わらせるよ」

僕は拒絶の力を野太刀に纏わせ、本気で野太刀を振るつた。
ドゴッ

野太刀はシンの腹に当たつた。多少障壁を張つたようだが、拒絶の力によりほぼ無効化され野太刀が直撃した。そしてシンは力なく倒れた。

「はあ、何か無駄に疲れたよ」

「そうか、今日の授業はこれだから帰つていいぞ」

僕はそう言われたので闘技場を出て行つた。

「……拒絶の力か、創造や時空よりもはるかに強い…全く、昨日覚醒したのにもう殆ど使いこなすなんて……どんな練習をしてんだといつは」

先生がそう呟いた。しかし、その呟きは僕に聞こえる事は無かつた。

次の日

僕は昨日模擬戦で勝った事、そして一人で帰った事を猛烈に後悔した。

「フフフ、カオル君、貴方があんなに強いなんて感激です。でも、昨日一人で帰った事は感心できないです。だから、お仕置きが必要ですね……フフ……フフフ」

「カオル……凄過ぎ……レナじゃ……勝てない……でも……守つてもらうのも……良いかも……後レナも……一人で帰った事は……許さない……だから……お仕置き」

何なんだ、ミリアもレナも……一人は僕の腕に抱きついて離れない。そのせいで顔を真っ赤にする僕。

「ちょっとカオル！ 一人から離れなさいよーー！」

「……アリア、僕が抱きついているように見える？」

僕はアリアに向つてんの的な感じでそう言った。しかしアリアは……。

「あなたが其処に居るのが悪いんでしょうがーー！」

んな滅茶苦茶な……理不尽すぎるよ。僕だって、気絶するかしないかの瀬戸際にいるのに……。

僕がそんな事を思つていると、僕の腕に抱きついている一人が突然立ち上がり、僕を引っ張り出した。

「ちょっとお一人さん…何処に行くんだい？」

僕が一人に聞く。しかし一人は笑うだけ、行く先は教えてくれなかつた。

「あの、何をする気な」

「大丈夫カオル君、貴方は何もしなくて良いですでの」

「…えつ？」

「そう…カオルは…動かなくて良い…」

「何が言いたいんだ…？」

「安心して下さい。ただ、気持ちのいい事をするだけですから」

「ゑ…」

「痛いのは…レナ達…だけ」

うん、何となくわかつてきた。

「ちょっとお一人さん…そう言う事はだ」

「…何か？」

「…ナンデモナイデス」

二人の顔を見た瞬間僕は、言葉を訂正してしまった。だって、後ろに阿修羅が居るんだよ。断れるそんな状況で？絶対に無理だつて。

だから誰か…助けてくれ…！ 僕がそう思つ。

「ちゅうと一人とも何言つてんのよ…」

アリア……君、最高だよ。

僕はアリアの一言に凄く感謝した。しかし、次の瞬間その感謝の心は崩れ去つた。

「するなら私も一緒に…」

……………ハア！？

「いやいやいや、そこは止めるべきだと思つよ…！」

僕がそう言つと、アリアは僕の方を見てこう言つた。

「初めてだから、優しくしなさいよ」

と一言。終わつた僕の魔法使いになると言つ夢が……あれ、僕もう魔法使いだよね？ 何で三十歳で魔法使いなんだ？

まあ、それは置いていて

「シン、力ナ、助けて！」

僕が一人に言つ。ちょ、二人とも、なんだその笑顔は、そして無言で手を振るな。

僕がそう思うも、一人は助けてはくれなかつた。

そんな、最後の希望が……もう誰でも良い。だから誰か

「助けてくれええええええええええ…！！！」

その後、カオルの姿を見た者はいない。

「　「　「ウフフフフ…」」

「イヤアアアアアアアアアアー！」

休日（前書き）

久々の更新です。

休日

1

どうも皆さんこんばんは。家事が大好き、寝るのも大好き、甘い物も大好きな力オルです。さて、僕は明日からある五連休の計画を立てています。皆さんにその一端をお見せしましょう。

一日目

- AM六時起床
- AM六時半就寝
- PM六時起床
- PM七時朝食
- PM八時風呂
- PM九時武器の手入れ
- PM十時就寝

二日目

- AM六時起床
- AM六時半修業開始
- AM七時半朝食
- AM八時修行場へ行く
- AM十時到着
- AM十時半修業開始
- PM一二時半昼食
- PM一時修業再開
- PM七時夕食

PM八時修業再開
PM一時修業終了
PM一時半風呂
AM一二時半就寝

三日目・四日目
AM六時起床
AM六時半修業開始
AM七時半朝食
AM八時半修業再開
PM一二時半昼食
PM一時修業再開
PM七時夕食

五日目
AM六時起床
AM六時半寮に帰る
AM八時半帰宅
AM九時就寝
AM一二時半就寝

PM六時起床
PM七時朝食
PM八時風呂
PM九時武器の手入れ
PM十時就寝

とこんな感じです。アバウトだが、大体はこの予定で行こうと思

つています。

さて、今日はその大切な一日。そして今の時間は六時半。と言

う訳でお休みなさい。僕はこれから寝る事にします。

部屋の電気を消し布団にもぐる。そしてその数秒後、僕は意識を闇に落とした。

2

インターフォンが鳴り響く。しかし僕は寝ているので気付かない。だが相手も諦めない様でインターフォンを連打する。流石に僕もこれには起きる。

「……誰だ？」「こんな朝早く？」

時間はすでに一一時である。

「全く、初日から予定がぐるりてしまったよ」

此處で再びインターフォンが押される。忘れてた。

「はいはい、今出ますよー！」

僕はやがてドアに向かう。

「はいはい誰ですか？　P.C部品は頼んで……」

冗談を言いながらドアを開けたが、僕はそこでフリーズする。そしてゆっくりと、ドアを閉めた。

「待て、落ちつけ、○○○になれ○○○。」 さつだ、これは夢だ。夢に決まって

「ピンポーン

再び音が鳴り響く。

「さつきのは幻覚だ幻覚。そうだ、寝ぼけてたに違いない！」

僕は自分にそう言い聞かせて、再びドアを開ける。そして

ガチャン

再び閉める。

「……僕の見間違えでなければ、犬耳メイドがいた様な？ あれ？ あれは猫耳だったかな？ いや、そんな事は些細な問題だ。おかしいな？ 僕は家政婦を頼んだ覚えはないのだが…」

僕がそうブツブツつぶやいていると音が鳴る。二度目の正直、これで僕は幻覚を見ていたと証明されるだらう。そう願いを込めながら、扉を開ける。

ガチャツ

「……」

僕は再びドアを閉めようとした。しかし

ガツ

ドアの隙間に一挺拳銃を差し込まれる。

「Open sesame（開けゴマ）」

「オツ！？ それは流石にシャレにならない！ どこの機関の吸血鬼ですか貴女は！」

「カオル君、任務ご苦労！ さようなら。……………じゃなかつた。……………カオル……………何で…閉めたの？」

ネタを続けるな！ そして閉めたのは貴女の格好のせいだよ！ 訪問者はレナ・Y・アストレイ。そして今の彼女の格好はミニスカメイドが猫耳と尻尾を装備した状態。そんなのがドアの前に居たら、僕は閉めてしまふに決まっているのに。

「何で閉めたの？ 何で何で何で何で何で何で…」

目がイッてるよ。ヤンデレはミリアで十分です！ いや、と言つより僕は耐性がないんでそんなにくつつかれても……………って！

「何で銃を向けるんだ！ ジャなくて向けるんですか！」

何故か敬語で言いなおしてしまふ。それもそつだろ？。これは怖い。こんな恐怖は初めてだ。

「何で何で……ハツ！？ レナは…何を…？」

我に戻つたのか銃をしまい此方を向くレナ。

「……………で、……………何で扉……………閉めたの？」

「……………本気で言つてる？」

「……………（「クツッ）」

レナは頷き、どうしたの的な表情で此方を見る。

「ねえ、自分の格好わかつてゐるのかい？」

「……（「クッ）」

ええ、わかつてやつているの…。

そう、レナの格好は犬耳、そしてマニスカートのメイド服という格好だ。

朝からとんでもない者をお見せいただきましたよホント……。さつきまで寝る気満々だった目が完全にさめてしまったよ。

「ねえ、何でそんな恰好してゐるの？」

普通の質問。しかし今の僕にはそれしかできない。だつて本当にキツイもん。女子に耐性のない男子にこんな恰好をした女子が来る……本氣で氣絶しそう。

「カオルが……喜ぶと……思つたからっ！」

首をかしげてそう言つてレナ。可愛いな……世間一般で言うオタクできな人が言つと燃えだつけ？ そんな感じだったよな……あれ、この字であつていたつけ……まあ良いや。

「何で疑問形……まあ良いや。上がつてくれと本来なら言いたいところだけど、そんな恰好していられる僕も落ち着かないんだよ」

僕がそつと言つた。するとレナは悲しそうな表情になつた。

「じゃあ……カオルは……」の格好で……勇氣を出して……来たレナを……追い返すの？」

「うう……」

レナは上田づかいの涙田だ。これは辛い……ここで追い返すと僕は外道畜生の鬼畜野郎になつてしまふかもしぬない。だから

「しかたないね。まあ、汚い所だけど、歓迎するよ。じゃあその前に僕が服を貸すから着替えてくれ」

僕がそう言つ。するとレナは

「大丈夫……着替え……ある」

そう言つて、扉の外から大きなかばんを取りだした。
あれ、どう言つ事だ？

「なんだい、そのがばんは？」

すると彼女は

「レナの……お泊り道具が……入つてゐる」

とやう言つた。

ん、おかしいぞ？ 今お泊りつて言わなかつたか？

「ねえレナ、君は泊まる気なのかい？」

「……（「クツ」）」

！？！？

「えええええええーー？」

「五月蠅いよ……カオル」

「あつ、すまない」

あれつ、何で僕が謝つてるんだ。いや、そんな事より

「本氣で止まる氣なのかい？」

「……（口クジ）」

ええ、本氣なんですか…。でも

「ほり、寮母さんの許可も」「

「取つた」

素早い返答ありがとう」「わこまーー」と言いつつ、最初から止
まる気だったのか！

「いや、仮にも僕は男だよ」

「だから？」

「だからついて……ほり、もし一夜の過ちとかあつたら……」

「カオルは……そんな事……あるの？」

「ある訳無いだろーー！」

「なら……問題ない」

「う、不味い。」のままでは本氣で止まる気だこの子…。

「あつ、僕今から魔法の練習をしようと思つていたんだ。だから悪いけど今日はむ」

「レナも……一緒に……練習……する」

「……」

諦めよう。予定は狂うが、別に修業が嫌いなわけでもないしな。僕はそう思いため息をついた。そして、レナに着替えてもらい何時も修行している場所へと向かった。

3

僕とレナは学校を出て暫く行つた森まで来ていた。

「……此処？」

「いや、ここの森の奥だよ。少しきついけど頑張って」

僕がそう言つとレナは頷き歩き出した。

暫く行くと森の奥の開けた場所にでた。そこが何時もの修業場所。今僕はレナと一緒にその場所に来ていた。

「……凄い」

レナが一言つぶやく。まあ無理もないだろう。木々の間からこも

れる光、それに照らし出され光る透き通つた泉の水、その光に照らし出される城を思わせる瓦礫と彫刻、崩れかけている壁の数々、どれをとっても芸術的だ。中でも、泉の中心部に立つ天使の彫刻がそれらの雰囲気を一層盛り上げてくれる。

「此処はね、僕のお気に入りの場所なんだよ」

「お気に入り？」

「うん、此処には約千年前まで大きな城があつたらしいんだ。十歳のころたまたま見つけてね、それ以来僕の秘密の場所になつているんだ」

「でも……何で……見つかってないの？」

当然の疑問。千年前の建造物やその跡地は国に管理されることになる。たとえそれが個人の私有地であつたとしても。だがしかし、此処は千年前の建造物の跡地なのに管理どこか手の一つも付けられていないうだ。

「此処に来る途中、洞窟があつただろ」

「……（ノクツ）」

「あの洞窟はかなり入り組んでいて別名“地獄の入口”と言われているんだ」

「！？ あそこが…地獄の…入口」

地獄の入口とは、国が指定した特定危険区域の一つで、入れば二

度と出られないと言われている。国が禁足地として指定している程度の危険区域である。

「そうだよ、此処は地獄の入口の正解ルートを選んだ者だけがたどり着くことのできる桃源郷、僕はそこにたどり着く事が出来たんだ」

「そり…なんだ」

レナはこの場所を見まわしてそう言った。

「さあ、あつちに訓練場があるから行こうか」

僕はレナの手を引き訓練場に向かった。その時、レナの顔が赤くなっていたのは多分見間違えだろう。

僕はレナの手を引き、大きく開けた場所に出る。

「じゃあ、始めるところが」

僕の言葉にレナは頷き、ボク達は修業を始めた。

あれから僕たちは五時間ほど修業を行った。

「ふう、疲れましたね」

「……（口クツ）」

僕もレナも、大量に汗をかきながら瓦礫に座る。辺りは薄暗くなつてきている。もうすぐ夜になるのだろう。

ギュウッとレナが抱きついて来る。

「レレレレナ！？」

レナが僕の腕にしがみつく、どうしたのだろう。よく見てみると、少し震えている。

僕は別の意味で震えているけど。

「カオル……少し……怖い」

ああ、成程。レナは暗闇が苦手なのだろう。でも、この場所で一番気に行つてているのが夜。昼とは違う雰囲気を出してくれる。僕が此処に修業に来る時は大概、野宿をする。その景色を拝むために。

「レナ、帰りたいかい？」

「……（「クシ」）」

彼女は首を縦に振る。

「なら、送つて行くよ」

僕はその場から立ち上がり、彼女の方を見た。

「カオルは……どう……するの？」

「僕かい？ 僕は君を送つた後此処に戻つてくるつもりだよ」

僕はそう言った。すると彼女はその場に座つた。

「ん、どうしたんだい？」

僕が尋ねる。すると彼女は上田づかいで私も残ると一言言った。

「……野宿だよ」

「それでも……カオルが……残るなら……レナも……残る」

「うつ！？ 上田づかいでそんな事を言われたらかなりきつい。正直、気絶しそうなくらい。皆さん、お忘れかもしれないけど、僕は女子に耐性が其処まで無いのですよ。学園生活で少し慣れたとはいえるかなりギリギリなんだよ。」

まあ幸い、レナは部屋に来たとき持っていたカバンを持ってきていたので着替え等は困らない。

「……わかった。テントの準備をするから少し待つていて

「……フルフル」

レナは首を横に振った。そして

「レナも……手伝つ

「でも、力仕事は……」

「なら……料理……作る

ああ、成程。それなら助かるよ。

「じゃあ、よろしく頼むよ。器具はこのかばんの中に入っている。材料は修業中に取つて来た物を使用してくれ。動物等は血を抜いて切つてあるからそのまま使用していいよ」

「あっ……ああ、期待してると
頑張る」

「あっ……ああ、期待してると

本当に可愛い。もう、氣絶しちゃうなくらい。

僕がそんな事を思つてると、レナは調理に取り掛かっていた。僕も早くテントを立ててしまおう。

そして暫くしてテントを完成させた僕。

僕の目の前にはテントが一つ。本来なら一つ作りたかったのだが、テントを一つしか持つてきてなかつたので一つしか作れなかつた。まあ、レナが使って僕が外で寝たらいいのとそこまでの問題ではない。それに僕は“あれの練習”もしたいし。

そんな事を思つていると、辺りに良い匂いが漂つてきた。おそらく料理が完成したのである。僕はそう思つてレナの近くに出していた机の方へ向かつた。

案の定、料理は完成していた。レナは出来た料理を机に運んでいる途中だった。

「あ……今から……呼びに行いつと……思つてた」

「やうかい。すまないね、手伝えなくて

僕はやうべ頭を下げた。

「気にしなくて……良い

「でも……」

「レナ……料理作るの……好きだし。……早く……食べよ

レナはやう言つて僕を椅子に座らせた。

「じゃあ……いただき……ます」

「ああ、頂きます」

僕は料理を食べ始めた。

「…………えいへ。」

「うん、美味しいよ。レナは料理が上手なんだね」

僕がやう言つとレナはホッとして、料理を食べ始めた。

僕はレナと会話を交えながら食事を楽しんだ。

「（）馳走様でした」

「おめまつ……わわ……でした」

物凄く美味しかった。レナの料理の腕は天下一品と言つても過言ではないような気がする。その後僕はレナと一緒に食器を洗づけた。

「レナ、簡易のシャワーを用意してあるから使ってきて良じよ」

僕はそう言つて、壁の裏を指した。

「……良一の？」

「ああ、僕は後で構わないから

もう言つて僕は後ろを向いた。

「一緒に…入る？」

えー？

「ななな何を言つてるんだ！？ そそそんなことする訳ないよ…」

僕がそう言つと彼女はクスリと笑い[冗談だよ]と言つてシャワーのある方へ歩いて行つた。

「全く…なら僕も、あの練習をするか

僕はそう言つ、歩き出した。

レナ side

5

「気持ち…よかつた

シャワーを浴び着替え外に出た。

「……綺麗…」

レナが外に出ると辺りは真っ暗になっていた。でも泉の水が月明かりに反射し青白く光っている。幻想的これがあつていい。

「

ん？ 音が聞こえる。

レナは音の聞こえる方へ向かう。

「さあ…王女のための…パヴァーヌ」

そう今聞こえているのはその曲。ピアノで弾かれているので辺りの雰囲気を一層幻想的にしてくれる。

「……カオル」

田の前で彼がピアノを弾いている。辺りの雰囲気と綺麗に重なり芸術と言える。

「おや、レナ。もうシャワーは良いのかい？」

彼が問う。レナは静かに頷く。

「……ピアノ？」

「ん、ああこれかい。これはね、ずっと昔から此処にあるんだ。何か魔法が掛けられているみたいでね、壊れていなかつたんだよ。まあ、少し調律が必要だつたから僕が直してそのまま使つていいんだ。酷い所は玄が切れていたしね」

彼が弾くのを止めそう言ひ。

「此処にはね、他にも多くの楽器が保存されていたんだ。全部魔法が掛けられていたから直せば問題なく使えたしね」

そう言つて辺りを見まわす。

「……凄い」

光に照らし出され徐々に楽器が出てくる。

「月の光に照らされると現れる仕組みになつていてるんだ。凄いよね、僕も初めてみた時は感動したよ」

「……ラ・カンパネ」

「え？」

「リク…Hスト」

「…畏まりました、お嬢様」

彼はそう言つとピアノを弾き始めた。

Side out

まさかリクエストを受けるとは……しかも大練習曲のラ・カンパネラを弾くことになるなんて……。まあ弾けない事も無いのだけど。

僕はそんな事を思いながらピアノを弾く

パチパチパチ

僕が弾き終えると同時にレナは拍手をしてくれた。嬉しいね、こんなふうに拍手をくれるなんて。

「ありがとう。じゃあ、明日も早いからもう寝ようか

「……」「クッ」

僕がそう言つとレナが頷く。僕たちはテントの方へと向かった。

「じゃあレナがテントの中を使って」

「カオルは……ビル……するの？」

「僕？ 僕はハンモックでも使って外で寝るよ

僕はそう言つ。まあレナが居るので元からそのつもりだった。しかしこの考えは次のレナの一言で崩れ去つた。

「それは……ダメ……一緒に……寝る

「……はい？」

何を言い出すんだこの子は。このテントは一人はいればもう限界なんだぞ。どうせやつても一人では入れない。

「レナ、ここのテントに一人は入れないぞ」

「大丈夫。……一人で……寝れる」

「何を言つてるんだ、どうやつても無理だと思うが。

「レナが……カオルの上に……乗れば……良い」

「ああ、成程…………って、えええええーー？」

いやいやいや、ダメでしょそれは。いや、例え良かつたとしても僕が耐えきれない。

「五月蠅い……カオル」

「おつと、すまないね……何で僕が謝つてるんだ？そんな事より、流石にそれは不味いよ」

「…………？」

レナはわからないと詫う感じで首をかしげる。可愛い、可愛いのだがもう少し常識を持つてほしい。

「レナ、僕は男、君は女だ」

「…………（口クツ）」

「良いかい。年頃の若い男女が同じ空間で寝ること自体余り良い事ではないのに君は抱きつこうとしているのだよ。それは取つても不味い事なんだ」

「……何で？」

ええ、此処まで言ってわからないの…。

「ほら、一夜の過ちとかあるかもしないだろ」

「…カオルなら…別に良い。…と言うより…してほしい」

ちょ、頬を赤く染めてそんな事を言つた。不覚にも燃えてしまつただろ…あれ、萌えてしまつたかな?まあそんな事はどうでも良い。グイツ

「え、ちょまつ!..」

僕がそんな事を考えているとレナが僕を引っ張り出した。

「早く…行くよ」

どんどん引っ張られていく僕。何でだらつ、レナの力が物凄く強い。

僕の抵抗は虚しくレナに引かれ僕は、テントの中に入ってしまった。そしてレナが僕の上に寝そべつた。

「ちょっとレナ!…?」

「……温かい」

「え」

「スウ…スウ」

レナは一言つぶやくと、寝てしまった。さて、これからどうしよう。上にレナが載っているため迂闊に動けない。かといってこの状態で寝れるほど僕の神経は太くない。今にも心臓が破裂しそうだ。

「さて、どうするか……」

「」の後僕は一晩中寝る事が出来なかつた。

7

次の日

「フワア……、結局寝る事が出来なかつた」

少し眠いが大丈夫だろう。さてと、レナを起こすか。

「レナ、朝だよ。起きて、レナ」

僕が彼女に語りかける。彼女が起きてくれなければ僕がテントから出られない。幸いレナはすぐ起きてくれた。

「……おはよ

「ああ、お早うレナ。早速で悪いんだけど、僕の上から這つてくれ
るかな?」

「……(口クツッ)」

彼女はすぐに退いてくれた。そして僕はテントの外へ出た。

「うん、丁度良い時間だね」

僕がそう呟く。レナは何が何だかわからない感じで首を傾げた。

「フフ、もう少し待って。もうすぐ凄いモノが見れるから」

僕がそう言つ。レナはそう聞くと僕と同じ方を向いた。そして

「！？ ……凄い…」

「フフ。ね、スゴイだろ。僕も初めて見た時は言葉を失つたよ

朝日が差し込み辺りを照らす。泉の水は白く光り輝く、辺り一面
白い光に覆われる。

「これがね、“天使の見回り”の正体だよ

「これが…天使の…見回り」

天使の見回り何年かに一度、地獄の入口の奥の方で物凄い光が天
に向かつて伸びる現象。

ちなみに、最後にこの場所以外で天使の見回りが確認されたのは
およそ七年前になる。

「この場所はさ、三つの顔を持っているんだ」

「三つの…顔？」

「そう、レナも見ただろ。この場所の昼と夜、そして今この瞬間、朝の景色を」

「……（口クシ）」

「うん、この場所はさ、朝は神秘的な表情を、昼は芸術的な表情を、そして夜は幻想的な表情を醸し出しているんだ」

僕がそう言つ。しかしレナの耳には殆ど聞こえてないつだ。もう、この景色を見ることに集中している。なら僕も、この景色を堪能させてもらひとじよつ。

僕たち一人は、一緒にこの景色を楽しむことにした。

僕たちはあの景色を見た後、修業を再開した。そして四日はあつとこつ間に過ぎ、最期の一日になり僕たちは学園に戻る。

「フフ、久しぶりに他の人と修業ができるうれしかったよ

「レナも……嬉しかった。……あの場所も……見れたし

「そうかい。今度は皆で行こうな」

「……（口クシ）」

レナは僕の言葉に頷いた。

「じゃあまた学園で」

「……またね」

彼女は一言もつと自分の部屋に帰つて行つた。

「ふう、疲れたな。まあ、こんなのも悪くは無いね」

僕はそつ抜き、ベッドに倒れ込んでそのまま寝た。

ちなみに、次の日学校の話題で、七年ぶりに天使の見回りが起きたと騒がれていた。まあその日一番近くで僕とレナはそれを見たのだけど。この事はレナとの秘密となつた。

十一 騎士団（前書き）

相変わらず文才はないですが、一応更新です。

「……下らなこと言つのが正しい様な気がしますが？」

「まあやつ言わずに、カオル君。君には十一騎士団を見てきてほしいのだよ」

「何で僕がそんな事を」

僕はいま校長室に居る。何を血迷つたかこの爺は今度の休みに、十一騎士団を見て來いと言つてゐる。何故そんな面倒な事を僕がしなければいけないのか。

ちなみに、十一騎士団とは国直屬の軍隊の事で兵数は少ないが実力は異質と言えるレベルだ。

「君は将来的に十一騎士団の十一番隊騎士団の絶対領域アブソルコート・テコトコに入るかもしれん」

「・・・・僕は世間一般で言つサラリーマンを指しているのですが・・・」

「君はサラリーマンと言つて器ではない。まあ兎にも角にも行きたまえ。と言つより行かなければ単位を取るからな」

……職権乱用じゃないか…ハア…

「やれやれ、何でこうも面倒な事を…まあ良いでしょ。貴方が言ったようにその十一騎士団とやらを見てきますよ」

2

僕は今、十一騎士団の見学に来ている。だが、今の僕にはそんな事よりも驚愕する事実が一つ。それは

「何でここに居るんだ……シン、カナ…」

二人がいたんだよ。いや、本当にビックリした。一人の隠し事つてこの事だつたんだろう。

「それはこっちのセリフだ、カオル」

「……もしかして、今日見学にくる人ってカオルなん?」

「ええ、まあ僕であつてると思つよ」

全く、一人で歩きたかったのに。

「いやあ、特例で見学にくるつちゅう奴がいるから何者かは気になつたけど……まさかカオルが来るとはなあ」

「ああ、俺もビックリだ。だがしかし、お前はその拒絶の力があるからいつかは来ると思っていたがな。まあこんなに早く来るのは夢

にも思わなかつたが

シンは苦笑しつつ答える。僕の方が苦笑したいのに。

「ハア……校長め……帰つたら部屋を潰してやる」

「ハハハ、程々にしとけよ」

…そんな気は毛頭ないが。

「まあ、善処しておくれよ」

「善処つて……知つとる? 善処つちゅうんは最初からやる氣のない人が使う言葉なんやで」

「ああ、知つているよ。だつて、最初から程々にする氣なんてないしね、フフフ」

そんな感じで笑う。まあ 一人じゃなくとも良いかな。

「まあ、取り合えず案内してやるよ。ついて来いよ」

僕はシン達の後に続き歩き出した。

三十分後

「で、此処が三番隊騎士団の訓練場だ」

「へえ、此処が三番隊の……ん、あの子達は」

僕が見た方にはクラス決めの時、僕より先に居た女子一人がいた。

「ん、なんやカオル、気になるんか?」

「いや、そう言う訳じゃない。ただ、クラス決めの時に僕より早く闘技場に来てたから印象に残つてたんだ」

「ああ、成程な。まあカオルは女には困らなそうだし。ついでましに限りだ」

「シン……どういづ」

「シ～ン～…どういづの意味や～今の言葉?」

「カツ、カナ!？」

僕の後ろには物凄い黒いオーラを纏つたカナがいた。

「おつ落ちつけカナ。俺はお前が一番だ」

「うん、そないな事はわかつてんちゅうねん。カオルの事がつらやましいちゅう事はどういづの言つづりちゃきいてんねん」

どんどん魔力を杖に込めて行くかな。ウワア、これが修羅場つてやつか。面白いな。

そんな事をしているとさつき話した出てた二人がこっちは向かってきた。

「またやつてんのあんた達は?」

「ホンシト、懲りないね～…シン君も」

一人は来るや否やそんな事を言い出した。
もしかして、いつもの事なのか？

「いやあな、シンが一人ん」とヤラシイ目で見よったから注意して
んねん」

「なつ、断じてそんな事は無いぞー。」

「え～、シン君エッチ～」

「全く、彼女がいるのに何をやつてるのシンは

「ちよ、何でそんなふうになる！ カオル、お前からも何とか言つ
てやつてくれ

おつ、半分空気になつていた僕に話しかけてくれた。嬉しいねえ。

「……でもシン、事実じゃないかい

僕は前、見捨てられた事を根に持つていたので此処はあえてシン
の敵に回つた。

「なつカオル！？ お前裏切る気か！！」

「ん、裏切る？ 元々協力したつもりもないけど

フフンシツといつた感じでシンを見る。隣では黒いオーラで毘沙門天

を作り上げて、目が光っているカナがいた。うわあ、怖いねえ。

「カツカオル、助けてくれたら学園の売店に打つてある特製プリンを五個奢るから！」

学園の売店の特製プリン……一個五百リート（一リート＝一円）するプリン。しかしそのおいしさはまさに甘党の僕にとっては最高のスイーツ。是非とも食べたい。毎日一個で我慢しているがそれを五個も買つてくれる…だがしかし

「……十個なら良じよ（笑）」

僕は笑顔でそう言つた。

「クッ…、足元見やがつて！ なら、六個でどうだ？」

「十個！」

「…七個は？」

「十個！」

「マジ、八個で勘弁して下せー！」

「……ハア、わかつた。八個で妥協しよう」

むう、泣きながらそう言われると断れないじゃないか。

そんな事を思つていると、カナはシンに対し、魔法を放つてきた。

「うひがおるのに… ゆるさへんでええええ…！」

「ハア…」

僕はため息をつきながら手をかざす。辺りに硝子が割れたような高い音が響く。

案の定、僕の障壁に弾かれるカナの魔法。

「ハア…落ちついて力ナ。二人も離し立てない。カナ、考えても見なよ。幽靈を怖がるような胆の小さい男のシンが」
「オイッ、どう言つ事だ！…！」
「胆の小さいシンが」
「無視か？無視なのか？」
「胆の小さい少年Sが」
「だからヨウヘツ……バタツ」
「五月蠅いよシン。思わず足が出ちゃつたじやないか」

僕はそう言いだした足を引っこめる。

「テツテメエ…奢らねえ」
「……（スツ）（手を構える音）」
「嘘です。絶対に約束は守らせていただきます」

シンは少し震えながら答えた。

「ハア…全く、次ふざけた事をぬかしたら……潰シマスヨ」

「ヒィー！？」

僕はシンの股の間の上に足を構えながらソッフと言った。

「……何か怒る気失せたわ……」

「まあ、それが一番。所で、貴方…誰？」

えへ、今さらですか～。まあ名乗るけど。

「僕ですか？ 僕はカオル・L・A・シンフォニーです」

初対面と言う事で敬語は絶対。

「……君があの絶対拒絶型の……フウン、私は雪波鈴で良いから。私もカオルって呼ばせてもらつよ。一応先輩だ」

「はい、よろしくお願ひします」

雪波？ …もしかしてあの雪波 咲代の子孫か。成程、だから三番隊所属ね。

ちなみに雪波咲代とは、十二騎士団創設時の三番隊隊長だった人で、数々の伝説を残している。

「で、貴女は？」

僕は先輩と一緒に来た女の子を見た。

「ボク～？ ボクの名前は雪波 雪。よろしく～カオル先輩。私の事は～雪で良いよ～」

何か気の抜けた喋り方だな。と言つより同じ姓じゃないか……つまり

「二人は姉妹なのかい？」

「ああ」「そだよ～」

でも、大分印象が違うね。

「さてと、そろそろ僕は行くとするよ。もつ見る所は見てしまった
しね」

「そうか…んならまたあ

「ちょっと待て」

「　　した…」

言葉を遮られ、帰ろうとしたところを止められる。

「ん、何ですか？」

僕が後ろを振り返ると、木刀を構えた先輩が居た。

「私と手合させして頂けないかな？」

「…ハア？」

「だから。手合させしてって言っているんだーーー！」

突然何を言い出すかと思えば

「僕は帰りたいんですけど…」

「駄目だ！ 先輩命令で私と手合させをしろーーー！」

「おい、其処の三人、何とかしてくれないかい？」

僕が三人にそう言つ。するとカナが答える。

「あ〜、諦めカオル。あんなつた鈴は止まらへんねん。まあうちらも気になるしなあ」

カナがそう言つて一人を見る。

「まあな。創造の力と拒絕の力、どちらが上か知りたいし」

「ボクはただ、カオル先輩の実力が知りたいだけだし」

成程、誰も味方はいないと。諦めよ。

「はあ……、なら野太刀位の長さの木刀が何かないですか？ なければ普通の木刀で良いのですが……。流石に丸腰ではきついので」

僕がそう言うと先輩は了承してくれる。そして一本の長い木刀を僕に投げ渡してきた。

「さあ、これで準備は整つただろう！ 始めるぞ！」

先輩はそう言つと、コインを空に投げる。そして、コインが地面に当たり音が響く。

「先手必勝！ 神速抜刀・神威！！」

激しい鬪氣と殺気が僕に飛ばされ、拘束の刃が僕の首元に向かっ

てくる。僕は咄嗟に障壁を展開し、その刃を防ぐとした。しかし、障壁一枚では防ぎきれなかつたようで、僕は更に三枚の障壁を展開。その内一枚を破られたが、何とか防ぎきつた。

「～～ッ！？ 流石は三番隊・神風シンモンフオンの隊員なだけはある」

即席とは言え、三枚もの障壁をいとも簡単に破壊されると予想外だった。

「噂に名高い絶対領域なだけはある！ 即席で四枚もの障壁を展開するなんて！」

先輩は嬉しそうに木刀を鞘に納めるように構え、体制を低くする。

「しかし！ スピードについてこれなければ意味はない！ 神速抜刀・俊足滅敵！…！」

先輩が僕の目の前から消える。いや走り出したと言つのが正しいだろう。しかし、速すぎて目視する事が出来ない。

「速さは力！」

「～～ッ！？ 流石は十一騎士団の隊員なだけはある！」

僕は何とか反撃しようとしたが、移動速度が速すぎて攻撃ができない。

「これで終わり！…」

やられる！ 僕はそう思つた。しかし、その瞬間にオレンジの曼

荼羅型の障壁が展開される。

鐘を撞いた様な低く響くような音が辺りに鳴る。

「！？ 障壁を展開した！？ しかも、今の速さだと騎士団長レベル！？」

先輩は再び距離を取る。

僕はこんな障壁を無意識の内に展開したと言うのか！？

「…… フツ、絶対拒絶型を甘く見ないでくださいよ」

平常心を装い、この障壁を展開したのが自分の意思だと言う嘘をつく。これをするれば、恐らく迂闊には攻撃してこないだろう。

「さあ、今度は僕の番です！」

僕はそう言つと、足元に障壁を展開する。その反動で僕は急加速を行い、一瞬の内に先輩との間を詰める。

何故反動が起きたかと言つと、絶対拒絶型の障壁の効果にある。通常の障壁は、自らの体に限りなく近い場所で展開される。しかし絶対拒絶型はある程度の空間を置いて、障壁を展開するので、例えそこに何があるとしても、それを押しのけて近くから一定の場所まで動くのだ。

その時の反動で僕は急加速を行つたのだ。そのため、僕がいた場所の地面は、障壁を展開した四角い跡がくつきりと残つている。

「八獄大叫喚・異々転処！」

僕は先輩の腹に蹴りを当てる。そしてそこから障壁を展開し、先輩を壁際まで吹き飛ばす。更に足元に障壁を展開し、僕は飛び上が

る。

「クツ、身動きが！」

身体を強打した反動で、身体が動かなくなる先輩。僕はその真上から回りながら落ちてくる。そして落ちた瞬間に先輩の頭の上で木刀を止める。

「僕のか…ツ…!?」

「わ、私も一応十二騎士団の一人なんでな」

僕は勝ちを確信していた。しかし、僕が頭の上で木刀を止めたと同じくらいに、先輩も僕の首元に木刀を当てていた。

「…………引き分けって所ですか？」

僕がそう問うと、先輩は頷く。僕は木刀を引いて、先輩に手を差し伸べる。

「立てます？」

全身を強打しているので、一応聞いておく。

「ああ、問題ない。しかし、君は強いな」

「ハハハ、先輩に比べたら全然ですよ。僕は少し前まで魔法が使えない落ちこぼれでしたから」

「落ちこぼれ？　君がか？」

まあ絶対拒絶型の魔法使いが落ちこぼれ何て言つていいたらおかしいだろ？僕は先輩に今までの事を話す。すると、先輩は納得したように頷く。

「成程、魔法が使えないと思つていから武術の方だけは鍛えていたと」

「ええ。まあやつでもしないと抵抗はできませんしね」

実際、体を鍛えていなければ死んでもおかしくない様な事も何度かあった。

「では、僕は帰らせていただきます」

僕は先輩に一礼し、シン達の元に向かつ。

「シン、約束を忘れないでくれ。じゃあ、また明日」

僕はそう言つて闘技場を出る。しかし、十一騎士団見学と言つたり叫んでいた。僕の一冊は終わった。

祇園の歌舞妓業（祇園や）

文才が無くて「おんなぢ」…

今日はAクラスと合同で武器召喚授業を行つ事になつたようだ。だから僕は登校してすぐ闘技場に向かつた。

「おっ、早かつたな。お前が一番だぞ」

「……君のおかげで驚かされたけどね」

「ん、何でだ？」

本氣で言つているのかこの人は……。

「あのねえ、何の連絡も受けていないのに学校に来たら黒板に“今日は武器召喚授業だから八時十五分までに闘技場に来い”と書いてあつて驚かない訳無いだろ」

「ハハハ、でも、お前は間に合つているから良いんじゃない？」

「……多分他の人達は遅れると思うよ。何時も教室に来る時間が八時二十分位だからね」

「…………マジか？」

「マジだよ」

おや、先生が大量の汗をかきだしたぞ。どうしたんだ？

「ヤベー、あいつ等が遅刻したら……」

「遅刻したら？」

「減給になるだろ？ があああああ

「… それは君の責任だろ。彼等は悪くなじよ」

全く、ちゃんと連絡をして置けば良いのに。

「クソッ、あいつ等遅れでもしたら反省文五十枚くらい書かせてやる

うわ～、最低だ～。

「フツ、そんな事したら君の頭を開いて直接脳を搔き回してあげるよ

「……お前、本氣で怖いぞ

「それよりも手足を潰して抵抗できないようにして、生きたまま口の中にパイプを突つ込み胃袋に直接寄生虫を入れてあげようか？」

「減給で良いです」

先生はかなりの速さでそう答えた。

そんなに嫌なのかな？まあ、「冗談だけど……多分。

そんなやり取りをしていると八時十五分になつた。Aクラスの人達はもう全員そろつた様だ。しかし、Sクラスは僕しかいない。

「シンヤ先生、もう八時十五分になりましたけどSクラスは…」

「全く、しょうがないや」

「すみません先生、昨日この馬鹿が連絡し忘れていまして今日の授業が武器召喚授業だとは知らないんですよ。ね、せんせい」

「　はい」

「そうでしたか。シンヤ先生、この事はひやんと校長に伝えておきますから」

「そつそれだけは…」

「ハア、何をやっているんだか。」

「そんな事を思つていると、一人の生徒がこちらに近づいてきた。

「ハツハツハ、Sクラスとあらうものが遅刻なんて……君たちにはSクラスが勿体無いんじゃないかい？ 落ちこぼれクン」

「君は…………誰だっけ？」

ズルツ

僕以外の全員がこけた。

「この俺を忘れるだと！？ フツ、まあ良いだらう。俺の名前はギルフォード・アベンジャー、ご存じ、アベンジャー家の後継者だよ」

「……ああ、思い出した。あのクソ貴族野郎か。確か、実技は良い成績を出しているみたいだけど、筆記の方は毎回最下位争いをしている（笑）」

そつだそつだ、こいつは良く僕を落ちこぼれって言っていた奴だ。

「余計な事は思い出すなーー！」

「ハア、だったら話しかけないでくれないか？ と言うより視界に入つてこないでくれないか？ 君を視界に入れると言つ行為は、僕の中では鳥肌ものだからね」

「な、貴様、僕を誰だと思っているーー！」

「うーん、親の脛かじり、七光の馬鹿、何かと家柄を持ちだす実力のないクズ、だね」

「き、貴様！」

雷属性初級魔法「ボルトランス」

雷の槍か……でも、初級魔法じゃ僕の障壁を破る事は無理だね。

「死ね！」

ギルフォードは僕に向かつて槍を投げた。

硝子が割れるような音が響き、雷の槍が砕け散る。

「なつ、何だと！？」

「ハア…、この程度の攻撃で僕を倒そつてのが間違いなんですよ

僕たちは睨みあう。

「二人とも、や

「はいはい、止めるかお前達」

シンヤ先生が、もう一人の先生を遮つて中断に入った。

「全く……力オル、お前も挑発するんじやない。君も、魔法を使っていいと思っているのか?」

「クッ、だがそいつが僕の事を馬鹿にしたから悪いんだ!」

「ハア……、良いかギルフォード。お前の魔法じゃこいつの障壁は破れない」

「な、何だと! 僕を馬鹿にしているのか!」

ギルフォードはキレたように怒鳴る。

「あのな、俺が最上級魔法を使つても破れなかつた障壁を、一生徒がそれも初級魔法で破るなんて不可能に近い」

先生がそう言つ。すると僕とシンヤ先生以外の人達が僕の方を見た。

「ハア、僕はこう言つのは嫌いなんだけどね。」

そんな事を思つていると、闘技場の扉が開いた。

「…………」「…………」

「お、お前等遅いじゃないか。もう一十分だぞ

「…………死ね!!!!!!」「…………」

五人の蹴りが、シンヤ先生に直撃した。鈍い音が闘技場に響く。

「「メクラス！？」

奇声を上げ飛んでいく先生。気持ち悪い。

「お前等…。教師を蹴るとは良い。」

「先生？」

「ナンテモナイデス」

僕がちょっと笑顔を見せると反論しなくなる。良い傾向だ。

「カオル、お前もつ来てたのか。と直つより先生に向をしたんだ？」

シンがそう聞いて来る。

「やつだね。一寸ばかり脅……じやなくてお話ししただけだよ」

僕がそつ答える。

あれ、何でだらり。眞が苦笑している。

「ハア、もう良い。時間になつているんだ。授業を開始するぞ」

先生の一言、あるとAクラスとBクラスの全員が先生の方を見た。

「じゃあまず、武器召喚について……カオル、説明しりー。」

「ハア、仕方ないね」

僕はため息をつきながらその場で話し始めた。

「武器召喚とは、主に武器を召喚する事を指す。別名で武器生成。しかし何故武器召喚と呼ばれているかと言つと昔、拾貰騎士団の団

長が国王から神具、魔具、聖具を召喚したことから言われるようになつた。

しかし何故国王から授かつたと言われているかと言つと、元々王國に保管してあつた武器だつたからである。その事から稀に途轍もない武器を召喚する人もいる。例えば、今から約三百年前、東の国の工藤源三郎くどう げんざぶろうが妖刀・村正を召喚したという事例がある。他にも西の国のシルヴァ・セイリングスが王剣・デュランダルを召喚、南の国のサリム・フレイシアが崩劍・骨喰藤四郎ほねばみとうじやうを召喚。北の国ではイグニス・レイファーンが天守・カフヴァールを召喚したとそれでいる。

しかし、多くの人間は自分に合つた武器を生成すると言つ形になる。そのため、武器生成とも言われている。この武器生成で作られた武器は魔武器と呼ばれ、能力が付いている。

だが、武器召喚はその武器の元々の能力と、自分に合つた能力の一いつが付けられる。

最初は自分に合つた能力しか使えない。武器を召喚した時点で第一次解放、そして、武器の元々の能力を発動できるようになった時第二次解放と呼ばれる。さらに、その武器の真の力を發揮できるようになった時を幻壊解放と呼ばれる。

幻壊解放を出来たのは千年前の拾貳騎士団の壹番隊団長と參番隊団長、肆番隊団長と玖番隊団長、そして拾貳番隊団長しか出来なかつたと言われている。

以上で良いかい？」

「ああ、上出来だ。ちなみにこの学園の先輩の雪波 鈴は神具・布都御魂を召喚しているぞ。頑張ればお前達も神具とかが出せるかも

な

先生がそう言ひ。

「じゃあこの、召喚生成石を取りに来てください」

Aクラスの先生が石を見せて全員に言ひ。するとAクラスの人達は、我先にと言わん感じで突つ込んでいった。

「うわっ、醜いですね」

「本當だな」

「何でそない急ぐんか…、いまの状況には理解できひん」

「バカ……だから?」

「バカなんでしょうね」

四人からは酷い意見が出ている。

「みつ皆さんそんな」と言っちゃダメです! たとえ醜い争いをしているどりしようもないクズ共だったとしてもそれは言っちゃダメです!-!」

ハッキリとそう言った。

ミリア、君の意見が一番酷いと思つよ。

今この場に居る全員が思つた事である。しかし口に出さない。後が怖いから。

そんなやり取りをしていると、人だかりが小さくなつたので僕達

も石を取りに行く事にした。

「おひ、お前達が最後か。ほれ、これが召喚生成石だ」

僕達は先生の投げた石をキャッチし、元居た場所に戻った。

「じゃあ、誰から始める?」

アリアの一言。するとシンが

「全員一緒にやって後で見せ合おう」

と言つた。そして僕達は別々に武器召喚を開始した。

2

「さてと、武器召喚をしろとの事……難しいねえ」

僕はどうじたらいか分からず悩んだ。一応、やり方は知つていいのだが、魔法陣を書くのが面倒、と言つて別のやり方にしようと/or>している。

「やうだ!」

良い事を思いついだぞ。えーと、ナイフを出して

「ツ…、少し痛いね」

僕は指の先を斬つた。そして出てきた血を石に垂らす。その瞬間、光が辺りを包んだ。

「ん、此処は何処かな?」

僕は一面真っ黒な空間に一人たたずんでいる。
さつきまで闘技場に居たはずだが…。

「まあ、気にしたら負けと言つ事にしておけ」

僕はそう呟き、辺りを散策する。すると一つの懐中時計が宙に浮いていた。僕はそれを手に取り、蓋を開ける。そこには子から亥まで書かれた時計があらわになる。しかし、丑以外の文字は全て黒色。丑のみが白色だった。

「？ 何だこれ？」

僕がそう呟く。すると、頭の中に声が響く。

(汝、十一の魔王を手にする資格のある者
人でありながら、魔王を扱える者
魔王を手にし、汝は何を望む？)

恐らく、この懐中時計からだろう。

僕が何を望むか？

「何を望むか…… そうだね、強いて言えば平穀かな？」

(その気になれば、世界を制する力ができる)

「世界を制する？ フンッ、そんな面倒な事、こちから願い下げ
だよ」

思つたままの事を言つ。世界を制する？ 何故僕がそんな事をし

なければならぬんだ！ キツイ、ダルイ、メンドクサイ。略して
K.D.M。

(…お前は面白い

良いだろう！ 我を手に取れ！

そして我を扱え！

今はまだ一つの魔王しか扱えないが、いずれ使える時が来るだろ
う！

全ての魔王の力を！ 汝ならなー！)

その瞬間、辺りの空間が弾け、景色が闘技場に戻る。

「…………これが、僕の武器…………魔王十一刀」
まおうじゅういちがたな

3

「皆終わった？」

シンがそう尋ねる。僕を含めて全員がその問いに頷く。するとシンは何処からともなく巨大な剣を取りだした。

皆もそれに続く様に、それぞれ武器を取りだしていく。僕は懐中時計。かなり浮いている。

「じゃあまず俺からな。俺はこの“神剣・エクスカリバー”が出て
きたぜ。能力は太陽光を集め、獄炎を作る事だ

ほう、神具が出てくるとは…。とんでもないな。しかも十一騎士
団創設時の一番隊騎士団長が使っていた武器を召喚するとは……

流石、当時の一番隊隊長の子孫と言つたところだ。

シンの持つ剣は、全長約一メートル、幅が約五十センチの大剣が握られていた。

「重くはないのか？」

僕はそう問う。するとシンは首を横に振る。

「それが、全く重さを感じないんだ。ほら、持つてみろよ」

そう言いシンは剣を僕に渡す。しかし

「ウワツ、メチャクチャ重い……」

剣の重さは大凡だが四十キロ位。しかし、柄の部分を持つと更にその倍近く感じる。

「ヤツパリ、自分に合った武器が出てくるようだね」

僕がそう言つと、シンはフウンと頷きながら、エクスカリバーを手に取る。

「じゃあ、次はうちや！　うちのはスコイド…何との。“神杖・ケルキオン”や！　能力は詠唱破棄と魔法強化や！」

詠唱破棄はかなりデカイ。後方援護攻撃を得意とする力ナは、基本的に詠唱の長い超攻撃特化型魔法を良く使用する。そのため、詠唱を破棄した場合それをほぼノータイムで発動してくると言う事である。

さらに魔法強化まで付くと言つと……ある意味最強の武器を手にしているのかもしれない。

皆は同じような事を思つてゐるのか、ポカーンとした表情になつ

ている。

「ハハハ……カナのは凄いな……」

僕は苦笑しながらそう呟いた。

「レナ、次良いかい？」

僕がそう問うと、レナは頷き銃を取りだした。

「レナのは……」の“ファートウム”……能力は魔弾生成……魔弾射撃……と……形状変化……の……三つ」

レナはそう言い全長三十センチ程の一挺拳銃を取りだした。

「魔弾？」

僕は気になる単語に質問を入れた。

「……（「クッ」）。例えば……撃った後に……銃弾を……操作したり」

成程……。カナもそつだつたが、何でこんなに凶悪な武器が出てくるんだ。

「じゃあ、次は私ね。私はこの“魔槍・ゲイボルグ”よ。能力は突いたら三十の棘となつて突いたモノを破壊し、投げれば三十の鎌となつて相手を襲つわ」

ほう、これもまたすばらしい物だな。そして突いたモノを中から破壊する能力や投げれば広範囲の攻撃が出来る能力……はあ……も

うチートバンザイ！

僕は自分のキャラが分からなくなってきた。

「それでは私の番ですね。私のはこの“神弓・アポロン”です。能力は光を使って矢を作る事です」

光での矢の生成。つまり光がある限りは無限に矢を放ち続ける事が出来ると言う事。何とも素晴らしい！惚れぼれする位のチート！ああ、良い武器を出すのは難しいと思っていた自分が馬鹿みたいだ！

僕がそんな事を思つていると、全員がこっちを見る。ああ、僕だけまだ言つてないな。

「僕の武器はこの、魔王十二刀だ。えっと……斬殺、“魔王・紙”！」

僕がそう言つと、丑の字が消え一本の野太刀が現れる。

「このように十二本の刀を取りだす事が出来る能力。そして、その刀一本一本に能力がある。まあまだこの魔王・紙しか使えないけど」

「全部に能力があるって……規格外も良い所だなおい……」

シンがウワアと言つ視線を送つてくる。しかし、君達にだけは言われたくない。

「その言葉をソックリそのままお返しするよ」

僕がそう呟くと、全員クスリと笑い先生の場所に向かった。

「カオル！」

「カオル先輩！」

先生の元に行くと、僕は先生の後ろにいた一人の女性に抱きつかれる。

「！？！？ 先輩に雪ちゃん！？」

「やあ、一昨日ぶりだな。後、私の事は鈴と呼べと言つただろ？」「こんなにはです、先輩」

「そそそ、そんな事より離して下せーーー！」

僕は顔を真っ赤にし、全身を硬直させながらそう言つた。緊張で震えているのが分かる。

「何故だ？」

「何ですかー？」

「むむむ胸が当たつててますすすーーー！」

「ハハハ、カオルは面白いな！ それに、当てているんだ

「先輩震えすぎですよ（笑）。それに、当てるんです～」

グニッと言った感じで変形している一人の胸。此処までされるのは初めてで、僕の心臓は破裂しそうなくらいドキドキしている。

しかも男子生徒からは

「何で落ちこぼれのあいつが！」

「いや、今は落ちこぼれじゃなくともつらやまし過ぎる…」

「二人とも萌え～。しかしあいつは氏ね！」

「はあはあ…、鈴様に零タン、可愛すぎるよ～。ただしあの男は死ね！」

などと叫び声が上がっている。

いやいやいや、僕が悪いの！？ 僕が悪いんですか！？

そしてレナ、アリア、ミリアの三人からばどす黒いオーラが出ている。一緒にいるシンとカナが顔を真っ青にして震えている。

「レナが…居ながら…デレデレして…」

「あの女垂らし！ 戻ってきたらタダじゃおかない…」

「カオル君が…カオル君がカオル君が… もつこれは監禁すべきですね…」

三人がそんな事を言っていた事を僕は知らない。

何か寒気がする。兎に角、この一人に離れてもらわなければ、僕が気絶しそう。

「マジで離して下さい…」

僕がそのまま「一人は渋々と言つた感じで離れていく。

「むう、わがままなカオルは

「やつですよ。嬉しくないんですか～？」

「いや、嬉しくないと言つたら嘘になりますが……僕が持ちそつ
にないので……」

僕は顔を真っ赤にしながらそつ姫く。

「と云うより、何で此処にいるんです?」

「そうだ。先

「鈴!」

「読心術でも持つてゐるのか? まあ良い。鈴先輩は一つ上だし、
雪ちゃんに關してはまだ中等部だ。

「私達が居る理由は、カオルと

「お前と戦つてもらうためだ」

「言葉を遮らないでくださいよ」

「ああ、成程…………って、何故に何だと何ですと!」

「オツと、うつかり三段活用を…………じゃなくて、何で一人で僕に?」

「いや、お前じクラスの五人と戦つて一人で勝つたから」の雪波姉
妹二人と戦つてもらおうかなと思つてな。ちなみにこの一人はあそ
この五人より強いぞ」

「いやいや、そんな事は知つていい。

「！」の間、鈴先輩とは戦つて引き分けていふんですが……

妙な沈黙が僕と先生を襲う。

「…………マジで？」

「マジで」

僕がそう言つと、先生は僕から視線をすりし、頬を搔きながら苦笑する。

「ハハ、ハハハハハ……」

「…………先生……」

僕はジト目で先生を見続ける。すると先生が

「あーもー五月蠅い！ とつととやられて来いーーー！」

「そんなんあんまりだ！」

僕は先生に舞台上に投げられる。

「じゃあ、ルールを説明する。どちらかが降参、又は気絶、又は転移されるまで続けてもらう。ちなみにこの闘技場では致死量のダメージを喰らえば自動転移されるようになつていてるから。勿論、死にはしないぞ。だから思う存分やってくれ。では、始めーーー！」

有無を言わさずと言つ感じで、先生が即座にルールを説明し、コールをした。

「僕に人権はないんですか！」

僕は先生に向かつてそう言つた。

「フフツ、そんなに余裕で良いのかなカオル？」

「先輩、ボク達を舐めないでくださいね」

「何で！？」

「何故に二人は戦闘態勢なの！？」

僕がそう言つと、二人は当然のように口を開く。

「そんなの」

「カオル先輩が」

「好きだからに決まっているじゃないか（じゃないですか）」

……堂々とした告白をありがとう。しかし、理由になつていない！

「言葉のキャッチボール！ と言つか戦うしかないのか！？」

僕がそう言つと、二人は頷く。

あーはい、わかりました。

「もう良いや…（泣）。魔王十一刀の？、斬殺…“斬王・紙”！」

僕の手に細身の野太刀が現れる。

“斬王・紙”。ただ斬る事だけに特化した刀で、能力に完全切断、想像斬撃がある。

完全切断は、召喚武器以外は簡単に切り裂く事が出来る能力。想

像斬撃はその名の通り、頭の中で思い描いた斬撃を飛ばす事が出来る能力。

「私も行くぞ？ 来たれ、布都御魂！」

「ボクも行くよー？ 童子切ー！」

二人の手に刀が現れる。そして

「「喰らえー！ 双神抜刀く鬼神連撃♪ー！」」

二人は同時に逆方向に飛び、僕に斬りかかってきた。

「チツ、八獄六寒・青蓮！」

障壁を開き、一人の攻撃を防ぐと同時に、一人を峰で打ち、打つた部分めがけ紙を振るつ。

一人はそれを紙一重で避けたが、少し掠つたようだ。

「ツ…、やつてくれるなー！」

「！」の程度じゃ終わらないよー！」

青蓮は一撃目の打撃で青あざを作り、二撃目の斬りでその青あざから血が噴き出るようにする技。本来ならばかなり脅威となる技なのだが、当たらなければ意味がない。

「今の一撃が決まれば楽だったのに…残念です…」

僕は鞘に紙を納め、抜刀の体制を取る。

「八獄七熱……大焦熱！」

斜め下から上に斬りあげるよつに刀を振るう。鉄が擦れる音と、空気を斬つた音が闘技場に響く。

完全に静まりかえる闘技場。しかし、一人の生徒が笑いだす。僕を落ちこぼれだと言つていた、ギルフォードが笑いだす。刀を振つただけで何も起きていないじゃないかと大笑いする。それにつられ笑う者が現れ、闘技場が笑いに包まれる。

しかし、僕と対峙する雪波姉妹、Sクラスの皆、そして僕の担任のシンヤ先生は笑わずに、何が起きたかを察しようとしている。

「……罪には罰を、墮落せよ大焦熱地獄まで」

僕はそう一言言い、刀を鞘に納める。その瞬間
リイイン

鈴の音の様な音が闘技場を包む。その音で笑いは止まり、雪波姉妹は何かを察したのか、左右に急いで飛ぶ。顔を青くしながら。その後だ、闘技場に広範囲殲滅兵器がぶち込まれ大爆発を起こした様な轟音と、地割れでも起きたかと思う位の巨大な溝が闘技場に出来た。

「！？！？ 反則じゃない！？」

「先輩滅茶苦茶です～！」

雪波姉妹は顔を一層青く染め上げ、此方を見る。

「おいおい、どんな技使ったんだあいつ……」

「敵にだけは回しどうないな」

「……………！？」

「学校を壊す気なのかしら……」

「ほえ……、凄過ぎです……」

五人はポカーンとした表情を浮かべ、此方を見る。

「あああああああーー！　闘技場斬りやがつてえええーー！　給料がああーー！　俺の給料が減るかもしけねえじゃねえかあああーー！」

「いやシンヤ先生ーー？　給料より生徒の心配をしましょーーーー！」

教師は約一名、頭を押さえ叫びながらのた打ち回り、もう一人の先生はそれにツッコミを入れていると言う何とも言えない状況だ。

2

暫くして全員が落ち着きを取り戻す。雪波姉妹も何とか戦闘態勢を整え、刀を構える。しかし

「『』めん、降参する

僕はそつ一言言った。

「……………ハア？」

「……ハエ～？」

一人はポカーンと言う表情になる。闘技場にいた殆どの人がそうだ。しかし、シンヤだけは見抜いたのか此方に近づき、一人の勝利を「ホールする。

「勝者、雪波姉妹」

「え？ いや、先生？ 一体どう言つ事だ？」

「そうですよ～。力オル先輩はまだ戦えるんじや…」

闘技場の全員が疑問に思う。闘技場を斬り裂いた様な技を使う者が、何故此処に来て降参するのかと。

「おい、力オル。お前の腕を見せてやれ

シンヤがそう言い、僕の方を見る。僕は一回頷くと、ロープの中から腕を出した。

「「「…?…?」」

雪波姉妹は目を見開き絶句した。

まあ無理もないだろう。血を噴き出し、あらぬ方向へとねじれ曲がっている僕の腕が其処にあるのだから。

「いやあ、まだ不完全だから使つたらこうなる事くらい分かっていんだけど……つい

「全く、怪我をするな怪我を。もしかしたら俺の責任になつて治療費を持つ事になるかも知れないじゃないか」

本当に教師なのこの人は…と言つ疑問が闘技場の全員に浮かぶ。

「さてと、僕は医務室へと行つてくるよ。あそこならこの腕を治す位できるだらう」

「ああやつしる。迅速にな。下手したら給料が減るかもしれんから」

僕はシンヤにさつ言わされたので、すぐさま医務室へと向かい治療を受けた。

3

今回の後日談なのが、僕はレナ、アリア、ミリアの三人にこれでもかと言う位説教を受けた。その時間何と一人に付き約三時間。しかもその間ずっと正座と言う拷問付きで。更に完成するまでは絶対にあの技を使うなど約束までさせられ、契約書まで書かれた。僕の拇印付きで…。

何とも納得のいかない結果となってしまった。

そして余談なのだが、雪波姉妹が積極的に僕に会いに来てはくつ付いて来るようになつた。正直、以前にまして辛い（半分は嬉しい）日々を送っている。ちなみにこの事でレナ、アリア、ミリアの三人も余計にくつづいて来るようになつたのも僕の悩みの一につになってしまった。

幼なじみ（前書き）

更新です。

朝起きて、一通り用意をし、学校に行く。これが僕の四年間変わらないであろう日常。学校に行き、授業を受け、放課後になつたら寮に帰る。何事もなく、ただ淡々と過ごして行くはずだった僕の計画。その計画が、経つた今、音を立てて崩れ去った。

「何？ 何なの？ 何なんかい？ その表情は？」

「一体どう言つこのなのかな？ アタシが居ない間に良い御身分になつてしまえ！」

「何で……」

「顔色悪いよ。大丈夫？ 大丈夫かい？ 大丈夫ですか？」

「いつから力オルは女説しになつたのよ！」

「何でこいつ等が……」

「まあ大丈夫なら良いや、良いけど、良いですが」

「昔はアタシしか……」

「何で二人が此処に居るんだい！」

僕はそう男と女の両方にいつ。

「何でと言われても……ボク達がこの学園の生徒だから、ですから、なんだから」

「まあ、末端のFクラスだから知らなくても無理はないけどね……じゃなくて！ いつからあんたは女説しになつたのよ！」

女説しになつたつもりはない……。

「……ちょっとええか？ カオル、あの一人誰や？」

カナが全員を代表して聞いてきた。全員興味しんしんと言つた感じで此方を向いて来る。

はあ……、紹介するしかないみたいだね。

「オイ、歎^{なげき}、リリナ、自己紹介をしてくれ」

僕は一人に聞こえるようにそつ言ひ。すると歎はボクが最初にと言いつ、一步前に出る。

「ボクは歎、狂咲^{くるげさき}歎。一年Fクラスだよ、ですよ、でござります」

歎はそつ言つて頭を下げる。

「ボクはカオルの幼なじみ（男）なんだ、なんだよ、なんですよ。よろしくね」

自分の自己紹介が終わると、歎はリリナを前に出す。

「アタシはリリナ・ヴァンウインクル・クルセイティア・オーディアン。リリナで良い」

リリナはそう言いシンとカナ以外の三人の方を向く。

「カオルの幼なじみ（女）なの。仲良くしましょう」

……なんか凄いオーラが出ている様な気がするのは恐らく氣のせいだろう。そして三人からも何かすごいオーラが出しているのは氣のせいだと思いしたい。

「クックク、まだ女性が苦手なの？ なのか？ なんですか？」

「い、いや、ある程度離れていたつもりだったんだが……」

「まあ、今のカオルは昔では想像ができない位女性と普通に接しているし、こるから、いるんですけど、問題ないと思つね、思うよ、思いますよ」

まあそりだらうな。昔はすぐに顔を赤くし逃げていたから……。

「で、歎。お前のその口癖は治つてないと」

「口癖？ ああ三段活用（偽）の事かな？ 事なの？ 事ですか？」

「ああ、それだそれ」

普通ならあり得ない口癖だぞ。

「いや、だつてボクは何のとりえもないから、せめてこれ位しない

と影が薄く、薄くて、薄過ぎて、存在が分からないから……」

いや、かなりのイケメンだし……。まあ影が薄いことは否定できないが。

「しかし……まさか君がＳＰＥＣＩＡＬだなんて……」

「スペシャル？ 何だそれ？」

「ああ、カオルは分からないか。いい、ＳＰＥＣＩＡＬはボク達FクラスのメンバーがSクラスに当たる別名みたいなものだ、ものなの、ものですよ。SクラスのSとＳＰＥＣＩＡＬのSだら、Sですよ、Sだから」

成程。それでスペシャルか。

「まあこじでも同じFクラスになると思っていたんだけど……、君はSクラスになるし、なるから、なつたでしょ。絶対拒絶型の魔法使いになつた、なつたし、なつただろ」

正直言えば、自分自身が一番意外だったけど。まさか僕が絶対拒絶型だなんて、夢にも思わなかつたから。

「でも、ボク等はボク等で楽しくやつていて、カオルもカオルで楽しくやつているようだし、よつだね、ようだから」

「……確かに、退屈はしないしね」

僕は暫く歎と話し、リリナは他の五人と話し仲良くなっていた。
そして一人は自分のクラスに戻ろうと、ボク達のクラスを出る。その時だ。

「痛！？」

「ウワツ！？」

リリナが誰かとぶつかった。

「ううツ、すいません」

リリナは頭を押さえながらその人に謝る。

「ツテエな！ この僕にぶつかってタダで済むと思つなよー！」

この喋り方、そしてこの声、何処かで聞いた事が…。

「この僕、ギルフォード・アベンジャー様にぶつかってタダで済むと思うな！」

……ああ、思い出した。闘技場の時の馬鹿だ。

「こいつ誰？ 誰だ？ 誰なんですか？」

「カオル、このバカっぽいの誰なの？」

二人はギルフォードを見ながらそう言つ。
いや、確かにバカっぽいのは認めるが……、本人を前にして言つ
か？

「き、貴様等！ 良く見たらその制服、落ちこぼれのFクラスじゃないか！ その落ちこぼれが僕をバカだと…」

ギルフォードが一人を指差してそう言つ。その瞬間、今までにいやかだつた二人から表情が消え、冷たい空気が辺りを包む。

「…………カオル、こいつ今何て言つた？ 言つてる？ 言いました？」

「カオル、こいつ何て言つたの？」

無表情で冷たい視線をギルフォードに向けたままそう冷たい声で聞いてくる。

「あ、いや、落ちこぼれだつて…」

僕は少し戸惑いながらそう答えた。

「そうだ、そいつが言つたように貴様等は落ちこぼれなんだよ！ 弱い奴は黙つて僕に跪けばいいんだ！」

ギルフォードがそう口にした瞬間、骨に硬い何かが当たる鈍い音と、ギルフォードの血が辺りに散つた。

「何て言つた？ 言つたの？ 言つたんですか！ ボク達を落ちこぼれだと…」

歎はそつ言いながらギルフォードに近づき、小さな鉄の鎌を振り下ろす。しかし、それはギルフォードの頭をすり抜ける。

次にリリナが動いた。するとギルフォードはXの字で空中につり

上げられる。

どう言つ事だ！？ 二人は何を！？

「オイ糞貴族、教えてやる、やろう、やりましょう。ボク達FクラスのFはFreelatage（粗悪品）のFじゃない。Folie（狂氣）のFなんで、なんだよ、なんですよ」

そう言つ。すると再び鈍い音と、血が飛ぶ。歎はまた一連の動作をする。

「な、何やつてんだよ歎、リリナ！」

僕はそう叫んだ。すると二人は、いつも通りの顔で僕の方を見る。

「あ、そつか。力オルは知らない、知らなかつた、知りませんね。ボク達の能力の事を」

「能力だと？」

すると歎は淡々と話し始める。

「魔力が無い、もしくは極端に低い人、魔力はあつても魔法は使えない人。そんな人の中には別に能力を持つた人が居るのさ、居るのだ、居るんですよ。それがボク達Fクラス」

「そう、そしてアタシは“人形使い”と言う能力を持つているの。文字通り人間を人形のように扱う能力。まあ指から魔力糸の類いを出して、それを絡めて操っているんだけど」

「そして僕は“出オチ”と言う能力。まあ名前はアレだけど、能力

の内容は因果律の反転つて言つチートなんだ、なんだよ、なんですよ」

そんな事を話していると、他の生徒から事態を聞きつけた教師がやつてくる。一人はそれを見て、また今度と言い去つて行った。

「……Fクラスって…チートの集団なのか？」

ギルフォードは無視して、僕はそんな事を思つていた。

サバイバル ～初日～（前書き）

内容は前回の物と殆ど変えておりません。

サバイバル（初日）

1

今日からクラインド杯の為に学年での予選が始まる。それが一週間耐久サバイバル。六人一組のチームで一週間学園所有の森の中でサバイバルを行う予選だ。何故六人一組かと言うと、拾貳騎士団の頃、騎士団隊長が六人ずつにわかれて模擬戦をしていたかららしい。その風習が今も続いているのであるづ。

基本的な陣形は、前衛一人、中衛一人、後衛三人らしい。僕達の場合は、シンとアリアが前衛で攻撃に徹底、僕が中衛で前衛、後衛の一いつの防御を担当、出来るなら攻撃も、そして後衛は力ナの大魔法、レナの召喚魔法と魔弾攻撃、ミリアの回復となるだろう。

そんな事よりも

「はあ……、サバイバルって……、僕以外にまともにできる人いるのかな？」

そう、僕は子供のころから修業でよく野宿をしているし、テントを持つていなかつたときは自分で家を作つたりしていた。食料も勿論自給自足、毒草や毒キノコは勿論知つており、毒を持った魚の食べてはいけない部位も知り尽くしている。

「…見た感じ、今までテントで寝た事はあるけど本当に野宿した事はありませんって顔しているし…」

僕はそんな事を思いながら周りを見渡す。

「よ、お前は何時も早いな」

「おや先生、おはよー」

「ああ、おはよー」

後ろにいた先生にあいさつを交わす。

「しかしサバイバルねえ。お前、サバイバル出来るか?」

「フツ、愚問だよ。むしろ僕よりサバイバルが上手い人はいないんじゃないかな、学生レベルではね」

まあそうだろう。両親を早くに無くしてそれからは修業ばかりしていたからね。サバイバル知識は結構なモノだよ。

「そりゃ

「ちなみに、食料以外なら持ち込んでいいのだろう?」

「ああ、飲料もダメだぞ。それ以外ならある程度のモノは持ち込んでは良いぞ。サバイバルナイフとか。あ、だがテントとかはダメだぞ」

「それ位はわかっているよ。それに、仮にテントを持ちこむ事を許されていたとしても、戦いありのサバイバルにテントを持ちこむなんて事はしないよ」

当たり前のことである。テントなんて重たい物を持つていてまともに戦える訳がない。

「まあそうだな。じゃあ寝る時はビーフするんだ?」

「それこそ愚問だよ。僕の今まで学んできたサバイバル技術を使って寝床を作るのさ。僕は防御魔法以外使えないからね。だからここ周辺の地形や洞窟、河川のありかなど全て記憶しているし」

「…お前、家でも作る気じゃないだろうな?」

「いや、そのつもりだけど」

先生は唖然とし此方を見る。

「…本当に出来るのか? や、出来たとしても家なんて作つたらすぐ襲撃されるだ」

「だからこそ僕の能力の出番じゃないか。絶対拒絶のね」

「まさか家の周りに障壁を張り続けるつもつじやないだろ? な」

「そのままかわ」

まあ、無理な事じやないし、僕が中等部時代に学んだ技術を応用して僕の魔力を使い障壁を張り続けるダミー人形を配置すれば問題が無い。

「本当に規格外だな」

「フツ、今セリジヤないか

「それもそりだな…クハハハハハハハハ

「ええ、その通り…フハハハハハハハハ

僕達は暫く笑い、先生がその場を離れて行った。

「お~い、カオル！」

後ろから足音と共に声が聞こえてきた。ようやくシン達が来たのだろう。

「おはようカオル！」

「おはよーせん」

「……おはよ

「おはよー、相変わらず早いわね

「おはよいでっか

五人があいさつをしてくる。

「おはよー

僕も一言挨拶を返し先生に全員来た事を報告する。

「皆、サバイバルした事あるか?」

僕の問いに全員が首を横に振る。

「でも……カオルが……居れば……大丈夫……」

レナがそう一言。するとレナ以外はどういつ事だと首を傾げる。

「カオル……サバイバル……得意。……こないだ……手際……良かつた」

？？ ああ、修業に行つた時か。

「ん？ こないだつてどういつ事だ？」

シンがレナに問う。

「こないだ……一人で……修業した。……連休の……時に」

「何だと！？」

「何やで！？」

「本当！？」

「良いなあ……私も行きたかったです」

それぞれが反応を示す。そして此方を向く。

「カオル？ まさかレナに手えだしどらりんよなあ？」

カナがニヤニヤしながらそう聞いて来る。

「出してないよ」

「何でださへんねん！」
「どう言つ事ですか！？」

カナの意味が分からぬイツツコリリ、ツツコリを返す僕。アリアとミリアはレナと話しあっている。シンは一人寂しく
「良いもん…、寂しくないもん…」
とか言いながら、のの字を書いている。

「まあええわ。で、カオルハはサバイバルの知識とかもつとるん？」

「ん？ ああ。大体はね」

そう言つて自分の持つている知識を軽く説明する。

「…………カオルが居つたら、サバイバルでは問題ないやん…」

僕達がそんな話をしていると、横で話を聞いていた全員が期待の目を向けてくる。

「ハア、まあ初心者に負ける気はしないけど…、僕がやるのは寝床探しと寝床作り。君達が食料を探すんだよ」

僕がそう言うと全員が頷く。どうやら物分かりが良いみたいだ。
流石はSクラスと言つたところであろう。

そんなこんなで話をしていると、サバイバルの説明が始まった。

「え～、第一に死なない事が大切です。だから皆にはこのペンドントの着用を義務づけます。このペンドントは致死量のダメージを受けたら割れ、転移されるようにしてありますので。勿論、ペンドントが割れ転移してたら、サバイバルの裏方の手伝いね

そんな感じの説明を長々と受けた。流石に眠くなってきたな。暫く説明を聞き流していくと、どうやら終わっていたようだ。

「以上で開会式を終わります。では、サバイバル訓練を……開始します！」

そう言つた瞬間に、僕たち以外の生徒は森の中に我が先にと言う感じで入つて行つた。全く、全員事前に確認していなかないのかな？まあ、この辺の地形は僕はもう把握しているから良いけど。

僕達は全員が入つて行くのを確認した後、森に入った。

2

「……此処から東に一・五キロ、そしてそこから北に一キロの所に洞窟がある。其処に行こう」

僕がそう言つと、全員が驚いた顔をしたがすぐに強化魔法をかけて、走り出した。

はあ……、僕は強化魔法が使えないんだけどな……。

そんな事を思いながら僕は皆の後をついていく。

「……何でお前は着いてこれてんだよ……」

シンが走りながら僕にそう聞く。

「ん？ 何がかな？」

「いや、最初強化魔法をかけて勢いよく走りだしたから、カオルが付いてこれるか心配したんだぞ！ それを何事もない様に平然とついて来るなんて……。お前、百メートル走何秒だ？」

「百メートル走？ 確か…九秒七八位だったと思つよ

「速！？ 素でそれか？」

「まあね。縮地を使えばもっと速くいけるけど…、こんな感じに…」

そう言つて僕はシンの百メートル程前に行つた。

「お前はバグキャラか！？」

そんな感じのやり取りをしながら、僕達は洞窟の前に着いた。幸い、僕たち以外に生徒はいない。僕はミリアに頼み、辺りの探知をしてもらう。また幸い、周辺には生徒はないらしい。その他にも、この洞窟の奥に水が湧いている場所がある。そこからこの森に川が流れているのだ。しかも森につながる川は、地下を通つて再び顔を出すので、水の出る場所をたどつても此処にはたどり着かないと言つ訳だ。

「さて、まずは…」

僕は一枚の紙と、六つの指輪を取りだす。

「ん？ 何よこれ？」

アリアが全員を代表して聞く。

「これ？ これはサバイバル用品の一つだ。今からこの洞窟の入口にこの紙を貼る。すると」

洞窟の入口がなくなる。全員は驚いた顔をして、入口のあつた場所に手を触れる。

「さわ……れる……」

「そう、これは幻影結界を作り出す御札みたいなものだ」

「いや、でもこれは反則じゃないんですか？」

反則？ 何で反則何だ？

「先生が持ち込んでいいないと言つた物は、テントに食料飲料、そしてテントや食料飲料を作り出す、もしくは取り出す事の出来る魔法具等。サバイバル用品の御札を持ちこんではいけないなんて言われてないじゃないですか」

僕が笑顔でそう言つ。すると皆は納得したように頷く。まあこの御札結構高価なものだから、誰も持つてこないだろ？と思つているんだろう。

ちなみにお値段は一枚につき五百万リート。そして指輪が二つ付いている。指輪を一つプラスしていくごとに十万リート増えていく。合計で五百四十万リート。しかし、この札の効果は剥がすまで続くので、このサバイバル期間中はずつと使える。

僕は全員に指輪を渡し、その説明もする。指輪をしていれば、洞窟の入り口も見えるし、結界の効果も受けない。

「さて、此処から仕事を分けよう。今日一日を有意義に使わせても

らう。僕が寝床作り、レナ、アリア、ミリアが洞窟の奥で魚と水を取ってきて。それと、洞窟の奥の方の天井に穴があいているから、この札を貼つて来てくれない?」

僕がそう言つと、三人は頷き、すぐさま行動を開始した。洞窟の奥なので、札を貼つてしまえば襲撃される心配はない。

しかも、洞窟の奥の穴は方は、外の山の上にある。まだそこまで生徒は行つていなかつた。

洞窟の中でも坂道と平坦な道では、平坦な道の方が移動速度は速い。だから心配はないだらう。

「じゃあ次に、シンとカナは森の方で片つ端から木の実やキノコとか食べられそうなのを取つてきて。後で僕が食べれるかどうか見ながら。あんまり遠くに行かなくても良いから」

僕がそう告げると二人は領き森の方へ出て行つた。さてと僕は・
・寝床を作りますか。

僕はそう思い、近くにあつた倒れた木を全て取つてきて加工する。足りない分は木の多い場所から木を切り取つてくる。

そしてそれらを運び、洞窟の開けた場所に置いては取りに行き、また置いては取りに行きと十往復位した。所要時間は約十分。

「えつと、まずは“斬王・紙”!」

僕は魔武器を取り出し、辺りを完全に平坦にするため、下の岩を斬つて行く。そして斬つては蹴り飛ばし、斬つては蹴り飛ばしを続けて約一十分。ようやく辺りは平坦になつた。

僕は持つてきた木を、組み立てて行く。そして言えの骨組みを作り上げるのに一時間。

「さてと、此処からは…」

僕は一枚の床と書かれた札を取りだす。そしてそれを近くにあつた木に張り付ける。すると木はひとりでに動き、骨組だけの家に床をつくつた。同様に壁、屋根等書かれた札を木に張つて行く。再び木材は勝手に動き、壁等を作つて行く。そして大体家が完成したので細かい補正などをし、最後に耐震、耐熱、防寒等の魔法符を発動させていく。

一時間後

洞窟内の少し開けた場所に家が建つていた。結構立派な家だ。勿論、力オルが建てた家である。「ゴツゴツ」だつた足場は、綺麗に整地され、バランスがしつかりとれている。

「フウ、久々に家を建てたから疲れたね。おや、これは」

足元に落ちていた石を拾う。

「ルメンラビス
光石じゃないか」

光石とは衝撃を与えると発光する石。その光の強さは大体蛍光灯と同じくらい。見つかりやすいが、かなり便利な石である。サバイバル時には欲しい逸品である。発光時間は大体一ヶ月間。一度衝撃を与えると光り続ける。

「他にもないか探してみるか…」

僕はそう思い、辺りを散策し始めた。

「小一時間で炎鉄、氷鉄、闇石にそよ風白銀、暖氷石まで…。此処は石を集めるにはもってこいの場所だね」

これだけあればまともな生活ができる。炎鉄は結構な温度が出る鉄で料理に仕えるし、氷鉄はその逆で冷やす事に特化している。闇石は光石に近づければ光を押さえてくれるし、そよ風白銀は扇風機代わりに使える。暖氷石は魔力を加えればお湯になるし問題が無い。

「しかも第三魔法使い（テイルティウムマガ）まで落ちているだなんて…」

第三魔法使いとは言わば分身を作り出す石と言つても過言ではない。してほしい事を思いながら魔力を流すと、形は石のままだが思い通りに動いてくれる珍しい鉱石である。

ちなみに、何故第三魔法使いかと言うと、世間一般で言う人間、獣人、神人、魔人の魔法使いは第1魔法使い（ブリームムマガ）と呼ばれ、魔法を使う上記以外のモノを第2魔法使い（セクンドウムマガ）と呼ぶ。

「これで防御壁を僕の力で張り続けてくれる媒介となる。うん、最高だね」

そんな事を呟いていると、奥の方からレナ、アリア、ミリアの三人が、入口の方からシン、カナの一人が戻つて来た。

「おや、お帰りなさい。思つていたより魚も木の実やキノコも取れているみたいだね。あ、それと、此處の水は飲めるよ」

僕はそう語つて全員の帰りを喜ぶ。しかし、全員はポカーンとした表情で、無言だ。暫くするとシンが口を開いた。

「これ……作つたのか……？」

シンは家を描画し、そう尋ねてくる。

「何を言つてゐるんだ。当たり前じやないか。こんな所に普通家はないだろ?」

洞窟は声が響いた
四人は大声で叫び
一人は目を開けてしている

「どうしたんだい？」あ、もしかしてこの程度じゃ不満だったかな

それは申し訳ない事を

いやいや、凄過ぎるだろ！？

江都才不凡

「ふえ、妻國[チホク]です」

何だ、不満を持っていた訳じゃなかつたんだ。それなら、僕も嬉しいね。

「じゃあ入るつか」

僕は効果をある程度持続させるために、大量に魔力を流し込んだ

第三魔法使いを家の四方に置き、中に入った。

家の中は光石の明かりで普通の家と殆ど同じ位明るくなっている。
6LDKなので一人一部屋あり更に、ベッドが付いている。風呂も
勿論ある。

『・・・・・』

「ベッドには葉布フォリウムバンヌスが敷いてあるからある程度は快適に寝る事が出来る筈だよ」

『・・・・・』

また沈黙。今度こそ不満が何かかな？　ならば申し訳ないな…。

そんな事を思っているとシンが僕の肩に手を載せ

「チートか？　チートなのか？」

と言つてきたので、とりあえず殴つておいた。

「……まさかサバイバルでお風呂に入れるだなんて…

アリアを始め女性陣が喜んでいた。

やつぱり風呂は大切だねよ。

この後、僕はシン達が取つてきた食材で料理をし、風呂に入つて
一日田を終えた。

ちなみに、シンの持つてきた食材の半分以上は猛毒で食べる事が
出来ないものだった事を伝えておく。

サバイバル（一日目・二日目）

1

一日目

サバイバルが始まり一日目が過ぎた。今日から本格的な戦闘が始まるだろう。早い所は今日の深夜一時くらいから行動を開始していようだ。しかし、僕達の居る場所は気付かず、他の班と潰し合つてくれているようだ。

このサバイバル訓練は一チーム倒すごとに十ポイント。そして僕達Sクラスを倒したチームは六十ポイント貰えるらしい。しかし、簡単にそれをさせないのが僕達Sクラス。朝から僕達が行動を開始すると、Eクラスの第三、第四チーム、Bクラスの第一、第三チーム、Cクラスの第八、第六チーム、Aクラスの第二チーム、が襲撃を仕掛けて来たので全て返り討ちにした。恐らく、僕達を倒せば一気に六十ポイント貰えるのでそれに釣られたのだろう。同じ学年だから、力で差があるなら数でその差を埋めようと一チームで来るクラスもいくつかあったが、そのどれもが十分持たなかつた。

ちなみに、Sクラスは第一チーム、Aクラスは第五チーム、Bクラスは第八チーム、Cクラスは第十チーム、Dクラスは第十一チーム、Eクラスは第八チーム、Fクラスは第三チームまである。

そして、現在のランキングは一位Sクラス（七十ポイント）、二位Aクラス第一チーム（十ポイント）、同率一位Fクラス第一チーム（十ポイント）、以下のポイントとなつていてる。

「ふむ、流石にあれだけ返り討ちにしたから襲撃してくる班はないね」

「まあ、皆開始一日目で終わって後雑用なんてものが嫌なんだろ?」

シンがそう言って、手に持っている水筒を開け、水を飲む。

「……誰?」

レナは一人後ろを向いてそう呟くと、手に持っていた魔武器のファートウムを容赦なく二十メートルくらい先の茂みに向かって放つ。しかも形状を神人が作り出した武器の自動小銃変えている。それもフルオートで。弾を魔力（下級魔法一発分＝弾百発）で作る事が可能なので、容赦なく撃ち続ける。しかもレナは魔人で、その中でも膨大な魔力を持つた部類となっている。そのため、魔力温存？何それ的な感じで銃を茂みに乱射し続ける。

「まだ……出て来ない。……魔弾・Full obssidion
e」

レナはそう言ひと、ファートウムの形を巨大なライフルに変える。

「！？ アンチマテリアルライフルですか！？ 初めて見たです…」

ミリアは神人の血も引いていて、科学の知識も勉強しており神人が作っている武器の知識をある程度持っている。そしてレナの持っているファートウムを物珍しそうに見る。

「皆…伏せて…」

レナがそう言つたので、僕達は地面に伏せる。すると次の瞬間、森全体に巨大な爆発音が轟いた。そして二十メートル位先にあつた茂みはあとからもなく吹き飛んでいた。

暫くすると

『～Dクラス、第十チーム全滅。Sクラスの合計ポイントが八十となります～』

と言つ放送が森に響いた。

この時僕は、レナの凄さに気付いた。そして同時に、絶対に敵に回してはいけないんじやないかと思つた。

「おお～、レナちゃん凄いです」

ミコアが目をキラキラさせ、レナを見る。レナは一言ありがとうと言つと、ファートウムを通常の形に戻した。
そして僕達はその場から歩き出した。

2

暫く歩いていると、僕はある珍しい木を発見する。

「ん？ ……あれは確か…」

「どうしたんだ？」

シンが訪ねてくる。僕はそれを聞き、一本の木を指差す。そして僕はその木に近づき、木の実を一つ手に取る。

「ヤッパリ！ これは甘実じゃないか！ うん、これが有ればデザートがより一層美味しくなるぞー！」

甘実とは、名前の通り甘いシロップ等が詰まつた実の事だ。赤色

の実にはメイプルシロップが、黄色の実には蜂蜜が、白い実にはホップクリームが、黒い実にはチョコレートシロップが入っている。僕は甘実の説明をし、シンに物質保存の補助魔法のボックスを使つてもらい、甘実を大量に手に入れた。

「あ、そう言えばさつきロクラスのチームを倒してから、敵にあってないね」

僕は甘実を取りながら、そう一言呟く。

「皆、萎縮してるんでしょ？ 迂闊に動けばやられるって

アリアが口を開きそう言った。

「まあ、少し地形に詳しい奴や、戦闘に詳しい奴なら、岩場や山頂に拠点を設けていると思うわ。でも、私たち自らが其処を目指して進軍しなくても、最終日に近づくにつれて、私達を襲撃する班が続々と出てくるはずだわ」

僕を含め、この場にいた全員がおおっと目を見開く。アリアは頭が良く、戦闘になると第三者の視点で物事を言つ事が出来る。また、戦闘時の作戦や、皆の戦闘配置、そして何時、何処で、どうやって敵を撃つかを考える事が得意だ。

「さてと、今日は拠点に戻りましょう。魚は昨日食べれなかつた分が有るし、今日取るべき食料は手に入れたわ。まあ、おまけも付いているけど…」

アリアがそう言つと、全員が僕を見る。
ん？ 何だろ？

「自分何で何だらうつて顔してんねん…」

「いや、だつて僕には思い当たるふ」

「だったらその抱えどるアカイ熊は何やねん！」

ん~、貴重なタンパク源じゃないか。それに、魚だつて何時までも持つわけじゃないし、魚ばっかりだと飽かるし。

「まあ美味しいから良いと思つけど?」

「力オル……熊……食べた事……ある?」

「ああ、勿論。ちゃんと血抜きをして、内臓とかも取つてしまえば臭くないし、結構美味しいよ」

僕はそう言い熊を抱え直す。

レナ以外はため息をつき、何も言つてこなくなつた。

「どうしたんだらう?」

僕はそんな疑問を抱きながら、拠点へと戻つた。そして洞窟の奥の方で、熊の血抜きと内臓を取る作業を行い、今日は終了した。

「」の日は僕が一人で行動する事になった。理由としては、シンの

二日目

腹痛だ。今朝起きたら、シンが呻いていたので、理由を聞くと、お腹が痛いとの事。そのため、薬草を探すべく僕が散策しているのだ。薬草は素人が見つける事は難しく、更に似たような毒草まであるから、女性陣に散策してもらうのはご遠慮いただいた。

ちなみに、シンが腹痛になつた理由は昨日の晩のつまみ食いだ。まだ調理していない食材をそのまま食べたため、食あたりしたのではないかと考えられる。

薬草も今さつき手に入れた。だから後は拠点に戻るだけだつた。しかし、僕は拠点に戻る前に面倒事に巻き込まれたようだ。今僕が面倒だと思つてゐる事は、目の前にいるギルフォードだ。周りにギルフォードの仲間はいない。そしてギルフォード自身もボロボロ。恐らく仲間を置いて逃げて来たのだろう。

「やあ落ちこぼれ。よく生き残つっていたね」

ギルフォードはそう言い強がるが、見た感じではほぼ満身創痍。僕が此処でリタイアさせてあげても良いが、それすらも面倒くさく感じる。

「…、君に言われる筋合いはないんだけどねえ。それに、僕は君みたいな親の七光君が生き残つてゐるのが不思議で不思議で」

とりあえず嫌味を返しておく。するとギルフォードは怒りに顔をゆがませる。

「クッ、お前は本当に僕を怒らせるのが好きなようだね！」

そう言つてギルフォードは自分の武器を呼び出す。

「斬王・紙！」

僕は自分の武器を取り出す。そして、ギルフォードが攻撃を開始しようとした瞬間に

「八華彼岸・曼珠沙華！」

障壁を八方向へ展開し、その中心を斬り裂く。そして最後に八つの障壁で叩き潰す。これがこの技の極意。ギルフォードはまともにこの技を受け、その後にペンダントが砕けた。

「フム、弱過ぎるね」

僕はそう言い武器を納めようとする。しかしその直後、硝子が割れる音が響く。

障壁が砕かれた！

僕はそう思い、後ろを向く。するとそこには

「歎…お前か」

狂咲歎の姿が有った。

「あれれ？ ボクはあの七光を追つてきたはずだけど、だけど、だつたけど……何故に何故、何でかな？ カオルが居るのは…」

血まみれの姿で、手には一つの鎧。恐らく、人を殴った後なのだろ。鎧も血まみれだ。

「歎い～！ 待つてよ～！」

僕が歎と会話をしていると、後ろから歎のメンバーと思われる五

人が姿を現す。その中にはリリナの姿もあった。

「あれ〜、カオルじゃない。何で此処に？」

「…………それはこっちのセリフで良いかい？」

僕は傍から見れば異様ともとれる血まみれの歎、リリナ、そして他のFクラスメンバーを見てそう言つた。全員が血まみれなのだ。

「こいつだれネ？ 一人の知り合い力？」

一人の黒衣の男と思われる奴が僕に着いて聞いて来る。

「ええ、力オルは私達の幼なじみよ。ちなみにS P E C I A Lね」

リリナがそう言つと、歎とリリナ以外の全員が身構えた。

「…………僕と戦うのかい？」

「う〜ん、現状を見ればそうだね、そうだよ、そうだとも。けれど、ボク達が知っているのに、君には何の情報もないってのは些かボクの美德に反するからね。ボクら以外の紹介を軽くするよ」

そう言つて歎は四人の横に立つ。

「右から王 わん 黒竜 へんろん。武術の使い手。次にエミリー・ウイップル。槍の使い手。次にサー・シャ・プロティート。弓の使い手。最後に獄神焰。銃の使い手さ」

全員の紹介が終わり、歎が此方を向く。そして敵意を向けて来た。

「カオルとは戦いたくないけど……これも訓練だから……行くよ、
行こうか、行きますよー。」

歎の声と共に、動き出すFクラス。最初に歎の攻撃。結果を先に出し、原因を後で行うチートだ。

「ボク達Fクラスだって魔武器は召喚出来たんだよ。ほら、この通り！」

そう言つて歎は持つている鎧で僕の頭を叩いたと言つ結果を出す。しかし、僕の障壁がそれを許さない。

「カオルの魔法は絶対拒絶型！でも、数で押せばどうしたことないの！」

リリナが人形遣いの能力の応用で、鋼糸を使う。僕はそれを障壁で防ぐも、辺りの木に絡まって行き、間接的に僕を拘束した。

「しまった！？」

僕がそう言つた瞬間、展開している障壁の一部を破壊される。

「残念だたネ。オレの能力、魔穿鉄拳ませんてつけんは魔法を破壊する能力だヨ」

そう言われた直後、僕の障壁は全て砕け散つた。すると鋼糸で完全に拘束され、四肢を撃ち抜かれる撃ち抜かれる。

「へへッ！？」

「俺様の能力は見敵必殺（サーチ＆テストロイ）。狙つたら最後、確実に当たる弾を撃つ事が出来る」

倒れそうになるのを、拘束が許さない。そして次に、腹部を槍が貫通する。四肢に銀色の巨大な針が刺さる。

「串刺好。くしゅきこじい 相手を串刺しにする妾の能力。いかがです？」

激痛の余り、声を出す事が出来ない。そして最後に、両肩に矢が刺さる。そして、体内に激痛が走る。

「ガ…ア…」

「『I』めんなさい！ でもこれが私の能力、ぼういんぱうじょく 亡飲亡喰なんです！」

そう言ひ頭を下げる敵。そして最後に歎が近付いて来る。

「う～ん、ここまでやると見ていられない位無残だね～。でも、君の不死性は異常とも呼べる、呼べるし、呼べるから…徹底的に殺させてもらひついで、もうひとつ、もうこります」

そう言ひて頭を鎧で殴つてくる歎。しかし、感覚がマヒしてきたのか、痛みをそこまで感じない。何度も、何度も殴られるが、痛みを感じる事がない。

「嘘でしょ……、あれだけ頭を殴られてるのに…まだペンドントが割れないだなんて…」

一人が驚きの声を漏らす。

「それが、力オルの怖い所。どんなにボロボロになつても立ち上がるあの不死身の肉体。アタシ達が恐れている力オルの一面なの」

リリナがそう言つ。歎は僕を殴り続ける。

「クッ、まだペンドントが割れないなんて……ヤツパリカオルは凄い、凄いな、凄過ぎる」

そう言いながらも殴り続ける歎。

「…………リリナ、拘束を解いて」

歎がそう言つ。

「え、良いの？」

「うん、構わないよ。力オルには……本氣で死んでもらひつか！」

歎の雰囲気が変わる。

「さてと…………歎、君の負けだ」

リリナの拘束が解かれた瞬間、力オルは空中高く投げ飛ばされる。そして、落ちてくるであろう場所に、歎は短剣を向けた。

しかし僕は空中で耐性を整え、障壁を開く。そして歎の短剣を碎き、攻撃を開始する。

「言つておくけど、僕がこの絶対拒絶型の魔法使いだつて分かつたのは最近だ……僕はそれまで魔力が多いけど魔法が使えないと言う事で、蔑まれ、虐められ、何度も暴力を受けて来た。そのせいか、

多少性格が歪んでいるんだよね…」

そう言いながら、歎の膀胱が有るであろう部分を本気で蹴り飛ばす。

「！？！？ ウウ……アア……！」

膀胱は神経の束が存在する。そのため、人体の急所としても有名だ。少し刺されただけでも激痛で動けなくなる程。蹴りとは言え本気で遣つたため、痛いだろう。

「歎！？ ヤツパリ昔から不死身なのね、カオルは！」

リリナがそう言い、もう一度拘束をしようとするが、同じ手は一度喰らわない。

僕はそう思い、リリナに近づきこめかみを軽く殴る。その瞬間に、リリナは意識を失いその場に倒れた。

「さあ、次だ。僕は自分で体験している分、人体の急所には詳しいと自負しているんだ。さあ次は誰かな？」

激痛でのたうつ歎、意識を失い倒れているリリナ。しかもそれが、瀕死の重傷を負っている人間にやられたのだから、異常ともいえる。そのせいでFクラスのメンバーは迂闊に動けない。

「来ないのか？ なら、僕が行く事にしよう」

一人は喉、一人は鳩尾、一人は顎、一人は肺と、急所を確実に攻撃していく。どんなに鍛えていたとしても、所詮は学生レベル。急所を攻撃されればひとたまりもない。

「…クツ」

「」のまま止めを刺したいが、身体が悲鳴を上げている。この場にいる全員に止めを刺すことは可能だろうが、刺し終えると同時に、僕自身が倒れるなんてのは嫌だ。だから僕はいつたんこの場から離れ拠点に戻る事にした。

その後拠点に戻った僕は、ミリアに治療を受けた。そして何故か平然としているシンに対し、怒りを覚え一発殴った事を伝えておこう。

サバイバル～四日目・五日目～（前書き）

元々ない文才が、更に酷く…。

サバイバル～四日目・五日目～

1

Fクラスのメンバーとの戦いから一日。ミリアの治癒魔法により、傷も体力も完全に回復した。そして、Fクラスの情報も得た。

「ふむ、食料には些か問題はないみたいだね。残りは此処に籠つていれば、負けることはないけど」

ポイントも今のところ一位。このまま此処に隠れておけば、サバイバルが終わるまではやり過ごす事が出来る。しかし、ポイントがこのまま下がらないとも限らない。更に言えば、Fクラスの動きも気になる。

「で、どうする皆？討つて出るか籠城か？」

ボクは全員に尋ねる。

「俺は討つて出たいな。カオルが昨日あんなにボロボロになつていただ。そんな強い奴と戦いたい」

シンはFクラスと戦いを所望する。

確かに人數的な問題はこれで解決できるが……如何せん、Fクラスの持つ特殊能力が厄介すぎる。僕の魔法障壁なんて通用しないしちゃう。

「でも……カオルが……ボロボロになつてた。……勝てる?」

レナがそう言つ。すると全員が黙る。確かに六対一だつたが、前に五対一で僕に敗退している皆は、力の差があると言う事が分かっている。

しかし、僕が戦つたため敵の情報は少なからず持つている。

「とりあえず、今回得た情報を伝えておく。

まずはリーダーと見られる歎。能力名は出オチ。因果と結果を逆転させる能力。対処法は動き回つておく事。例え結果を先に出させても、その結果が避けると言う結果ならば問題ない。

次にリリナ。能力名は人形遣い。対象の人物を拘束、もしくは操る事が出来る。対処法は糸の切除、もしくは障壁で糸を近付けない事。どんなに操る事ができたとしても、糸が当たらなければ意味がない。

次に王黒竜と言つやつ。能力名は魔穿鉄拳。魔法を破壊する事が出来る。更に武術の使い手。対処法は魔法が破壊されると同時に、物理攻撃を仕掛ける事。だから攻撃で圧倒するしかない。

次に獄神焰と言つやつ。能力名は見敵必殺。遠距離系統の武器を確実に当てる事が出来る。対処法は障壁による防御、もしくは相手の攻撃を弾く事。絶対に当たると分かっているので、対処は出来ない事もない。

次にエミリー・ウイップルと言つやつ。能力名は串刺好。攻撃に当たつた対象を串刺しにする事が出来る。対処法は攻撃に当たらな

い事。使い武器が槍なので、中距離からの攻撃にも気をつけなければならない。

最後にサーチャ・プロティート。能力名は亡飲亡喰。攻撃した者を中から破壊する事が出来る。対処法は攻撃に当たらない事。弓矢が武器なので、遠距離からの攻撃に気をつけなければならぬ。

まあ、こんなところかな？ で、感想はある？

僕はそう言い、皆の方を見る。

「うーん、何と言つか、厄介な奴らばかりだな。でも、俺はその王黒竜とか言つやつと戦つてみたいな」

「つむはリリナがええな。拘束する暇もなく魔法で圧倒するで！」

「レナは……獄神焰が……いい。……銃なら……負けない」

「私はH//C-one・ウィップルつてやつが良いわね。槍なら負けないわ」

「必然的に私はサーチャ・プロティートさんですか。でも、弓の腕なら私だつて負けまないです！」

何故かやる気になつてゐる。いや、まあ別に良いんだけど。

「この状況だと、僕は必然的に歎とか。まあ、頭をさんざん殴つてくれたから、お返しするか」

皆に流され戦う事を決める僕。籠城作戦と言つ事で、此処に籠り

つぱなこといつのまばたきに嫌だしね。

「じゃあ討つて出るといつの事で良いく?」

僕の言葉に全員が頷いた。ならばそれなりに準備をしなければならないな。

「…………さて、今日、明日は此処にこよひ。僕は少し用意をしなければならぬからね」

僕はそつと皆が了解してくれるのを見て、洞窟の奥へと行こうとする。

「どう行くんだや?」

「ああ、ちょっと集中したいから洞窟の奥の方にね。今日、明日で習得したい者があるんだ」

僕はそつ言い、洞窟の奥へと足を運んだ。

第一の魔王刀を解放しなければ…。やり方は分からぬけど。

「さて、どうしたモノか」

十一魔王刀（懷中時計状態）を見ながら考える。

第一の魔王…。恐らくはかなりの力になつてくれるだろひ。しかし、解放しなければ意味がない。

僕はその日一日、懷中時計と睨めつこの状態で過ごした。

サバイバル五日目。僕は依然第一の魔王を解放できていない。
どうするか。考えることは全てやつたし…。

「…………う～む…」

考え続ける。

！ そう言えば、ここを召喚する時に別の空間に転移したよな
？ もう一度あの空間に行けば何かヒントが…。

僕はそう思い、召喚する時的方法を試してみる。指を斬り、懐中時計に一滴血を垂らす。すると案の定、一面真っ黒な空間まで飛ばされた。

「何かヒントが有るはずだ」

僕はそう思い辺りを散策する。すると、寅の字が中に浮かんでいるのを見つけた。

「……汝、力を持つ者か？」

寅の字から声が響く。その声に僕は頷く。

「ほう、汝は力を持つ者か。それは面白い。誠に面白い」

寅の字から楽しそうな声が響く。

何だこれは？ もしかして認めてくれているのか？
僕の中でそんな疑問が浮かんでくる。

「我は第一の魔王。 “絶王・鍊”。 全てを絶ち斬る魔王なり

寅の字はそう言つと、巨大な剣の形に変わる。するとその瞬間、絶王・鋏は斬りかかってきた！

僕は辛うじて斬王・紙を召喚し、攻撃を防ぐ。しかし

「なー？」

反対側の刃が回転して、鋏の形になり逆側からの攻撃が来る。

「私は絶王・鋏。全てを絶つ！ 首、胴体、足、命、そのどれをも絶ち殺す！」

また辛うじて頭を下げ、攻撃を避ける。

「クツ、これが第二の魔王の力か！」

鋏を合わせる時の独特な音が辺りに響く。

「力が有るものだと？ 汝がか？ 笑わせるなー！」

その瞬間に、左腕が絶たれる。

「！？ グ…ガア…！？」

痛みで筋肉が硬直し、叫ぶことすらできない。

「次は足だ！」

すると右足が絶たれる。

「さあ、地面に這いつぶらり、首を我に出せー。その首を絶ち斬つてやるー。」

その言葉を聞き、僕は手に持つ紙で、支えを作った。絶対にこいつには這いつぶらなこと言つ意志をこめて。

「ほう。しかしその状態では、攻撃など出来まー」

そう言い鋭独特的の音を響かせながら、近づいて来る絶王。もう少し、もう少しで僕の首に刃が掛けられる。

「では、死ぬが良い」

そう言い絶王が僕の首に刃をかけた。しかし、その瞬間を僕は待っていた！

「勝つのは僕だ！」

僕は支えにしていた紙を引きぬき、倒れる体で絶王に斬りかかつた。

「貴様では我を斬れん！」

絶王がそう言い、僕の首を絶とつとする。しかし

「フツ、何が斬れないだ…」「何ー？」

見事に真つ一つになった絶王。

「斬王・紙。斬る王と書いて斬王。その能力を忘れたわけじゃないだろ？」

そう尋ねるも、絶王は口を開かない。否、開けない。何故なら斬られてしまったから。

斬王・紙の能力。一定量の魔力を込めると、込めた後一度だけ絶対切断の能力を得る。斬王・紙の唯一絶対的な能力。完全なる一撃必殺。それがこの、斬王・紙の力。

「魔王か……絶王か……知らないが……僕を、過小評価しそぎだ。……力なき魔王が！」

僕はそう言つと共に、意識を失つた。

僕の手にある懐中時計の寅の部分は白色になつていた。

サバイバル ～六日目～

1

サバイバルが始まって六日目。僕達はついに動き出した。獄神焰ではないが、見敵必殺（サーチ＆デストロイ）と言う感じで、出会ったチームを倒しては進み、倒しては進みを繰り返す。

「み、皆。そんなに飛ばして大丈夫なのかい？ 特にレナ、アリア、ミリア」

僕がそう問うと、三人は元気良く頷く。

「カオル……傷つけた。……生きて……返さない……」

ファートウムを舐めながらレナは艶美に笑う。

「ま、まあ、私はじつとしているのが翔に合わないって言つか……とにかく、カオルを傷つけた奴を限界まで甚振つて惨殺したいなんて考えてないんだから！」

顔を真っ赤にして言つた言葉がそれ。

「カオル君を傷つけたんだよ？ そんな奴ら眠させて、頭を割つて、直接頭の中を搔き回してあげないといけないです。大丈夫、カオル君は見てているだけで良いですから」

目が笑っていない…。そして言っている発言が危なすぎる…。

「まあ、穩便に」

「馬鹿は喋るな!」「シンは黙つて!」「シン君も搔き回しますよ?」

「ヒイー?」

シンが脅える。それもその筈、三人ともシンに武器を突きつけているからだ。しかも、目が逝つてゐる。

「今のはシンがあかん。でも、レナもアリアもミリアもほどほどにしーや。一応カオルのつれやから。シンもそこで脅えてんといてシヤキッとい。これが終わつたら…」

カナがそう言いシンに喝を入れる。そしてシンの耳元で何かを呴いた。その瞬間、シンのやる気が一気に上がる。

「いよっしゃああああああ!!!! サバイバル訓練なんて、今日で終わらせてやるわおおおー!! 田標は今日中に他のチームを全滅させる事!!」

そんな事を言いながら走り出すシン。

いや、確かにサバイバル訓練は残り一チームになつたら、その時点で終わりだけど…。そんな都合の良いようにはないだらう。

ちなみに、今のランキングは一位Sクラス（百四十ポイント）、二位Fクラス第一チーム（九十ポイント）、三位Aクラス第四チーム（六〇ポイント）。そして、現在残っているチーム数は上記の三チームプラスの四チーム。最初、四十五チーム。それが今では七チームまで激減した。

「まああんなシンは無視して……恐らく歎の性格上、今日は現れないと思つんだ」

「何で？」

「歎は劇場型犯罪者とでも言つのかな？ 事をしでかす時はあたかも劇の一部の如く披露するんだ。そして歎が一番好きな場面は終了直前。つまり、最終日に大きく討つて出ようと言う訳さ。勿論、僕達を倒したら勝てるポイントを維持しながら」

僕が此処まで言つと放送が流れれる。

『～Bクラス、第三チーム全滅。Fクラス第一チームの合計ポイントが百となります～』

やはりね。だから僕達も

「負けていられないだろ？」

八華百合・鬼！』

紙を取り出し、一つの太い木を日掛けて技を放つ。木は見事に斬られ、四人の男女が落ちてくる。一人は木の枝と一緒にペンダントが砕けてリタイアしたようだ。

「高度な透過魔法だね。初めてみたよ。でも、気配を消さなければ意味がない。気配を薄めるんじゃなくて、消さなきゃね。

八華百合・鉄砲！』

無数の斬撃が四人を襲う。四人はあつと言つ間にペンダントが砕

かれ、リタイアとなる。

『Sクラス、第五チーム全滅。Sクラスの合計ポイントが百五十となります。ここで、Sクラス全チームの全滅が確定しました』

放送が流れ、残り五チームとな

『Bクラス、第一チーム全滅。Aクラス第四チームの合計ポイントが七十となります。ここで、Bクラス全チームの全滅が確定しました』

訂正しよう。残りは四チームとなつた。残りは僕達Sクラス、そして歎達のFクラス第一チーム、Aクラスの第四チーム。後全滅していなイクラスは……、おお、意外や意外Eクラスの第六チームだ。しかしEクラス第六チームのポイントは〇。優勝するには他のチームが引き分けで全員リタイアとならなければならぬので不可能。恐らくサバイバルを最後まで行き残るうと隠れているのだろう。それはとてもいい判断だ。

「でも、それでは逃げ場がない」

「ん？ こきなりどうした？」

「え、ああいや。Eクラスも恐らくリタイアになるだろ」と思つてね

「何でそんな事がわかるんですか？」

ミリアが訪ねてくる。

首を傾げている動作はとてもかわいらしいな……、じゃなくて。

「どんなに頑張っても、サバイバルの知識が初心者並みの一般生徒

だ。恐らく食糧にも限界がすぐに来るだろう。僕の場合は取つてき
た食料を保存のきくように調理したりしたから問題ないけど。でも
そんな知識は経験者か、よっぽどのマニアか、事前に途轍もない勉
強をした奴位だ。その証拠に毒キノコや毒魚等を食べてリタイアに
なった哀れな連中もいるだろ?」

そのせいで、サバイバル初日で消えた班もある。そつそつ班だけ
で恐らく五班は減つているだろう。

「だから、今日は敵に会つ事がないと思つ…………」じめん、訂正す
る。この戦いが終わつたらかな?

八華百合・鉄砲!」

僕は何もないはずの場所目掛けて、技を放つ。

「完全透過魔法。さつき見た魔法の、更に高度なものだね。流石は
Aクラス」

僕がそう言い紙を構える。其処には、六人の男女が立っていた。

2

「良く分かつたな……」

リーダーと思われる男が口を開く。僕を含め、全員が武器を構え
戦闘態勢を取る。

「姿は隠せて、気配が回りと同化していない。それなら簡単に居

場所が分かる。気配を同化すると云ひのまゝ、口ひやるのぞ。

フツと僕は肩の力を抜き、気配を回つと同化させる。

「！？ 消え 」

「残念。君が見えていないだけさ」

ドツと囁つ音と共に、リーダーらしい男の右胸から突き出る、銀色の刃。

「ガア…」

男が痛みに呻く。

「なつ！？ 卑怯だぞ貴様！」

一人の女性が戟を構えて、そう怒鳴る。

「卑怯？ 何を言つているんだい？ もう戦いは始まつている。僕は情けをかけて、わざと左じゃなくて右に刺したのさ。気配の同化のしかたを教えた授業料としてね」

僕の言葉で顔をゆがめる女性。

「せやな。今のは力オルじやのつて、あんた等が悪い。戦いで氣い抜いたあんた等が。せやろ、ヒマ」

「カナ！ オ前には騎士としての誇りはないのか！」

「無いな。うち等、一撃必殺はあんた等、正騎士とはひやうねん。
ナイトオブマジシャン ナイトオブナイト

誇りじゃなく結果や。あんた等みたいな騎士の誇りつひゅうもんは持ち合わせてへんねん！」

正論だな。誇りが有るからといって結果が残る訳じゃない。最優先事項は結果を残す事。誇りなんて物で結果を出せないだなんて、言い訳にもならない。

「さて、始めようか。御託はいらない。生きるか死ぬか。その二つだ。武器を取った時点で、それは決められるのさ。卑怯もクソも関係ないね」

少し気取り過ぎただろ？ まあそれは良いだろ。

「え、貴様」

「止めるエマ！ その男が正論だ。武器を取った時点で、死ぬ覚悟がなければならない。それが、騎士と言つものだ！」

僕に胸を貫かれた男が立ちあがり、女性の言葉を遮り、そう一言。

「はあ……、エマだけやのつて、あんた等全員十一騎士団所属かいな

…

全員の顔を見まわしたカナが、溜め息をつきながらうつ一言叫つ。

「しかも“歩く槍騎兵”が居るし」

「歩く槍騎兵？ 何よそれ？」

シンの眩きに、アリアが反応する。それもその筈。槍騎兵とは馬に乗り、ランスを装備した兵の事を言つ。歩く槍騎兵とは矛盾して

いるのだ。歩く兵は歩兵、しかしそれでは馬に乗つていない。逆に馬に乗つていたら騎兵、しかしそれでは歩いていない。

「良い感じに混乱しているようだな。まあ、その真意を見せてやる！」

闇天驅けるは死の黒馬

黒き身体は命を飲み込み、その足は全てを碎くだろう！

闇属性最上級魔法「闇夜の影馬」

男の魔法が発動し、影から黒い馬が現れる。男はそれに跨ると、ランスを向けて突撃してきた。

「！？ そう言ひ事か！」

僕は急いで回避し、皆の方を見る。敵は皆に一人ずつ付いているようだ。一対一がご所望のようだな。

「初見で完全回避されたのは、久しぶりだぞ！」

男はランスを向け、楽しそうに笑う。

「そりゃかい？ 今のは遅すぎると思ひけど」

「ククツ、面白いなお前。まあ、お前達も運がないな。いくらSクラスとはいえ、一対一だとキツイだろ？ カナやシンは騎士団所属だが、他は能力が高いだけの素人。一対一になつた時点で、勝ち目はないよ」

男が笑いながらそう言ひ。その時、僕にはハツキリと、何かが切れる音が聞こえていた。ゆっくりと後ろを向いていると、尋常じゃない位どす黒いオーラを出している三人が居る。特に、レナはあり

得ない位怖い。

「レナが……勝てない……。（ニヤリ）」

レナは手に持つファートウムをガトリング砲に形を変える。そうとうイラついたのだろうか、相手が構える前から引き金を引いたようだ。

「アハ……アハハ……誰が勝てないって！？」

……最近思うのだが、レナのキャラが壊れて来たような気がするのは僕だけですか？ 余りにも容赦のない攻撃に、相手さん涙目になってるし……。僕と対峙する男も、レナの攻撃に動きを止め、冷や汗を搔いてるし。

「……すまない、前言撤回しよう。君達は異常だ……」

男はそつ言うと、再び魔法を発動する。

「しかし、勝つのは我々だ！ ハッ！」

そう言い突撃を開始する男。しかし、初見でなければどう来るかが分かるので、的確に対処は出来る。

僕は男の突撃をかわし、そのまま反撃に移る。

「八華百合・鉄砲！」

しかし相手も慣れているせいか、僕の技を簡単にかわす。

「流石、Sクラスと言つたところだな！ やはり能力はずば抜けて

いる。しかし、経験が足りない！

闇天駆けるは死の天馬！

黒き翼は日の光を奪い、その足は命を碎くだらう！

闇属性大魔法＜地獄の天馬＞」

大魔法だと！？ しかも一人で大魔法を使うなんて……規格外はお前も同じじやないか！

男の魔法が発動すると同時に、黒い身体に黒い翼を持つた馬が現れる。大魔法は本来、三人以上の人間が、互いの魔力を供給しあい使う魔法である。一人で行う事が出来ないと言つ訳ではないが、多量の魔力と気力を発動時に奪われる所以、基本的に一人で使う事がない。しかし、十二騎士団のカナの所属する部隊は例外である。

「さあ、さつきのは『モンストレーション』だ。此処からが本番と言うものだ」

その瞬間、先程とは比べ物にならない位の速度で、攻撃をする男。回避できない事はないが、かなりギリギリになってしまった。僕は咄嗟に、障壁を十枚展開し、防御に入る。

硝子の割れる音が響くが、僕まで攻撃が届かず、男は一端距離を取る。

「ふむ、それが噂の絶対防護と言つ物か」

「……ええ。生憎、僕にはこれしか取り柄がなくてね」

割られた分を元に戻し、更に五枚障壁を追加展開する。一回の攻撃に付き、一、二枚のペースで割られていく。確かに、割られた瞬間に障壁を開け直せばいいのだが、それではジリ貧だ。距離を取り、構えを治す男。

「さて、こいつは防げるかな？ 絶対防御よ」

そう言い、槍を構える男。雰囲気が変わった。
何か嫌な予感がする。何をする気なんだこの男は…。

「いくぞ、絶対防御！

天馬翔英雄！！！」

「……ツ！？！？」

肩からぐる激しい痛みが全身を駆け巡る。遅れて聞こえてくる、割れたガラスの音。まるで因果と結果を逆転させ攻撃をしたかと思わせるほどの速度。一瞬にして割られた十五枚の障壁。

クッ、絶対防御が聞いてあきれin！ だが、タダでは終わらないぞ！

僕は男の上に、強化した障壁を展開し

「潰……れる……！」

男目掛けて落とした。

絶対拒絶型の持つ、拒絶属性。その属性が、攻撃に特化していると書かれている部分は此処にある。対物理障壁を使い、相手を叩き潰す事が出来る。対魔法障壁を使い、身体強化魔法等を無効化する事が出来る。自らの武器に障壁を纏わせ、相手に攻撃した瞬間、その障壁を完全展開する事で、相手を吹き飛ばす事が出来る。それこそが、絶対拒絶型の神髄とも言える攻撃。

相手との距離に関係なく、自由自在に障壁を展開させ、自由自在にその障壁を操る事が出来るのが、絶対拒絶型。

痛みは激しいが、立てない程でもない。僕は立つて男の方を見る。

「ク……アア……。い、今のは効いたぞ……」

左腕が潰れている男。直撃は免れたらしい。

「まだ、終わらないぞー。」

男の周りに障壁を展開し、押し潰す。しかし、男はそれをギリギリで回避し、攻撃をする。

「天馬翔英雄！」

障壁を二十枚展開し、回避をする。二十枚展開した内の十七枚を破壊される。

「これほどの障壁をノータイムで二十枚展開とは、流石だな」

「良く言つよ。それを紙の様に貫いて来るくせ」

「フツ、やはり面白」……戦いは……」

男はそつとフランスを構える。

「でも、これで終わりにしよう」

「そう言つて、男は再びあの技を放つ。

「天馬翔英雄！」

高速で、そして障壁を物ともせず貫いて来る攻撃。しかし、何度も同じ攻撃に屈する僕では無い。

そう思い、とある障壁を展開する。

「ツー？ 何だとー？」

鐘を撞いたような鈍い音が、辺りに響く。

超密度多重障壁。その名の通り、かなり密度の高い障壁を、一枚の障壁の様に扱う魔法。

「残念だつたね。君の力は、僕に届かなかつたみたいだ！」

そう言い、僕は男目掛け紙を振るつた。その瞬間、男のペンドントが砕け、強制転移が発動した。

「クツ……予想以上に消耗したな……」

その場に片膝をつき、肩を押さえる。肩からは血が流れ出しており、今も徐々に身体から出でている。流石に、此処まで来て出血多量なんて洒落にならない。

「皆は……」

そう思い切りを見まわす。其処には、一方的に相手をリンチしているレナ。圧倒的な力で敵をねじ伏せている力ナ。互角に戦つているシン。若干おされぎみのアリア。相手と一定の距離を保ちながら善戦しているミリア。

あ、レナの相手のペンドントが砕けた。しかし、レナは止まらない。

「ファートウム……荷電粒子砲……準備」

ファートウムの形が変わり、双銃が一挺の巨大なライフルに変わる。

「皆……死ね……」

凄まじい位の光と爆音が辺りを包み込む。そして、その場にいた全員が、動きを止め冷や汗をかく。

「……クスツ」

怖い…。絶対にレナを怒らせとはいいけない。特に、勝てないと、弱いは禁句みたいだ。

「とりあえず……もひ…一回……最大出力で……撃つ…」

再び激しい光が銃口から放たれ、凄まじい爆音が辺りを包んだ。最大出力と言つていただけはあり、辺りは衝撃波で砂煙が立ち上り、周りを確認できない状況になつていた。

何とか、レナが攻撃をする前に、全員を回収し超密度多重障壁を五枚展開したのだが、その内の三枚を持つていかれている。砂煙が晴れる。当然敵は全員強制転移された様だ。それより問題なのが、レナが立つている場所から約三百メートル先まで、地面が抉れて、存在していた木等が全て消え去つていると言う事だ。

この時、僕は、イヤ僕達は誓つた。レナを絶対に怒らせないと言う事を。

「うん……スツキリ………した」

物凄い良い笑顔で、レナはそう呴いていたのを、僕達は苦笑しながら聞いていた。

サバイバル～六日目～（後書き）

この更新後、申し訳御座いませんが、暫く更新する事ができません。理由としましては、自分の通っている学校のテスト期間に入りましたからです。

こんな駄文でも、読んでいただいている皆様には申し訳ありませんが、このテストでヘマすると、就職や進学にも関わってきますので、ご了承いただけたら幸いです。

サバイバル～最終日～（前書き）

夏休みに入つても毎日学校で、久々の休日に久々の投稿。クオリティは今まで一番低い様な気が……。本当に申し訳御座いません。

サバイバル～最終日～

1

今日でサバイバルが終わる。やつとだ。長かったこの一週間。しかし、この日に、この日にある事件が起きた。

それが、近くの魔族研究所から、魔族が逃げ出したと言う事件だ。逃げ出した魔族はキマイラ。魔族内での討伐ランクは低いモノの、学生で相手に出来るような優しい化物じゃない。

「と言う訳で、サバイバルは中止だ」

「……今さら?」

「ああ、今さら」

久しぶりに出てきたシンヤがそう言った。

僕はFクラスと決着を付けたかったのだが。

「ちなみに、第一位から第三位までクラインド杯に出られるから、決着を付けたいと考えているなら、クラインド杯でやつてくれよ」

そう、シンヤが言った。周りには僕とシンヤ以外誰もいない。僕以外は全員転移して学園に送られたのだ。さて、ならばなぜ僕が此処に残っているのか。それはいたって簡単。

「こんなふうに話していくも良いんだけど、一回の攻撃で一～一枚の障壁を破壊されていいてるんだよ」

「ああ、みたいだな」

そう、周りには僕たち以外に生徒はいない。しかし、僕が張つた
障壁の外には、巨大な魔族、キマイラがいるのだ。

「アヒ、エ、ウカルカ?」

「いや、教師である君が決めるべきだろ?」

「そ、うなんだけど……。ぶつちやけ面倒だし」

教師の言葉かそれが。生徒が一人残つてゐるんだぞ？　いや別に、
キマイラの攻撃が防げないわけではないのだが……。
まあ良い。とりあえず、面倒になつてきたから、潰すか。

「あいつは殺しても良いのかな？」

「ん?
ああ構わないぞ」

シンヤがそつと口へ的同时に、僕は手を振り下ろして、キマイラの足を潰した。

甲高い叫び声を上げるキマイラ。

「全く、五月蠅いよ。化物の分際で」

「うう言つと僕は全ての足を潰し、動きを止める。

「ウワア、お前容赦ないな」

「ん？ そうかな？」

「いや、まがいなりにも人の顔が浮き出ていた部分を躊躇なく潰すなんて」

キマイラは一種の幻覚作用を起こす臭いを発しているらしい。その臭いを嗅いだものには、キマイラが同族の生物に見えたり、また一部が同族の生物に見えて、殺し辛いそつだ。しかし幻覚と分かっているので、別に躊躇する事では無い。

「別に良いんじゃないか？ それにこのまま動かれて、本当に人間を取り込まれた方がやり辛い」

キマイラの能力の一つに、喰収と言つ物がある。これは、食った物を自らの体の一部に取り込み、殺さずに生かしておくと言うものだ。これはかなり気持ちが悪く、また同族が取り込まれていると、本当に躊躇してしまう。その躊躇した瞬間に、喰い取り込まれると言つ訳だ。

「さてと……サバイバルを中心にしてくれた恨み、晴らさせてもううとしよう！」

僕はそう言い、総攻撃を開始した。

「ギギギギギギ……」

見るも無残な位に潰れたキマイラ。正直気持ちが悪い。キマイラの幻覚作用で、潰れているのが人間の様に見えるのだ。

「ウフ……、もうこいつ加減に殺して良いんじゃないか?」

「…………だね。これ以上は気持ちが悪くて見ててられないからね

僕はそう言ひキマイラの顔めがけ、紙を振り下ろした。

「…………最後の最後まで気持ち悪い奴だね。切り落とした部分が、人の頭に見えるよ」

「ああ…………確かに。でも、暫くしたら消えるだろ?」

シンヤは顔が真つ青になつてゐる。恐らく僕も同じなのだろ。幻覚と言えども、人間の形をした物を殺したのだから。

ああ、暫くお肉は食べなそうだな。最悪だよ。こないだ商店街の福引で、三等の国産最高級牛肉を手に入れたのに。まあ腐らないよう魔法保存してあるんだけど。

「じゃあ帰るぞ。キマイラはまつといで良いやつだ

「やつ。なじよひじくへじ

さつとひといシンヤは、僕の肩に手を当てて転移を発動した。

転移で僕は学校に帰ってきた。サバイバルの閉会式は始まつており、順位が発表されていた。

「え～まず三位はAクラスの第四チームです！」

パチパチパチと拍手が送られ、リーダーに賞状と盾（小）が贈られる。

「第三位のAクラス第四チームには、学食一年間無料券が与えられます！」

すると横から出てきた教師から封筒を渡される。そして壇上から降りて行き、壇上の前にある表彰台に上がった。

「続いて一位は……何とFクラスの第一チームです！」

その言葉に会場がどよめく。歎はそんな中、笑顔で壇上に上がっていく。そして同じように賞状と盾（大）が贈られる。

「第一位のFクラス第一チームには、学食四年間無料券が与えられます！」

第三位と第一位の差。これ考えた奴は誰だよ。差が激し過ぎるだろ。

「では、第一位の発表です！」

その放送の瞬間、会場にいた殆どの人が、どうせSクラスだろ的な事を言っていた。確かにそうだから仕方がないのだが。

「一位はSクラスです！　おめでとうございます！」

あれ、壇上には誰が上がるんだ？　あ、シンが行った。シンは賞状とトロフィーを受け取った。

「第一位のSクラスには、学園内全お食事処三年間無料券が与えられます！」

だから考えた奴は誰だよ！　学食と学園内全お食事処の無料券つて！　いくらなんでもやり過ぎだろ！　しかもシンが居るんだぞ！　泣くよ、絶対に食べに行つたお店の店主が泣くよ…

「ちなみに、学食や全お食事処には前もつて五千万リートを支払つておりますのでご安心ください」

「どうからそんな金が！？　学食も含めたら数が五十は超えるよ…？」

？

「お金は学園長が自腹で払つてくれたのでご安心を」

学園長凄い！　どんな大金持ちだよおい！　ん？　学園長なんか泣いてない？

「うう……儂の一等だつたリベルビック宝くじが……儂の五十億リートが」

「ただけキャリーオーバーしてんんだよ！　あ、そつとばりべルビックって言えば一等が七億リートだったな。いや、それでもキャリーオーバーし過ぎだろ。

「（）愁傷様、学園長」

「お前なに言つてんだ？」

隣にいたシンヤがそう言つたので、僕は学園長の方を指差した。学園長を見たシンヤは、僕と同じ事を察したようで、手を合わせて「愁傷様」と言つていた。

「良いもん良いもん！　二億リート残ったもん！　あでも、家のローンで殆ど消えて、実質残るのは三千万リートじゃん。あ、そう言えばこないだ妻が新車買つてたな。はあ…、考えれば考える程、減つていくなあ…」

「…」
ドンドンマイとしか言えないですね。いや、そのお蔭で僕達は無料券を貰えるんだけど。

「では、今回のサバイバルはこれにて終了です！　明日から三日間の休日で、疲れを十分に取つてくださいね！」

そう言い壇上から降りて行く教師。そして一斉に動き出す生徒達。恐らく寮に帰るのだらう。

「お～い！　カオル～！」

「ん？　ああシンか。どうしたんだい？」

「いや、どうしたんだ言つて……。ほりこれ、優勝賞品の食券」

そう言つてシンは一枚のカードを投げる。

へえ、これがねえ。僕はカードを見た後、生徒手帳に挟みこんだ。

「で、他に何か用は？ 僕は帰つて寝たいんだけど」

「なに言つてんだ！ 今から食券を使って打ち上げに決まつてんだ
るこのボケガアアアアアー！ー！」

「五月蠅いよ！ 拳のおまけも付けてやるよー！」

僕はそう言つてシンを殴りつけた。

「……………痛い。まあいいや！ とりあえず、お前も付いて来いこの
野郎！」

僕はシンに手を引つ張られ、焼肉屋に連れて行かれた。
さつき肉を暫く食べれなくなるような体験をした僕に、喧嘩を売
つているのかと思ったが、皆と笑いながら食事をしたため、楽しむ
事ができた。

「で、何でお前は肉食わないんだ？」

「…………」

僕はトウモロコシやキャベツ等の野菜しか食べなかつたが。

クラインド杯校内選考（前書き）

クオリティが上がりない。どんどん下がって…orz

クラインド杯校内選考

1

サバイバルが終わって一ヶ月。今日からクラインド杯の校内トーナメントが行われる。一年から四年までの学年代表クラスを三クラスずつ出場させ、その上位一チームを一チームとし、クラインド杯本戦に出場させるのが決まりだ。

ちなみに何故「チーム」なのかと言いつて、「チーム六人×一」と言つ事で十一人。十一騎士団と関連させていいるらしい。僕にはイマイチ意味が分からぬが。何故かと言うと、一チーム十二人だが、試合に出る事が出来るのは十一人の中から五人まで。最初から五人にして思つるのは僕だけだろうか？

まあ理由として相手のタイプや魔法の属性を見て誰を出すかとか、疲労が溜まらないようにするとかあるらしいが。

「さて、僕達の第一試合は何処となのかな？」

僕はそう言ひシンヤの方を見た。シンヤはトーナメント表を取り出し、僕達の相手を確認する。

「えつと……お前等は第一回戦第二試合に」「一年Bクラスとだ

「じゃあすぐに試合はあるといつわけだね

「まあな。でも、一時間位は時間があるぞ」

一時間か。長くもなく短くもない中途半端な時間だね。かと言つてただ試合を見ていゐのはつまらないし……、ととりあえず何かをして時間をつぶさないと。

「やうだ、いい忘れてたが選手にはチーム」とだが控室があるから、そこを使つていいらしく」

そう言ひシンヤは控室に行ぐルートを教えてくれた。僕は音楽を聴きながら、控室に向かつた。

2

おや、電気が点いていない。誰も来てないのかな？

そう思いながらドアノブを回す。すると案の定誰も居なかつた。

「おやこれは……入れていいのかな？」

僕は控室に置かれてゐる茶葉を見ながら、きょろきょろと回つを見る。恐らく良いと思つただが……。

「九曲烏龍……、何処かで聞いた覚えがある。ダメだ、思い出せない」

まあ飲んだら分かると思つが……。

「い、いこよね？ うん、いいぞ。いいに決まつていいー！」

僕は誰もいない部屋でそう咳いでいる僕は、さぞや怪しい人に見えただろう。まあそんな事はさておき、僕はその後お茶を入れさせてもらつた。

「この綺麗な紅の水色……」

僕はそう咳ながら口元にカップを持つていき、紅茶をする。

「……静かでやさしい味わい…………」と思出した。九曲紅梅か！ 五、六年前に口にしてから、茶葉すら見てないから忘れていた。しかし……、中華公国でしか販売していない幻の銘茶が何故此処に？」

そう、九曲紅梅は中華公国内でしか販売されていないお茶で、セルシニアでは中華公国幻の三大銘茶の一角として一部の人から絶大な支持を受けている。

しかし何故幻の銘茶が此処に？ 輸入はあり得ないし……、わざわざ買いに行つたとか？ だとしたら、どれだけ金を使つてているんだ。安物でも二五グラムで七百リートはくだらないんだぞ。しかもパツと見ても五百グラム以上はあるし、茶葉を見て飲んだから分かるが、かなりいい茶葉の様だし……、恐らく二五グラムで一千五百リートは行くだろう。

「学園長の趣味か？ しかし……、絶対にあの時の教員が此処に置いたんだよな。生徒が入れるよつに。うわあ……、哀れ）。今度何かお礼でも送るか」

今頃泣きながら茶葉を探している学園長が目に浮かぶ。サラダ油の詰め合わせでも送るかな。

そういうして、一時間ほど経つていた。僕は控室から出て、

闘技場へと向かつた。

3

出場選手エントリーが終わっていたらしく、僕以外の五人は全員そろっていた。

「やつと来たかカオル。遅いぞ」

「別に良いだろ？ 僕が出場する訳ではないのだし」

今回のトーナメントの試合は、一対一×三人で行うとの事だ。チームは六人。その中から三人を選択して出場させる。先に二勝したら勝ち。しかし第一回戦は三試合すべてを行う。

「で、誰が出るんだい？」

僕はシンに対してもう聞く。

「まず第一戦目がアリアだ。そして二戦目、これは俺が出る。最後はミリア。この三人で初戦は行う事にした」

ふむ、前衛一人が先に出て勝利を狙つと言つ事か。ミリアは回復を基本とした後衛。大丈夫なのか？

そんな事を思つていると、二戦目が終わったらしく僕達が入場する事になつた。闘技場の盛り上がりはかなりモノも。

『さあ 一回戦第三試合！！ 戰略を巧みに生かし勝ち残つて来た二

年Bクラス！ 戰略が戰術に負ける等あり得ない！！ 最後に笑うのは僕達一年Bクラスだ！！』

いつ言つ時にしか出番が無い放送部が、大声でそう言つ。

『対するは圧倒的な力を見せつけ、サバイバルを勝ち残った一年Sクラス！ 男一人に女が四人。そしてそれらすべてが美女！！ 男の敵め！ 男一人は負けてしまえ！！』

何だそれ…。と言うか今まで鬪技場にいた男子の目が変わった様な…。気のせいだ。気のせいだよね？ 気のせいだろう。うん。僕はそう信じる。

『では第一回戦三試合目、第一戦を始めましょう！…』

その声と共に、相手の一人が立ちあがり、舞台に出てきた。

「私が一戦目ね。力オル！ 見ときなさい！！ 相手を軽くひねつてあげるから！」

そう言い自信に満ちた表情で、ゲイボルグを手にして、舞台上に出で行つた。

試合開始（前書き）

久々の更新です。
まだ進路が決まっていない状態なので、何時更新できるかは分から
りませんが、少しずつ書いていく予定ではいます。

試合開始

1

アリアと相手が対じする。アリアの相手はいかにも頭が良いですよと言う雰囲気を醸し出した、メガネをかけたおかっぱの男子生徒だ。

一人が武器を構え、審判が手を上げる。

「一人とも、準備は良いですね？」

審判が一人にそう聞く。一人は頷き、再び相手の方を見る。

「では……試合開始！！」

審判がそう言い手を振り下ろした。その瞬間、アリアは行動を開始する。

「やりなさい！ ゲイボルグ！！」

アリアの手から放たれたゲイボルグは相手目掛けでまっすぐに飛び。相手はそれを涼しい表情で回避体制を取った。しかし

「！？ 分裂した！？」

ゲイボルグの能力の一つ、投げれば三十の鎌が相手を襲う。この

能力が発動し、相手を三十の鎌が襲う。

「チツ、クリアウォール！」

相手は障壁を開き鎌を防ぐが、アリアがゲイボルグを手に取り障壁ごと突き刺そうとしていた。

「私は障壁破壊前衛型なの！だからその選択は間違い…よ…！」

硝子の砕ける音が会場に響く。相手は辛うじて攻撃をかわした。

「障壁を一撃で破壊するなんて……馬鹿力め」

ボソリと呟く相手。しかしその瞬間、ゲイボルグのもう一つの能力、突いたら三十の棘となり突いたモノを破壊する。この能力で障壁は木端微塵に碎かれ、相手も棘によりかすり傷を負おう。

「フフッ、どんどん行くわよ！……ッシ！！」

アリアは相手に一気に近づき、ゲイボルグで突いて突いて突きまくる。相手は何とかそれをかわしているが、徐々にかすり傷が増えていく。

「攻撃されてばかりで溜まるか…！クリアウォール…！」

相手は再び障壁を開き、一時距離を取った。

「エアブレイド…！」

相手は風属性の中級魔法を発動する。真空の刃がアリアを襲うが、

アリアも魔法で応戦する。

「ファイアランス！！」

炎属性の中級魔法で相手の魔法を相殺し、再び近接での攻撃を始める。

「クソッ！ 壁際かよ！」

相手はアリアに壁際まで追い込まれ、ゲイボルグを回避することに専念する。しかしアリアは攻撃をしながら詠唱をする。

「世界を滅ぼす終焉の業火

天と地を分かつその業火は

七日七晩燃え続け、大地全てを消炭と変える

その業火実りし枝は災厄で

その業火纏いし杖は裏切りで

その業火光りし杖は害をなすものとなる

与えられた業火は巨人が操り

全ての世界を破壊した

焼けよ焦がれよ終わらせよ

炎属性最上級魔法＜ラーヴァテイン＞！！」

巨大な業火が相手を襲う。相手は目を見開かせ驚愕の表情を見せる。

「嘘だろ……。一年が最上級だと……。ハハハ…ジーザ ウワア
アアアアアアアア！－！」

アリアは相手の目の前で魔法を解除し、武器を納めた。相手は氣

絶しその場で倒れていた。

「勝者、アリア・ファイリーー！」

「アアアアと言ひ歎声と共に、満足げな表情で戻つてくるアリア。そして変わりと言わんばかりに立ちあがり、舞台に上がるシン。既に獲物をみつけた狼の様な楽しそうな表情を出しているシン。

「じゃ、言つてくるわ」

そう言い、ゆっくりと舞台の中心へと歩いていった。

2

「では……試合開始！」

審判が手を振り下ろす。シンはその瞬間に、エクスカリバーを地面に向けて振り下ろした。

「ウオラツーー！」

太陽の光で獄炎を作る能力で、辺り一面を火の海に変える。しかし相手は冷静にそれを対処しようと、詠唱を開始した。

「災厄の津波よ
旧世界を滅ぼし
新たな世界を創造せよ
箱舟に乗るは一部だけ

黒き歴史を消し去りたまえ

残念だよ君達、この心理が理解できないとは
諦めたまえ、この歴史は変える事ができないのだから
水属性最上級魔法＜ノアの大洪水＞！」

魔法が発動すると、大量の水が辺りを飲み込み獄炎を消し去った。

「ウワツ！？ びしょびしょじやねえか。はあ…、テンション下が
るな。でも…、本氣を出せばテンション上がるかな？」

シンはそう言いながらニヤリと笑い、エクスカリバーを口咥える。
そして手足を獣化させ、恐るべき速さで相手に斬りかかる。

「ウォラヨー！」

「なつウワツ！？」

相手は攻撃を受けながらも、ダメージを軽減すべく自らも行動す
る。

「甘い！？」

シンは手の獣化を解き、エクスカリバーを手に握り斬る方向を変
える。そして獣化したままの足で相手を蹴り飛ばした。

獣人は基本的に人間より身体能力が高いと言われている。そして
獣化によりそれはかなり強大なモノとなるらしい。その獣化された
状態で蹴られたらひとたまりもないだろう。

「舐めるな！！ アクアショット！！」

相手は水属性の下級魔法を五回程連続して発動し、簡易の弾幕を作り体制を立て直す。

「チツ、エクスカリバー！！！」

シンは即座に獄炎を作り出し、相手の魔法を蒸発させる。そのまま獣化した足で地面を踏みつけ縮地。走り始めた瞬間にトップスピードまで持っていくので、相手は一瞬シンを見失う。そして

「俺の勝ち」

エクスカリバーを首元に突きつけ笑うシン。相手は両手を上げ降参する。この瞬間、シンの勝利が決まった。

そしてその10分後

「しょ、勝者……ミリア・スレリア…」

審判が苦笑いしながらそう言つ。観客からの歓声はなく、ミリアの対戦相手は舞台の隅で泡を拭いて気絶していた。
なぜこうなったのか、それはミリアの戦い方に理由があった。

「試合開始！」

3

審判が手を振り下ろし、試合が始まった。

「回復担当らしいな！ ならよし」

相手が何かを言つている途中で、相手の顔の真横を白い閃光が走る。そしてその閃光が壁にぶつかった瞬間、凄まじい爆音が響いた。

「確かに、私は回復担当ですが……、攻撃が全くできないつてわけじゃないですよ。レールガンって知っています？ 物体を電磁誘導で加速して撃ち出す、神人の兵器です。雷属性の魔法を応用して、矢を撃ち出す。どう言う攻撃か先程のデモンストレーションと今の説明でわかったですか？ ジャあ、どんづんいくですよ！！」

そう言つてレールガンを連発して撃ち出すミリア。その顔を凄い笑顔で生き生きしていた。

「ヒツ！ ヒイイイイイイイ！－！」

相手は闘技場を逃げ回る。

「ほらほら、まだまだ矢はなくならないですよー！」

そう言いながら、相手目掛けてレールガンを撃ち続けるミリア。相手は若干涙目で

「イヤアアアアアー！－！」

と叫びながら逃げ続ける。しかしその瞬間、三本の閃光が相手を襲う。ギギギと言う効果音がつきそうな感じで首をミリアの方に向ける相手。ミリアの左手には『、右手には三本の矢が握られていた。

「フフフ、大丈夫です。ちょっと身体に風穴が空くだけです」

「ギャアアアアアーー！」

ミリアはそう言ひ二本の矢を相手目掛けて飛ばした。

凄まじい爆音と、二本の矢が頭の上と左右の壁に突き刺さり、相手は泡を拭きながら気絶した。

「しょ、勝者……ミリア・スレリア……」

審判の声と共に、ミリアが笑顔で戻つてくる。三戦三勝なのは良かったが、流石にミリアの相手には同情してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7176r/>

絶対防護の主人公

2011年11月23日12時42分発行